

# 語物ーリタイ



天發經友二 誌 集 宗 孝

# 物語一リタイ

著 郎 二 原 荏



門 旋 凱 の 馬 羅

社 會 資 合

行 發 社 友 三 京 東



38  
E



151716

## 此の本をお読み下さる

### —親愛なる小國民諸君に—

親愛なる小國民諸君！

そう呼ぶだけで、私は何とも云えぬ、明るい氣持ちになるのです。

せまい、この書齋から、私は日本全國に、それは、秋の空の輝やかしい星の様に、まんべんなく、生活してゐる、諸君の生き／＼とした姿を思ひ浮かべてゐるのです。

町に、村に、山に、海邊に、潑刺たる諸君の存在を思ふ時、日本全體が偉大なる力の塊に見えてくるのです。

私は、この諸君を思ひ浮かべながら一生懸命で、イタリヤ物語を書きました。

今、諸君の、お父さんや、お兄さんが、日本の尊い使命の爲に極寒酷暑の戦場に一



命を捧げて戦つてゐます。東洋平和の土臺石となつて、尊い血を流してゐます。

『我々は、この戦に生命を捨てよう』

そう決心する、私達のお父さんや、お兄さんは心の中で

『この後は、子供達が立派にやつてくれる』

かう考へながら、安んじて死んでゆくのです。

『後を頼むぞ、しつかりやつて呉れ』

そういふ聲が、戦場のすみぐらから、諸君に、發せられてゐるのです。

その通り！ 眞の東洋平和の樹立といふ尊い日本の使命を、なしとげるのは諸君の役目となつてゐるのです。

私達は、私達のなつかしい、お父さんや、お兄さんの尊い血の上に、輝やかしい、東洋永遠の平和をうちたてゝゆかなければならないのです。

諸君の責任は重いのです。

諸君の使命は尊いのです。

三千年來の、どの時代の祖先よりも、諸君は輝やかしい歴史をつくることが出来るのです。

諸君は、日本の、どの時代に産れたよりも、今産まれた事が幸福であるのです。

産れ甲斐があつたといふものです。

いくら一生懸命に奉公申上げても、とても、しつくされない光榮です。

私は限りなく、諸君を祝福する氣持ちで、心が一ぱいです。

諸君は、全力をあげて、この光榮に報ひなければなりません。この光榮に報ゆるこ

との出来る人間にならなければなりません。

そうした諸君のために、私はイタリア物語を書きました。

尊い使命を果たせる、血となり、肉とならせやうために、この本を書きました。

私も一生懸命で書きました。諸君の一人、一人の顔を、思ひ浮かべながら書きま

した。

この本は、イタリーの事を知らせるのが目的で書いたのではないのです。諸君を、立派な日本人にするために書いたのです。

一生懸命に読んで下さい。

まごころをもつて読んで下さい。

そして立派な日本人になつて下さい。

私は、神様と、諸君の、力によつて、立派に尊い日本の使命が、なしとげられるのを思ひながら、この本を諸君の手もとに送りとゞけます。

## ―父兄、併に教師の方へ―

私達が子供であつた時代と、今の時代は、すっかり様子が、變つてしまひました。

私達が讀んできた、讀物は、その儘今の子供に讀ましただけでは不十分になつて來

ました。

子供の讀物は、子供の魂の糧です。今までの讀物は、この魂の實體をはつきりと掴んでゐませんでした。抽象的な魂が目標でありました。

しかし、この魂こそは、日本民族の魂でなければならなかつた筈です。大和魂です。

日本の使命を果たす魂です。

東洋全土を抱擁して、天皇陛下の御聖業に翼賛し奉る魂です。正しい世界を樹立する魂です。魂の糧とは、實にこの魂の糧といふ謂でなければなりません。

そうした讀物は、今の子供の周圍にあまり貧困であるといはなければなりません。

私は、子供の讀物が、もつと／＼研究されなければならないと思つてゐるのです。

私は、そうした願のもとに、本書を書きました。少年期から青年期を目標に書いたものです。從來の讀物よりは、内容も、表現も、程度がたかくなつてゐます。私は理解

よりも、感銘に重きをおきました。從來の讀物は、あまりに子供をあまやかしすぎてゐます。

語句なども、かなり難解なものを使用いたしました。それは語句の解釋よりは、その響を、たつとんだからであります。

語句としてよりも、私はことばとして、或は形象體として、使用してゐます。要は未曾有の時局に、聖業を翼賛し奉る子供を思つて書いたものであります。

武漢三鎮陷落を目捷にひかへて

著者 識

## 目次

一 イタリアはお友達……………一

二 ローマの興起……………五

1 狼の乳で育つた英雄……………五

2 戦争部隊……………一五

三 伸びゆくローマ……………二四

1 海の女王カルタゴ……………二四

2 ポエニ―戦役……………二六

3 強敵ハンニバル……………三九

4	峻嶮アルプス越え.....	四四
---	---------------	----

5	カンネーの戦.....	五一
---	-------------	----

6	ローマ遂にカルタゴを敗る.....	五八
---	-------------------	----

四	大英雄ユリウス・ケーザル.....	六五
---	-------------------	----

1	投げられた骸子.....	六五
---	--------------	----

2	英雄の末路.....	七六
---	------------	----

五	大ローマ帝國なる.....	九三
---	---------------	----

1	オクタヴィヤヌスの制覇.....	九三
---	------------------	----

2	ローマの文化.....	一〇〇
---	-------------	-----

六	キリスト教とローマ.....	一〇九
---	----------------	-----

1	キリスト生る.....	一〇九
---	-------------	-----

2	イエス十字架にかゝる……………	二六
3	キリスト教ローマに入る……………	二九

## 七

### ローマ帝國衰ふ……………

1	ローマの皇帝……………	一五
2	ローマの黄金時代……………	一九
3	分裂するローマ……………	二三
4	ゲルマン民族の移動……………	三七
5	ローマ滅ぶ……………	四二

## 八

### 中世のイタリー……………

1	ローマ法王……………	四七
2	法王の破門……………	五一



3	十字軍……………	一五四
---	----------	-----

九	イタリー人の活躍……………	一六三
---	---------------	-----

1	歐洲の中心地……………	一六三
---	-------------	-----

2	時代の先驅者ダンテ……………	一六六
---	----------------	-----

3	地球は廻る……………	一六八
---	------------	-----

4	東方見聞記……………	一七三
---	------------	-----

5	コロンブスのアメリカ發見……………	一七九
---	-------------------	-----

一〇	イタリーの統一……………	一八三
----	--------------	-----

1	建國の志士ガヴール……………	一九三
---	----------------	-----

2	奇傑ガルバルヂ……………	二〇〇
---	--------------	-----

一一	驍雄ムツソリニー……………	二〇七
----	---------------	-----

1	鍛冶屋の子ベニト	二〇七
2	不敵な少年	二一〇
3	故郷を出づ	二一七
4	中學校を放校	二三四
5	ムツソリニー先生	二三八
6	賢母ローザ	二三五
7	どん底生活	二四二
8	母の死	二五〇
9	ムツソリニータンク	二五五
10	世界大戦	二六三
11	陸軍々曹ベニト・ムツソリニー	二六八
12	銃後ゆらぐ	二七二

13	ムツソリニー獅子吼.....	二七六
14	イタリーの苦杯.....	二八二
15	ローマ進撃.....	二九〇
16	新イタリーの偉力.....	三〇一
一一一	歴史は教へる.....	三二一

# イタリ―物語

荏 原 二 郎 著

## 一、イタリ―はお友達

今、人類は大きな仕事をなしとげやうとしてゐます。今までの人間がとても考もつかなかつたやうな、立派な尊い仕事をなしとげやうとしてゐます。

平和な、正しい人間の世界をつくらうとしてゐるのです。日本の皇軍が支那に派遣されて、果敢な活動をつづけてゐるのがそれです。

正しい道に邪魔だてする者をこらし、迷つてゐる者を導くための戦争です。だから

こんどの戦争の事を聖戦と呼んでゐます。

しかし、世の中には正しい事の案外に判らない人が多いのです。一度道に迷ふとなか／＼出られないのとおなじです。それだけに、この尊い使命を帯びた私達は心をしめてかからなければなりません。たとへ何年かからうとも、どんな苦しい事に出あふとも、決して途中でくづけてはならないのです。

私達がどうしてもやつてゆかなければならない、大切な務なのです。

世の中には判らない人や、迷つた人ばかりではないのです。正しい事は必ず誰の心にも判つて來ます。

遠い西洋に、もうすでにお友達が出來てゐます。一緒になつて、世の中を正しく、立派にうちたててゆかうといふ頼もしい國です。

それだけ云へばもうお判りでせう。伊太利ですね、皆さんにおなじみの深い、ムツソリニーと云ふ方が政治をとつてゐる伊太利です。

ヨーロッパに日本の二倍程もある大きさの地中海と云ふ内海があります。その地中海に島國ではないが、丁度長靴のやうな恰好をして、突出てゐる半島がありますね、それが伊太利です。ほとんど島國であるやうな伊太利は、日本とおなじやうな海國です。それから氣候の様子もたいへんよく日本に似てゐるし、火山や、地震の多い事も似てゐます。

それよりも、もつと大事な事は人の様子や考へ方、禮儀の正しい事、愛國心に燃えてゐる點など、たいへんに日本人に似てゐます。

よく寫眞に見るムツソリニーなども額がひろくて、眼玉がギョロツとしてゐますがどこか東洋人らしいではありませんか。

伊太利の人達も、それは／＼日本を尊敬してゐるのです。世界中で一番日本人をよく知つてゐるし、尊敬してゐるものは伊太利です。

日本と伊太利はずつと昔、日本が戰國時代と云つた時代から、關係があります。そ

の頃の日本の大名達が、はる／＼とローマまでお使を出してゐます。日本人が西洋に行つたはじめてでありませう。そのお使の繪姿が今でもローマに残つてゐると云ふ事です。

それから日本を世界中に紹介したのも、マルコ・ポーロと云つてイタリア人です。丁度支那に元と云ふ國があつて、日本に攻めて來たことがありました。

これが有名な元寇で、この時には流石の大國元も日本のために、さん／＼に打破られてしまひました。マルコ・ポーロがこの時支那に來てゐて後に『東方見聞記』と云ふ書物を本國にかへつてから書きました。その書物の中に日本の事を『ヂバング』と云つて、たいへん立派な國であると紹介したのです。

西洋人は、この話を讀んで、東の方に立派な日本と云ふ國があるのかと心から羨ましく思つたのです。

考へてゆくと日本と伊太利はなか／＼關係が深いと云ふ事が判るでせう。世界で一

番仲<sup>ばんなか</sup>よしの國伊太利<sup>くにイタリー</sup>！ この伊太利<sup>イタリー</sup>と日本<sup>にっぽん</sup>がお互<sup>たがひ</sup>に手<sup>て</sup>をとりあつて立派<sup>りっぱ</sup>な世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>をつくりあげようとしてゐるのです。

そこで、このお友達<sup>ともだち</sup>の國伊太利<sup>くにイタリー</sup>と云<sup>い</sup>ふのはどんな國<sup>くに</sup>であるかと云<sup>い</sup>ふことを、私達<sup>わたしたち</sup>が知<sup>し</sup>つておくことも大切<sup>たいせつ</sup>な事<sup>こと</sup>ですね。お友達<sup>ともだち</sup>の國<sup>くに</sup>ですから是非<sup>ぜひ</sup>知<sup>し</sup>つておかなくてはいいけません。

では、これからこの伊太利<sup>イタリー</sup>のお話<sup>はなし</sup>を一緒<sup>いっしょ</sup>に調<sup>しら</sup>べて、一體<sup>たい</sup>どんな國<sup>くに</sup>であるかを研究<sup>けんきゅう</sup>いたすことにしませう。

## 二、ローマの興起

### 1 狼の乳で育つた英雄

今<sup>いま</sup>のイタリーは、ヨーロッパでも、そんな大<sup>おほ</sup>きな國<sup>くに</sup>ではありません。



むしろ、イギリスや、フランスの方が、イタリアよりも意張つてゐます。領地なども、イギリスや、フランスとくらべれば、とてもくらべものになりません。

それでもイタリアは、

「今に見てゐろ！」

と、一生懸命です。今のイタリアをひきゐてゐるムツ

ソリニーは、よくイタリア國民にむかつて、

「諸君は、我々の祖先の偉業を思へ！」

と、はげましてゐます。

ヨーロッパでは、祖先のくらべつくらしをしたらどこ

の國でもイタリアにはかなはないでせう。

今のイタリアは最近になつて建國されたものですが、ずっと昔、今から二千五六百



羅 馬 の 狼

年も大昔になります、イタリアから興つた國にローマと云ふ國があります。

現在のイタリアの首府がローマと云ひますが、これは昔のローマの國名が残つたものです。ローマと云へば誰だつて知つてゐるでせう。このローマがイタリアの古い時代の話になるのです。

立派な國史を持つ國民程幸福なものはありません。

私は世界中の國々の歴史を調べてみて、つくぐと有難い日本の國史と、尊い日本の國體に感謝しないではいられなくなるのです。

むごたらしい祖先や、かんばしくない歴史をもつ國民はどんなに肩身がせまい思ひで生きてゐるのでせう。

イタリア國民が、小さな國になつて、しかも元氣一ぱいに、起ち上らうと云ふ意氣に燃えてゐるのはローマと云ふ歴史を遠い昔にもつことが出来たからです。

ローマは、西洋全體を統一した強い、大きな國でした。今、西洋で使つてゐる文字

をローマ字と云ふ程に文化も發達した國でした。

このローマの國を建てたロムレスと云ふ人におもしろい傳説があります。

東京に住んでゐる人や、東京に來たことのある者は日比谷公園に妙な銅像があつたことに氣がついたでせう。

未だ、東京を知らない人でも寫眞などできつと、知つてゐるに違ひないと思ひます。二人の男の子が一匹の狼のお乳を吸つてゐるところの不思議な銅像です。

これはイタリーから日本に寄贈されたもので、イタリーの古い傳説を銅像にしたものです。

この二人の子供の中の一人がロムルスと云ひます。ロムルスは、この銅像によつてわかる様に、狼のお乳を飲んで育つた子供です。牛乳や山羊の乳を呑む者はありますが、狼のお乳を呑むのは一寸めづらしい事でせう。

金太郎は、熊や猿を相手に育つたと云はれてゐます。

ロムルスは、狼おほかみの乳ちいを呑んで、狼おほかみによつて育てられたのです。

狼おほかみのお乳ちいを呑んでゐるもう一人の子供こどもはロムルスの弟おとうとレムスです。弟おとうとといつても二人は双子ふたごであつたとの事ことです。

イタリアの中途なかほどにさら／＼と流れるチペル河がはと云ふ川かはがあります。

この川かはのほとりに美しい七つの丘かみがあります。

この丘かみの上にアルバ・ロンガと云ふ國くにがあつたのです。このアルバ・ロンガの王様わうさまアマリウスと云ふ者ものは、兄あにの位くらゐをうばつて王様わうさまとなり、兄あに一族ぞくの者ものを皆みなひどい目めにあはせてしまひました。

丁度ちやうどその頃ころロムルスとレムスは生うまれたばかりの赤坊あかんぼうでしたが、生いかしておいては大おほきくなつて何なにをするかわからないと考かんがへて、チペル河がはに沈こしめてしまふことにいたしました。

ところが王わうの命令めいれいをうけて、チペル河かはに沈しづめに行いつた家來達けらいたちは、無邪氣むじゃぎな子供こどもを水みづ

に沈めて殺ろしてしまふのは、あまりにもかはいそうに思つて、こつそりと川下の方へ籃にのせたまま流してやりました。

流された双子はやがて川岸にうち上げられ牝狼に拾はれて、森の中に育つてゐたと云ふのです。

かうして狼の乳に育つた王子はやがて附近の丘に羊飼ひをしてゐたファウスツルスと云ふ者にすぐはれ名もロムルスとレムスとつけられたのです。

二人の子供は羊飼ひの子としてだん／＼に成長して來ました。

しかし、生れはどことなく違つて、氣品は自然に備はり、性質は勇敢で、頗る強くなり、たちまちの中に仲間から頭におされました。

ある時、仲間の羊飼ひ達は王様の家來達と戰をして、たくさん捕へられてしまひました。弟のレムスも亦捕へられて王の前にひきだされました。その時レムスの様子が氣高く、とても普通の人とも思はれなかつたので、王は不思議に思つて、くはし

く素性を調べさせました。そして始めて前の王様の實の孫であることが明らかになつたのです。

一方ロムルスは、仲間がたくさん捕へられたときいて、更に仲間の者共をかりあつめ、突如宮殿に攻め寄せました。それがあまりに急であつたために、油斷をしてゐた王様の家來達はたちまちに敗北して、遂に王様もその場で殺されてしまいました。そこでロムルス、レムスの兄弟は、久しく日陰の身となつてゐた祖父さんを押したてて王の位につけ、自分たちはチベル河の河畔に、新しい國を建てることになりました。

かうして、ローマの國は美しいチベル河のほとり七つの丘の上に、英なロムルスによつて、打ち建てられました。

狼の乳に育つたロムルスは、勇敢な大將でありました。ローマと國が名づけられたのはロムルスの名をとつたものであります。

これから、次第に近くの國を平らげては、國を大きくしてゆき、新らしく降参してローマ人になつた人達も、一緒に仲よく助け合つて、これより先からたいへん強く盛んであつたギリシャまでも服させてしまひました。

ローマ人は強いばかりでなく、世の中を治めてゆくのも、たいへんすぐれてゐました。

始のローマは小さい國でしたから、だん／＼に新しく征服されて、ローマ人になる者の數がましてくると、後にはローマ人よりも、それ等の人達の數が多くなつてきます。

もと／＼のローマ人は貴族と云つて、高い階級に屬し、新たらしくローマ人になつた人達は平民になつたのです。

それでも平民はよく貴族と協力一致して、國のために働いたのです。最初のうちは平民の中には貴族のやうに偉らかなれないので、不平に思ふ者もあつ

たのですが、それ等の人達にローマ人はかういふ話をして聞かせました。

おもしろいお話であるばかりでなく、世の中のしくみを上手に説明したのもあります。

昔、人の體がまだ一つにまとまらないで、手や足や口、舌、鼻などが、皆別々の時がありました。

こんな者どもは、胃が體の眞中にゐて、別に何も働かないで、御馳走ばかりもらひほかのものはただ働くだけで、うまいものは皆胃にとられてしまふのを非常に不平に思ひました。

ことにその中でも手と足とが一番不平に思つて、他のもの達と相談いたしました。

『諸君！ どうも我々はつまらない身分ではないか、つらい仕事や、嫌な事はみんな、我々がやり、うまいものをたべるのは遊んでゐる胃袋一人である。馬鹿々々しい事である。』



これから一つ、足は食事の場所にゆくことをやめ、手は食べ物を口に入れることをやめ、歯や舌は食べ物をこなすことをやめ、喉は呑みこむことをやめ皆で胃袋を苦しめてやらうではないか』

『それはいい』

『それはいい』

と、それからは、食事のしらせがあつても、足は歩るいて食堂に行くことをやめ、手は決して食べ物を口にもつて行かうとしなくなりました。

ところが胃袋も飢ゑてきましたが、同時に手も足も、その他のものも皆飢ゑてきました。

そのままでつづけると、皆總だほれになりそうになりました。

そこで胃袋は始めて、自分の役目を説いてきかせ、他のものも始めてわかつたと云ふ話です。

かうした考<sup>かんがへ</sup>違<sup>ちが</sup>ひはよく、私<sup>わたし</sup>達<sup>たち</sup>も起<sup>おこ</sup>しやすいいものです。

勿<sup>もちろん</sup>論<sup>ろん</sup>ローマ人は平民<sup>へいみん</sup>に手<sup>て</sup>や足<sup>あし</sup>となつて働<sup>はたら</sup>いて貰<sup>もら</sup>ひましたが、胃<sup>ゐ</sup>のやうに、うまいものを一人<sup>ひとり</sup>じめにするのではなく、手<sup>て</sup>や足<sup>あし</sup>の方<sup>ほう</sup>にも、それぐにわけてやりましたので世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>はよく治<sup>をさ</sup>まりました。盛<sup>さかん</sup>になつてゆきました。

どんな強<sup>がうてき</sup>敵<sup>てき</sup>があらはれても、國<sup>こく</sup>中<sup>ちゆう</sup>が一つ<sup>ひとつ</sup>のからだの樣<sup>やう</sup>に協<sup>け</sup>力<sup>りよく</sup>一致<sup>いち</sup>して戰<sup>たたか</sup>つたものですからぐんぐ<sup>ぐんぐ</sup>國<sup>こく</sup>力<sup>りよく</sup>が伸<sup>の</sup>びてゆきました。

世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>で舉<sup>きよこく</sup>國<sup>こく</sup>一<sup>いち</sup>致<sup>ぼどつよ</sup>程<sup>ちやう</sup>強<sup>ちやう</sup>い力<sup>ちから</sup>はありません。ローマの結<sup>けつ</sup>合<sup>がふ</sup>の力<sup>ちから</sup>がどんな難<sup>なんくわん</sup>關<sup>くわん</sup>を突<sup>とつ</sup>破<sup>ぱ</sup>していつたかを、次<sup>つぎ</sup>々<sup>々</sup>に話<sup>はな</sup>してゆくことにしませう。

## 2 戦争部隊

ローマが盛<sup>さかん</sup>になつてくれば、當<sup>たうぜん</sup>然<sup>ぜん</sup>こに衝<sup>しやう</sup>突<sup>とつ</sup>しなければならぬ大<sup>たい</sup>國<sup>こく</sup>がありました。それはギリシャとの争<sup>あらそひ</sup>です。

ギリシヤは、ローマより一足さきに、榮えた國です。

文化も進んでいるし、國力も張つてゐた國です。インクの中にアテネインクや、プラトニンクなどありますが、そういふのはギリシヤの町の名や、學者の名をつけたものです。

それよりも四年に一度づつやるオリンピック競技を知らない人はないでせう。この競技は、近頃新しく始まつたものであるが、然しこれはもう二七〇〇年も昔に、ギリシヤ人がやつてゐたのを真似してはじめたものです。

その頃のオリンピック競技は、今のよりも、もつと人氣があり、そしてもつと力をいれてやつたものです。

ギリシヤで一番偉い神様がゼウスと云ふのですが、その頃ゼウスをまつる一等立派なお宮がオリンピックにあつたのです。

そのオリンピックで、この神様をお祭りしようとして、ギリシヤ人が始めた大競技會

がオリンピック競技です。そのほかに、彫刻でも建築、詩、芝居、學問、すべて、今の時代でも、とても及びもつかぬ程進んでゐたものです。領地もたいへん廣くもつてゐて、イタリアの一部もギリシャの植民地になつてゐました。

今や將に起らうとしてゐる質實剛健なローマ人がこの不名譽を捨てておくわけはありません。

しかし一方は大國ギリシャです。東西の諸民族と幾度か大戦争をしてきてゐる、戦争の方法も、新しい立派な武器もたくさんあるギリシャです。

イタリアにあるギリシャの植民地は、だん／＼とローマにおかされてきましたから本國ギリシャに援をもとめました。そこでその頃の王様ピロスは直ちに大軍を率ゐてイタリア半島に上陸してきました。

あらゆる文明の利器をもつ三萬五千の老大國ギリシャ軍と、新興ローマ軍が一大會戦をするといふのです。

兩國にとつての關原の合戦です。

新興ローマがおさへられてしまふか、ギリシヤをおしのけて、ローマが進んでゆくかの戦です。ローマ人も強いのですが、しかしギリシヤ隊の中には、その頃の世界をふるへ上からせた長槍密集隊があります。

殊にローマ人をびつくりさせたのは戦象部隊でありました。

昔のタンク隊です。

これはギリシヤ人がペルシヤやインドを攻めたときに、おぼえてきた東洋の戦法です。

巨大な戦象を第一線に、側面に長槍密集隊を配陣して、突貫してきたのですから、流石勇猛果敢なローマ人も手が出せません。

大體がローマ人は象といふ動物を知らなかつたのです。

巨大な體軀をした牛だと思つてゐたのです。

この鼻はなのながい牛うしは、グズ／＼してゐれば人間にんげんをふみつぶす、鼻はなでまき上げる、目め茶苦茶ちやくちやくにあばれまはる。まつたくの手ての下くだしやうがありませんでした。

しかし愛國あいこくの精神せいしんに燃えるローマ人じんは舉國きよこく一致いちよく戦たたかひました。

當時たうじのローマ人じんが如何いかに廉潔剛直れんけつかうちよくな武士ぶし的美風てきふうを持つてゐたかの實例じつれいを話はなして見みませう。

將來大國家しやうらいだいこくかをつくり上げる様やうな國民こくみんの性質せいしつには流石立派さすがりつぱなところがあります。

ローマとピロス王わうと一激戰いげきせんをした後のち、捕虜はりよを交換かうかんするためにファブリチウスと云いふ勇士ゆうしがローマから使者ししやとしてピロスの陣中せんちゆうに送おくられました。

ファブリチウスは木村重成きむらしげなりのように勇氣ゆうきもあり、愛國あいこくの念ねんも強つよく、心の正ただしい人ひととして評判ひやうばんのたかつた人ひとです。

ピロス王わうはファブリチウスをためしてやらうと思おもつて、たくさんのごちそうをしたあとで、めづらしいたからものをいろ／＼と贈物おくりものとして呉くれました。本國ほんこくから持もつて

きたものや、東洋印度の方面のたからものを山のように贈物したのであります。しかしファブリチウスは少しも喜ぶ風もなく、みんなかへしてしまひました。

そこで翌日はファブリチウスの勇氣をためしてみようとして、幔幕の蔭に大きな象を一頭しのばせておきました。ファブリチウスが入つてくるや、いなや突然幕を開かせました。巨象は忽ち現れて、其の大きな鼻で、彼の頭をボタンと叩いたのです。

けれどもファブリチウスは、泰然自若、につこりと笑つて、

「王よ、昨日の黄金も今日の巨獣も、われ／＼ローマ人を動かすにはあまりに、かるからう」

と、云つたので、流石のピロス王も深く感心し、捕虜全部を無條件で引渡したといふ事です。

ローマ人はたいへんに日本の武士に似てゐるではありませんか。

かうしたローマ人は、どんな窮地に陥つても決して屈服しませんでした。

負ければ、いよく志をかたくし、敵の戦争のしかたや、武器を研究して、あくまで戦ふ。堅忍持久の國民でありました。

ギリシヤは、ながい事、ローマとにらみあつてゐたが、なか／＼に降服してこないのていよ／＼ローマの周囲の國と同盟を結び、一舉におしつぶしてやらうと、決心しました。

しかし、その頃はローマでもすつかり、ギリシヤ軍と戦ふ方法を案出してあつて、勇敢に防ぎたたかつたものですから、なか／＼に思ふようにかたづきませんでした。そこでギリシヤは例の戦象部隊をくりだして、ローマ軍を困らせてやらうとしたのです。

ローマの方だつて、そう幾度も戦象に悩まされる筈がありません。

戦象部隊が第一線に現はれると、ローマ軍は待つてゐましたと、矢を雨のやうに射かけたので、大きな針鼠が出来上がつてしまひました。



そこへ、車の前に鐵棒を結びつけ、その端に鐵の籠をつり、その中に猛火を入れて之を象の鼻先に突きつけてきました。

さあ驚いたのは象です。動物は猛火が大きらひ、火を見ると、味方の陣に逃入つて目茶苦茶にあばれました。あばれたした象は始末がわるい。ギリシヤ軍は逆に自分の方の戦象部隊のために、さんくに傷つけられてしまいました。

長槍密集隊に對しては、側面からはさみうちにする方法をもつてしたので、さすがのピロス王も南イタリヤのデンタツスに大敗して本國に逃げかへつてしまいました。

かうしてチベル河のほとりの田舎町から起つたローマは、今や大國ギリシヤを打ち破つて、イタリー半島の大部分を征服してしまいました。

藤原氏を破つて都に入り、都の風にしみた平家は、勇猛果敢な鎌倉武士のために亡ぼされてしまひました。

美しい文化を築いた大ギリシヤでありましたが、愛國の至誠に燃ゆる田舎町のロー

マの勇敢ゆうかんさには勝かてなかつたのです。何十倍なんばいと云ふ領地りやうちと、進すんだ武器ぶきを持もつてゐた

ギリシヤも、ローマに對たいして勝かつことが出来でませんでした。

強つよい國くにといふことは決けつして、大おほきな領地りやうちと進すんだ武器ぶきと、たくさんの軍隊ぐんたいをもつてゐることのみではありません。

國民こくみんの心こころがしつかりしてゐて、どんな困難こんなんにもうちかつてゆく堅忍持久けんじんちきうの力ちからが強つよいかどうかといふことです。

『おごる平家へいけは久ひさしからず』といふように、立派りっぱな文化ぶんかを産うんだ頃ころのギリシヤ人じんの心こころはだん／＼と弱よわつてきました。

一方いっぽうは旭あさひのような勢いきほひで伸のびてきたローマですからたまりません。

一たまりもなくギリシヤは打ち破やぶられてしまひました。

### 三、伸びゆくローマ

#### 1 海の女王カルタゴ

伸びゆくものは、あらゆる難關なんくわんを突破とつぱしてゆかなければなりません。

あらゆる難關なんくわんを越えて、つき進すすんでゆく力ちからだけが伸びてゆくのです。

どんな場合ばあひでも、困難こんなんなしに發展はつてんしていつたためしはありません。

丁度日本ちやうどにっぽんが、いま、世界せかいにむかつて、伸びやうとしてゐる時ときなのです。祖國日本そこくにっぽんは

朝日あさひのさし昇のぼる勢いきほひで發展はつてんしようとしてゐます。したがつて、苦しみや、困難こんなんは、當たう

然ぜんやつてくるのであります。

迷まよつた支那人しなじんが日本にっぽんと長期抗戰ちやうきかうせんをしやうとしてゐます。ロシアや、イギリス、フラ

ンスなどといった國が、その支那を助けてゐます。

イギリスや、フランスは國のなりたちや、國の様子がロシアと全然違つてゐます。

むしろ、ロシアはイギリスや、フランスの敵であるといった方がいいでせう。そういう國たちが一緒になつて、支那を助けてゐます。お互に睨み合ひをしながら、支那を助けてゐます。

イギリス、フランス、ロシアと云へば、これで全世界の半分以上の力のあつまりです。

これで日本の伸びゆく力をさまたげようとしてゐます。

私達は本當に心をひきしめて、どんな不自由でも、どんな苦しみでも、必ず我慢してやつてのけると決心をしなければなりません。

チベル河のほとり、一田舎町から起つたローマは一大強敵ギリシヤを破つたではありませんか。ギリシヤを破つて、イタリア半島を統一することが出来たのです。

しかも、ローマはこれだけで満足いたしません。はりきつたローマの力は國外にまでほとばしり出ないではいられなかつたのです。

ローマは更に一段と伸びようとしてゐます。更に一段と發展しようとしてゐます。だが、伸びる力の前には必ず難關が横たはつてゐます。この伸びんとするローマの前に横たはつてゐた力はとても支那などくらべものにならない程の怪物です。ローマはこの怪物をたたきのめさなくてはなりません。これからの話と、現在の日本と、よく似てゐます。私達は神州日本國民です。ローマ人以上の力がある筈です。この話は私達にいろ／＼と教えてくれるところがたくさんあると思ひます。

では一體、伸びるローマの前に山の様にたちふさがつた怪力とはそも一體何者でせう。

それはアジヤのシリヤの北から起つたフェニキヤ人であります。

フェニキヤ人は商賣の上手な民族で、ギリシヤ人がまだ盛にならない頃から、地中

海一帯に船を乗り廻して、手廣く商賣をやり、そのために、行く先々に植民地をつくりました。

ギリシヤが興つてからは、東の方ではギリシヤに押されてきたから、次第にイタリ―から西の方へ勢力を伸ばしてゆきました。

そして、その一番大切な根據地がアフリカのカルタゴでありました。

カルタゴの町は人口は數十萬もあり、町の廻りは堅固な城壁で固め、港には出船入船の帆柱が何時も林のように群りたち、そのころの世界で一番富んだ町でありました。地中海一帯の商賣は一手にカルタゴが握つてゐました。それを守る海軍がまた世界第一の大海軍で、その乗組員の軍艦の扱ひようのうまいことでは、他に絶対に比べるものがない程でした。

カルタゴはかうして、地中海の支配者であつたから、『海の女王』と云はれたものです。

剛健な精神と、強烈な愛國心のあふれる勇敢な陸軍で、イタリー半島を征服したローマが、尙、それ以上に發展していかうとすれば、どうしても海上に乗り出していかなければならない。

海には海の女王カルタゴがゐます。

ローマ人は陸ではギリシヤを破つた自信をもつてゐますが、海の方は不得手です。カルタゴの方は海では世界一です。

だが伸びんとするローマはどうしてもカルタゴと衝突する運命は逃れられません。新しく興つたローマと世界最強の海軍をもつカルタゴとが、これからながいあひだ争ふことになりました。

## 2 ポエニ―戦役

イタリー半島を長靴にたとへるならば、その爪先の向うに、三角形の大きな島があ

ります。

それをシシリー島と申します。

この島の大部分はカルタゴの勢力の中に入つてゐました。

ローマと、カルタゴはせまいこの海峡を隔てゝ睨みあつてゐた譯です。

ところが、このシシリー島の中のイタリーよりのシラクサと云ふ町で騒動が勃發いたしました。

シラクサの人達はこの騒動を鎮めてもらひたいとローマに頼んで來たのです。

しかし、カルタゴ軍がシシリー島には駐屯してゐる。ローマが出兵すれば、どうし

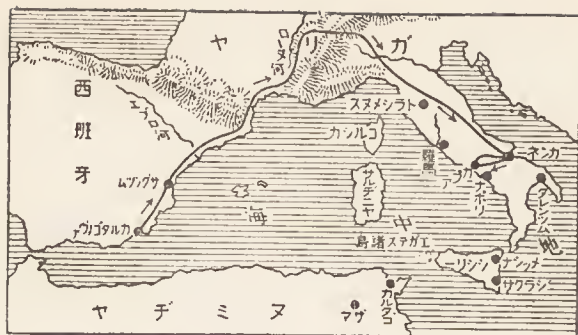
てもこのカルタゴ軍と衝突しなければならぬだらう。カルタゴ軍と戦争すれば、先づ勝つ見込みがない。

相手は世界最大の海軍國であり、國力も充實してゐる國である。

勇猛果敢なる國民を擁するローマではあつたが、流石に迷つてしまひました。役人



達は兵をだすまいとすら考へたのであります、しかしローマの國民はたとへ百年でも



ポエニ戦争の地図

二百年でも必ず戦ひぬいて見せると、遂にシシリー島に兵を出すことにしました。

カルタゴは大いに憤つて、『生意氣なローマ奴』と直ちに宣戦を布告しました。

今より約二一七〇年程昔、西洋紀元がはじまる二四一年も昔のことであります。

そこでいよいよこれまでの歴史で、最も大きな、そして、最もながくつづいたローマ、カルタゴの戦、ポエニ戦争の火蓋が切つておとされることになりました。

ローマの大非常時です。ローマは半島で海の中に

ある國くにです。しかもローマには海軍かいぐんはありません。カルタゴの海軍かいぐんはローマのぐるりをとりまくでせう。

これから前後ぜんご百年ねんにわたる一大長期抗戰だいちやうきかうせんが展開てんかいされるのです。

シシリー島たうに上陸じやうりくしたローマ軍ぐんは天てんを衝つく様な元氣げんきでぐんぐんと、カルタゴ軍ぐんを破やぶつてゆきました。

しかしシシリー島たうの西にしの方はカルタゴの得意とくいとする海軍かいぐんが守まもつてゐるために、なか／＼強く、流石さすがのローマの陸軍りくぐんでも陥おとしれることができません。

その中うちにカルタゴの海軍かいぐんはローマの本國ほんこくに出張でばつて行いつて、すつかり海岸線かいがんせんを封鎖ふうさしてしまひました。

これでは、海軍かいぐんを持たぬローマは、絶對ぜつたいに勝かつことが出来できません。すつかり、弱よわつてしまひましたが、ローマ人じんは決けつして、へたばつてはしまひません。

かつて、ギリシャの戰象部隊せんぞうぶたいに悩なやんだローマは、忽たちまち新しい戰争せんそうの方法はうふを考かんがへて、

これを打ち破りました。

よし！ カルタゴが強い海軍をもつてゐるならば、こちらでも海軍をつくつてやう。しかも、カルタゴよりも強い海軍をつくりあげようと、戦争最中に不撓不屈のローマ人は決心いたしました。

勝つまでやらうと云ふのがローマ人の氣風です。國家のためなら、身を粉砕されても決して屈伏しないと云ふ義勇奉公の念の強いのがローマ人の美風です。

丁度、その頃イタリー沿岸の淺瀬に乗り上げて捨てゝあつたカルタゴの軍艦を一艘發見いたしました。

カルタゴの軍艦は、どこか軍艦よりも、進んだ、大きいものです。

ローマではそれを手本として、たつた二ヶ月の間に大軍艦百艘、小軍艦二十艘をつくり上げてしまひました。軍艦をはじめつくつたローマ人です。まづたく驚くばかりの早業ではありませんか。

そればかりではありません。ローマは、ローマ特有の軍艦を、そして戦争の仕方を考案いたしました。

カルタゴの軍艦をまねてつくり、カルタゴの海軍と同じ海軍を、ローマでつくりあげて見ても、とても、かてるものではないのです。

船をあやつり、船で戦争することにかけては、世界中、どこだつて、カルタゴに勝てつこないのです。

さて、ローマには軍艦ができたが、海軍が一人もゐません。乗組員がないのです。陸軍が船に乗つたつて、船がうごきません。しかし、陸軍が乗るより別に方法がありません。

そこで、ローマでは、どうしても陸軍が海上で戦ふのですから、カルタゴ人の得意とした艦首の衝角で敵の艦腹を貫くとかわが艦腹で、敵の櫓を折りとつてしまふなどと云ふ、むづかしい戦法は到底出来ません。

船を漕ぐことすらうまく出来なくて、ギリシヤ人を雇つた程ですから、ローマにはローマ特有の戦争方法が必要になつてくるわけです。

それは船の帆柱に吊り橋を吊し、それがどの向きへも自由に廻るようにし、その吊り橋の端にはすばらしい大きな釘を下向けにつけたのです。

海上で敵の船に出會えば、その側に近づき急いで吊り橋を下ろして二つの船を結びつけてしまふのです。かうなれば、もうしめたものです。強い陸兵が、その吊り橋を渡つて、敵艦に斬りこむのです。

弘安の役の時、蒙古の大船に斬り込んだ、日本武士によく似てゐるではありませんか。

これから戦況が一變いたしました。そのわけはこの吊り橋戦法が成功して、弱い下手な筈のローマの海軍が、非常に強いカルタゴ海軍を苦しめたからです。

ローマの新海軍は、まづ最初にシシリー島の北の角の沖合ひで、カルタゴ海軍と衝

突いたしました。

カルタゴ軍は、何の猿の人真似奴と突進してきました。

カルタゴ海軍は、その船が大きくて強く、その船の乗り廻しが上手ですから、敵の船の横腹に衝突して勝つ戦法をとりました。

ローマの方では、待つてゐました、とばかり、すぐに吊り橋を下ろして敵艦に渡し架け、その吊り橋を渡つて、敵の船に乗り移り、劇しく斬り込みました。

強いローマの兵に斬りこまれたらたまりません。そのまゝ、そつくりローマ軍に奪はれた軍艦が五十艘、その他の敵艦は、或は碎かれ、或は逃げて、ローマは初めてやつた海戦に大勝利を得ました。ローマは國をあげて喜びました。

四年の後に、第二回的大海戦が、こんどはシシリー島の南側の沖で開かれました。兩軍の軍艦併せて八百艘、これまでにない一大激戦でした。

カルタゴの海軍はしきりと衝突しようと、突進してくるのですが、ローマの軍艦は

待ちかまへてゐて、手早く吊り橋をひつかけ、勇敢に斬りこみ、カルタゴ軍はまたもむざ／＼と打ち破られ、三十餘艘は沈められ、六十餘艘は捕獲され、その他は逃げかへり、また／＼ローマの大勝利となりました。

かうして二十四年にわたる第一回ポエニ戦にはカルタゴが大敗いたしました。海軍を持たなかつたローマが、世界最大の海軍國カルタゴを打ち破つたのです。誰が考へたつて、ローマが勝つ筈がないのです。領地の點から云つても、お金の點から云つても武器の立派なものから云つても、決してローマは、カルタゴの敵ではなかつたのです。

その上にカルタゴは、ながい間榮えてきた國だし、ローマは建國して日向淺く、イタリー半島を統一するのに、強國ギリシャと戦つてつかれてゐました。

第一回のポエニ戦争は二十八年も長い年にわたつて、戦つてゐます。

どうして、ローマは二十八年も戦をすることが出来たのでせう。一體、どうして

ローマがカルタゴに勝つ事が出来たのでせう。

このところは、私達がよく考へて見なくてはなりません。

とてもかてる見込みのない戦に勝つた。勝つには勝つだけのわけがなくてはなりません。そも／＼それは何であつたのでせう。何がローマの方がカルタゴよりすぐれてゐたのでせう。

それは全く、ローマ人の性質がカルタゴ人よりもすぐれてゐたと云ふ事なのです。カルタゴ人は、自分から第一線にたつて戦争をする事をきらつて、アフリカや、イスパニヤの土人を傭つて、兵士としてゐました。

ところが、ローマ人は全國皆兵、國民全部が兵役の義務を持つてゐて、しかもその兵士達が勇敢であり、義勇奉公の念に富んでゐたのです。

これです。給料を貰つて働いてゐる兵士と御國のために命を捧げて戦ふ兵隊と、それはどうしても力が違います。



傭はれた兵士は、給料のために働くのです。給料を呉れなければ、したがつて、戦はぬといふことになります。

ローマの兵隊は祖國の爲に働くのです。これが強いのです。この力が何物をも打ち破つて進んでゆく力となるのです。

我が日本が何故強いのかと云ふことも判りますね、そして日本こそは一番強い筈だと判ります。ローマが強かつたのは、日本のような國であつたからです。

私達が銃をとつて第一線にたつのは、決して、自分の名譽や、お金の爲ではありません。せん。祖國日本のため、天皇陛下のために、一身を捧げて戦ふのですね、これこそは日本の誇りであり。日本の強いわけがらであります。そしてそれは召集されたからとか、義務だからと云ふのではなくて、かうしなければいけない、尊い、日本人の血の流れが、私達にそうさせないではおかしいのです。

とにかくにも、ローマは勝つた、勝つたが二十八年も戦つて勝つたのです。戦争中

も戦<sup>か</sup>ちつづけたのみではありません、時には、ローマの艦隊<sup>かんたい</sup>が全滅<sup>ぜんめつ</sup>に近い<sup>ちか</sup>うき目<sup>め</sup>を見<sup>み</sup>たこともあります。

全力<sup>ぜんりよく</sup>をあけて戦<sup>たたか</sup>つたのです。勝<sup>か</sup>つには勝<sup>か</sup>つたが、ローマの疲<sup>つか</sup>れ方<sup>かた</sup>もずいぶんひどかつた譯<sup>わけ</sup>です。

そこで恨<sup>うらみ</sup>をのんで和議<sup>わぎ</sup>を結<sup>むす</sup>んだカルタゴはシシリー島<sup>たう</sup>をさき、たくさんの償金<sup>しやうきん</sup>をやることにしましたが、この仇<sup>かたき</sup>はかならず、とつて見<sup>み</sup>せると、國中<sup>こくちう</sup>の人が齒<sup>は</sup>ぎしりをかんでゐるのですから、まだローマは油斷<sup>ゆだん</sup>をすることが出来<sup>でき</sup>ません。

これからカルタゴは百年<sup>ねん</sup>もつづいて、ローマに寇<sup>あだ</sup>をつづけるのです。そのうちにカルタゴには、天下<sup>てんか</sup>の名將<sup>めいしやう</sup>とうたはれるハンニバル<sup>ハンニバル</sup>が<sup>で</sup>出てまいりました。

さて、ローマは、英雄<sup>えいゆう</sup>ハンニバルをむかへてこの大非常時局<sup>だいひじやうきよく</sup>を如何<sup>いか</sup>にきりぬけてゆくことでせう。

### 3 強敵ハンニバル

物の數にも思はなかつたローマに惨敗したカルタゴ人の血は無念にたぎつた。

何としても、この恥を雪がなければならぬ。泣き寝入りをしてはならぬとカルタゴ人はくやしがりました。

この代表者が、勇將ハミルカル・バルカスです。

バルカス將軍は誓つてローマを打ち破つて仇をうたなければならぬと思ひました。

ローマに勝つには、第一にローマから受けた損害を補ふ方法を考へなければならぬ。そして、その上にローマと戦ふだけの準備をしなければならぬ。

この目的を達する爲にバルカスは、イスパニヤ征伐をする事に致しました。

イスパニヤを征伐して、そこでローマと戦ふ準備をすすめることにいたしました。

バルカスは大望を抱いて、故國を去るにのぞみ、やうやく九歳になつたばかりの子ハンニバルを、國神の神殿前に連れて行つて、熱い涙を流しながら言ひました。

『ハンニバルよ！



ルバニンハ

お前はまだ子供であるが、父の言葉を、よく聞きなさい。

ローマ、あのローマは實に憎い國ぢや、祖國カルタゴに再三恥をかゝした敵ぢや。これに怨を返すことは瞬く隙も忘れてはなりませんぞ』  
少年ハンニバルの瞳は熱し、輝いた。

『父上！』

命のあるかぎり、祖國カルタゴのために、誓つてローマを打ちほろぼします』  
そう言つて、神殿にむかひ

『神よ願はくば我等父子にローマを討たしめ給へ』  
と、父と共に祈りました。

かうして、電火將軍と云はれたバルカスは、一族郎黨を引きつれて、イスパニヤに渡りました。

それから八年程は月日が水のやうに流れ去りました

その間、ハミルカル、バルカスとハンニバルとの復讐心には少しも變りはありませんでした。

父子は兵卒と共に汗と血にまみれて、イスパニヤの大部分を征服いたしました。土人を征服して、大きな軍隊も作りしました。銀山を掘つて、軍資金も出しました。準備が著々と進んで、今やローマ攻撃の時の来るのを待つてゐましたが、残念なことにバルカスは蠻人との戦ひに討死し、空しくローマの天を睨んで異國の土となりました。

この父の後をついでたつたのが、當時十九歳の青年ハンニバルです。

ハンニバルは生れつき賢く、元氣のある立派な若者でした。

カルタゴの將兵達は、ハンニバルの温かい情と、その賢さうな人となり心をはかれました。

猛將ハミルカルの血をうけ、戦争の中に育ち、體格强健、百般の武技に長じ、心身

共に戦場の艱難に慣れ、一週間は眠らず食はずにゐて、しかも疲勞をしなかつたと云ふハンニバルです。

戦争の方法がうまく、やりかたが機敏で、立派な大將としての資格をもつてゐました。そこで、カルタゴ人は、ハンニバルを神様のようかみさまに敬ひ、とう／＼大將軍に押したてました。

大將軍になつてからも、彼は兵卒と共に苦勞を共にいたしました。自分ばかりゆつくり眠るようなことは決してしませんでした、番兵の立番してゐる横にござりと横になつて、夜をすごすこともありました。

こんな風でしたから、カルタゴの兵士達はこの大將のためならば、身も心も捧げたと思ふようになりました。

ローマにとつて恐ろしい強敵が出現したわけでありませう。

あけくれ、ハンニバルの胸を波立たしめてゐるものは、無念の涙を呑んで異國の土

に化<sup>くわ</sup>した父<sup>ちち</sup>の心<sup>こころ</sup>であり、ローマ復讐<sup>ふくしゅう</sup>のことばかりであります。

しかも兵力<sup>へいりきよく</sup>はととのひました。軍資金<sup>ぐんしんきん</sup>も十分<sup>ぶぶん</sup>です。ハンニバルの胸<sup>むね</sup>の血潮<sup>ちしほ</sup>は燃<sup>も</sup>えたちました。臥薪嘗膽<sup>ふしんじやうたん</sup>二十年<sup>ねん</sup>。宿望<sup>しゆくぼう</sup>を果<sup>は</sup>たす準備<sup>じゆんび</sup>は出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>上<sup>あ</sup>つた。

おゝ、祖國<sup>そこく</sup>カルタゴよ、今<sup>いま</sup>や熱血<sup>ねつけつ</sup>の青年<sup>せいねん</sup>ハンニバルが、一鞭<sup>いちせん</sup>あげれば、雪辱<sup>せつじよく</sup>の火蓋<sup>ひぶた</sup>は切<sup>き</sup>つておとされるのだ。

東ローマの天<sup>てん</sup>を睨<sup>にら</sup>んで、ハンニバルは獨<sup>ひと</sup>り微笑<sup>ほゝみ</sup>んだ。

征<sup>ゆ</sup>け！　ローマへ！　ハンニバルの瞳<sup>ひとみ</sup>は熱血<sup>ねつけつ</sup>に燃<sup>も</sup>えてゐます。

まこと、ローマは風前<sup>ふうぜん</sup>の燈<sup>とう</sup>と云<sup>い</sup>はなければなりません。

#### 4 峻嶮アルプス越え

果然<sup>くらぜん</sup>、ハンニバルは起<sup>た</sup>ち上<sup>あ</sup>つた。

父<sup>ちち</sup>の遺志<sup>ゐし</sup>だ、祖國<sup>そこく</sup>の仇<sup>あだ</sup>だ、十萬<sup>まん</sup>の軍勢<sup>ぐんせい</sup>に命<sup>めい</sup>令<sup>れい</sup>が下<sup>くだ</sup>つた。

途中、ローマの植民地を、軍門の血祭りにあげて、旗鼓堂々ローマ出征の進軍が開始された。西暦紀元二一八年前、我が孝靈天皇の七十三年である。第二回ボエニ戦争はかくして破裂しました。

エプロ河をわたり、ガリヤを過ぎ、イタリア半島を目指して、無敵ハンニバル軍は勇ましく進軍いたしました。

しかし、イスパニヤからローマに攻め入るにはあの有名なアルプスの嶮を越えなければならぬ。二萬尺富士山の二倍もあらうと云ふアルプスの峻嶮がカルタゴ十萬の軍勢の前に立ちふさがつてゐます。

義経のひよどり越えどころのさはぎではありません。流石のローマも、アルプス山脈には氣を許してゐます。

今でも、十分の用意をして登るに危険な山脈です。勿論四季を通じて雪にとざされてゐます。雪崩は時を定めずにやつて來ます。ハンニバルがアルプスの麓に著いたの



は十月も、もうすぎた秋の終です。軍隊は南歐イスパニヤに生れた、暖國育ちです。未だに越えた人のないアルプス峠のふもとにハンニバルの軍勢は到着いたしました。山を越えれば仇敵ローマです。

唇を眞一文字に結んだ剛毅果斷の將軍ハンニバルは、雲の中に聳ゆるアルプス山脈を望んで高らかに叫びました。

『進軍!』

實に前古未曾有の一大壯舉です。

二萬尺を越ゆる高峰は、眞白な雪に覆はれて、雲を貫ぬき、天に連つて數百里の間に横たはつてゐます。

はてしなくつづく道を、カルタゴ軍は肅々と登つてゆきます。

陣頭に立つハンニバルの姿に魅せられた様に十萬の軍勢は登つてゆきます。

歩兵、騎兵、輜重兵、戦象隊、氷雪を蹶つて、堂々と登つてゆきます。

嗚呼、アルプス越え！　とても人間業とは思はれません。決死の進軍です。

道もありません。吹雪と雪崩です。鳥や獣のやうに敏捷な野蠻人の襲撃があります。蠻人どもは峯から大きな石をころがします。寒さと、飢と疲れが襲つて來ます。

流血をもつて、積雪をそめつゝ、日々數千人の犠牲を出しながらも、ハンニバルの志は屈しません。一步は一步よりも高く、九日目にはとう／＼頂上に達しました。

見よ、眼下にはイタリーの平原が一瞬の中に遙々と展開されてゐるではないか。夢にも忘るることの出来なかつたローマだ。ハンニバルは全軍を顧みて、

『諸君！』

仇敵ローマは我が足下にあり

汝等は己に勝利者なり。』

兵士達はわつと感激の歡聲をあげました。

勇氣百倍して、進撃の歩を進めました。かくして十五日目、突如としてイタリー平

原<sup>けん</sup>にカルタゴの軍勢<sup>ぐんせい</sup>があらはれたのだ。

感激<sup>かんげき</sup>に狂<sup>くる</sup>ふカルタゴ軍<sup>ぐん</sup>が現<sup>あら</sup>はれたのだ。

驍將<sup>せうしやう</sup>ハンニバルが現<sup>あら</sup>はれたのだ。

全<sup>ぜん</sup>ローマは驚愕<sup>きやうがく</sup>に色<sup>いろ</sup>を失<sup>うし</sup>つた。

ローマからは直<sup>た</sup>ちに四萬<sup>まん</sup>の大軍<sup>たいぐん</sup>がさしむけられました。十萬<sup>まん</sup>のカルタゴ軍<sup>ぐん</sup>も無事<sup>ぶじ</sup>にイタリーに到著<sup>たうちやく</sup>したのは僅<sup>わづ</sup>かに二萬六千<sup>まんろくせん</sup>、象<sup>ぞう</sup>は十數頭<sup>じゅうとう</sup>しかなくつたのです。

ハンニバルは山<sup>やま</sup>を出<sup>で</sup>てから三日<sup>さんか</sup>もたゝない中に、この大軍<sup>たいぐん</sup>に襲<sup>おそ</sup>はれることになりました。

そこでハンニバルは全軍<sup>ぜんぐん</sup>を集<sup>あつ</sup>めて、

『諸君<sup>しよくん</sup>！

後<sup>うしろ</sup>にはアルプスの山<sup>やま</sup>があるのだ。前<sup>まへ</sup>には、ポー河<sup>か</sup>が流<sup>なが</sup>れてゐる。

我々<sup>われ</sup>はどこにも行<sup>ゆ</sup>けない。負<sup>ま</sup>けたら一人残<sup>ひとり</sup>らず死<sup>し</sup>なねばならないぞ』

と、悲壯な面持ちで述べました。

この苦しい氣持ちは全軍に電氣のやうに傳はりました。

勝つより他に生きる道がない！

カルタゴ軍は、まこと、命がけで戦ひました。命がけの力はおそろしい。小勢の、しかも疲れきつてゐる筈のカルタゴ軍は、見事に、ローマの大軍を破つてしまひました。この第一戦勝の後、ハンニバルはとん／＼拍子にローマの軍勢と、戦つては勝ち、戦つては勝つて、だん／＼と深く攻めいりました。

北部イタリアの植民地は、ハンニバルの勢におそれて、皆ローマに叛いて、ハンニバルの味方となり、ハンニバルの軍勢は次第に補充されてきました。

めざすローマも次第に近くなつて來ました。

全軍の意氣ます／＼さかん、天を衝くの慨がありました。

全軍は、勇みに勇んで南へ、南へと進軍いたしました。

ローマの一大非常時です。

兵を用ゆること神の如し、復讐の權化ハンニバルの軍勢は次々にローマの軍勢を打ち破つて進みます。

敗報に敗報のつづくローマの町は、失望と恐怖に慄きました。

しかし艱難に耐へ忍ぶことのすぐれたローマ人は、直ちに勇氣を恢復して、新に軍隊を編成しては、北へ北へとハンニバルを迎へ討つ爲に出發してゆきます。

そしてローマ軍も次々に敗れていくのです。トラシメヌ湖畔の戦の如きは、激戦數刻にして、ローマ軍は惨敗し、斬られる者、湖水におぼれる者、數知れず、總大將は討死し、捕虜六千を残し、その他の者はチリ／＼となつて逃げ去りました。

シシリ島の戦でカルタゴの大艦隊を破つたローマの元氣は、一體どうしたのでせう。ハンニバルには遂にローマも勝てないのでせうか。出陣しても出陣しても皆敗れてかへつてきます。

そしてローマの町まちの目前めのまへにハンニバルは逼せまりました。

## 5 カンネーの戦

ハンニバルは、まこと、天下てんかの名將めいしやうでした。根據地こんきよちイスパニヤとは、アルプス連峯れんぱうでたたれ、本國ほんこくカルタゴとの間あひだは數百すう哩マイルの大海原おほうなげらです。

それでも、次々つぎと、途中とちうの民族みんぞくをしたがへては、自分じぶんの軍隊ぐんたいにしてゆくのです。

流石さすがのローマも手てが出だしかねてゐました。それでも放はつてはおけません。次々つぎと軍隊ぐんたいを送おくります。最後さいごの一人ひとりになるまで戦たたかふと云ふのがローマ人じんです。

またも八萬まんと云ふ大軍たいぐんを組織そしきして、ハンニバルにあたる事ことになりました。

しかし名將めいしやうハンニバルは味方みかたの二倍ばいにあまる大兵たいへいをむかへて、ピクともいたしませ

ん。  
カンネーの野のに迎むかえて、大暴風だいはうふうの日ひを選えらんで決戦けつせんをいどみました。

この日は、突風が砂塵を高く捲き上げて、空の日も暗い程でありました。大軍に混戦するには絶好の天気です。

ハンニバルは風上に陣を布いて、ローマ軍に攻めかかりました。

ローマ軍は、濛々たる砂塵に、顔も上げられません。ハンニバルは得意の三方の陣をもつて攻めたてました。正面五列に長槍隊をならべ、右左に弓矢隊を配して、ローマ軍を包圍してゆく陣形です。

かうして、カルタゴ軍は煙のやうな、砂塵にかくれて、ローマ軍を包圍し、激烈な一大決戦が展開しました。

吹きまくる、砂塵に混戦する兩軍の將卒は筆にも、言葉にもつくされぬ大激戦を演じました。戦象部隊はタンクの様にあばれ廻る。身輕な騎兵隊は風よりも速やかに突きまくる。

カルタゴ軍に包まれてしまつたローマ軍も、國民の興望をになつて、よく戦ひまし

たが、ハンニバルの戦略に陥つてバタ／＼と、それは、あだかも、草でもなぎ倒すように討ちとられてゆきました。

驚くばかりの多数の死傷者を出して、ローマ軍はまたも大敗してしまいました。八萬餘の大軍で戦死したものが、歩兵四萬五千、騎兵二萬七千、二人の大將の中、一人は討死し、捕虜になつたものが一萬餘人と云ふのです。

まつたく、壯烈を極めた激戦でありました。カンネーの野には死骸の山が築かれました。

負け残つたローマ兵は、恐怖にかられ、元氣衰へ、今はローマを見捨てゝ逃走しようとする者さへあらはれました。

その時敢然として、彼等の前にたちふさがつた、紅顔の美少年がありました。

スキピオと云ふ十八歳の少年です。刀を抜いて大音聲に、

『祖國ローマを見捨てる者は誰か！』



ローマ人の名譽めいよを汚けがす者は成敗せいばいして呉くれん。』  
と、馬上ばじやうに叫さけびました。

『ローマ！』

その言葉ことばに、彼等かれらは再び元氣げんきをとりもどしました。

『ローマのために』

勝ちほこるカルタゴ軍ぐんを望のぞんで掌てのひらを握にぎりしめました。

少年スキビオは疊々でふぐとして横よこたはる味方みかたの死骸しがいを指ゆびささして、

『見みよ！ 祖國そこくの勇者ゆうしやを、

ローマの光榮くわうえいと、ローマの名譽めいよのために戦たたかつた勇者ゆうしやを、

我々われらは誓ちかつて、彼等かれらを犬死いぬじにさしてはならぬ。

我等われらは誓ちかつて、ローマの敵てきをほろぼさなければならぬ』

この少年せうねんの言葉ことばは、全軍ぜんぐんに神かみの言葉ことばのようにひびき渡わたりました。

この敗戦はいせんのしらせはローマの町まちに傳つたはりました。

精銳せいえい八萬八千のローマ軍ぐんこそは、ハンニバルをたたきのめしてくるに違ちがひないと、

ローマ市民しみんは信しんじてゐました。

ローマ市民しみんは、カンネーからの使者ししやをとりまきました。

カンネーからの使者ししやは悲憤ひふんの聲こゑをはりあげて、

『みなさん！』

カンネーの大激戦だいきせんに、味方みかたは殆ほとんど全滅ぜんめつです』

市民しみんはうめいて、おどろきの聲こゑをあげた。しかしローマの大將たいしやうファビウスは靜しづかに、

『エミリウス將軍しやうぐんはどうした？』

市民達しみんたちはなりをしづめて使者ししやの顔かほを見守みまもつた。

『カルタゴ軍ぐんに包圍はうゐされて、味方みかたは總崩そうくづれです。鬼神きじんのように奮闘ふんせんしたエミリウス將しやう

軍ぐんは、満身まんしんに傷きづをうけて、立つことも出來ぬ程ほどでした。馬うまもたほれてしまつたので

す。

私が、私の馬に乗つて落ちのびてくれと、涙を流してすすめたのですが、俺は死ぬまで戦ふんだと、またもや、馬の背にしがみついて、カルタゴ軍の中に突入してゆきました。』

市民の腫には感激の涙が光りました。

『パロー將軍は？』

『パロー將軍は僅かの手勢を引き連れて、危いところを逃れました。もう一戦やるつもりで……』

『もう一戦！』

フアビウスは力強く叫びました。

『もう一戦！』

市民達もそれに和して叫びました。

完くローマ人は偉い國民です。

カンネーの報がつたはると、南イタリーの大部分はもとより、遠いマケドニヤ、近いシシリ島も、みなローマを離れて、ハンニバルに同盟を結びました。

ハンニバルの得意の時代です。

そして宿望のローマの町をかこみました。ローマはカンネーの敗戦で若者の大部分を失つてしまひました。

そして、その上にカルタゴ軍に包圍されてしまひました。

しかもなほ不屈の精神を揮ひ起して、更に老人も、子供も、奴隸も、罪人も、武器をとり得る者は皆集つて、新軍を組織して、あくまでもハンニバルと戦ふ決心をいたしました。

おどろくべき根強さです。堅忍持久、不撓不屈、この強いローマ人の精神の前に流石のハンニバルも手をやきました。

ローマ人を全滅させざる限り、ハンニバルは最後の勝利を得る事は出来ないであらう。

## 6 ローマ遂にカルタゴを敗る

十八年間、ローマは負け戦をつづけて、ハンニバルに抗戦しました。

若者の大部分を失つたローマは、尙戦ひつづけました。

首都ローマをかこんでしかもハンニバル將軍は最後の勝利を得る事が出来なかつたのです。

その中にローマには。スキピオと云ふ偉い人物が現はれました。

スキピオは先にカンネーで敗戦の將士を上げました少年です。

スキピオはローマの救世主としてあらはれました。彼は若い身をもつて、ローマ軍を率ゐ、ハンニバルの根據地イスパニヤに遠征して凱旋いたしました。

本國の負けつづきで、しかも首都まで包圍されてゐる時に、敢然たつて、敵の根據地を突いた青年スキピオ將軍の意氣はまた、さかんものであります。

スキピオは、ハンニバルに勝つ方法として、ハンニバルの後方の連絡を絶つ事にあると思つたのです。

それは丁度、神功皇后が熊襲を征伐するには、その後だてをしてゐる三韓を討つにあると、お考になつたのと似てゐます。

スキピオはイスパニヤをうつばかりではなく、ハンニバルの同盟者に抜け目なく、手を廻してハンニバルに、援軍を送らないようにしておきました。

イスパニヤの本國には、ハンニバルの弟ハスドルバルが留守を守つてゐましたが、あまり突然のスキピオ軍勢に一たまりもなく敗れてしまひました。

この頃、ハンニバルは、今一いきと云ふところまで、きてゐるのに、なか／＼ローマが頑強に抵抗いたしますので、どうすることも出来ないで、困つてゐました。

諸方の援軍が集つたら一舉に總攻撃してやらうと思つてゐるのに、一向集つてきません。流石のハンニバルも、今は本國の弟ハスドルバルに頼る以外に方法がありません。

スキピオが凱旋したあとに、ハンニバルから援軍の依頼狀が來ました。そこでハスドルバルは先年の敗戦への報復と、直ちに新軍をととのえて、遙々とイタリアに向つて進發いたしました。

ハスドルバルはイタリアに入り、待ち受けてゐる兄の方へ急いで使を出しました。しかし、ローマの方でも嚴重に警戒してゐましたから、その使ひは途中でローマ軍に捕へられ、ローマでは、その手紙でハスドルバル軍の行く途を知りました。そこで、ローマ軍は途中に待ち伏せ、不意を襲つて打ち破り、ハスドルバルは討死をしてしまひました。

そんな事は夢にも知らぬ、兄のハンニバルは、北方の天を望んで、毎日々々、弟

の到着を待ち焦れてゐたのでした。

ローマ軍はハスドルバルの首をとつて、ていねいにハンニバルの陣中に送り届けてやりました。

弟が首になつて突然に送り届けられた時はさすがに、鬼をあざむく猛將ハンニバルも、思はず、涙を流し、天を仰いで、

『あゝ天命である。』

わがことも止んだ

カルタゴの運命も汝と共に去つた』

と、すゝり泣いたといふことです。

昨日までローマを打ちなびかした神のような偉人も、もはや運命が傾きはじめたのです。

一方、スキピオはイスパニヤから華々しく凱旋すると、次いで、カルタゴ本國に遠



征いたしました。

更生のローマを代表するスキピオの軍勢はカルタゴに上陸すると、たちまちにして、カルタゴの諸軍を破り首都カルタゴに逼りました。ローマ人は都を猛將ハンニバルに包圍されながらも、敵の都を遠征する勇氣をもつてゐました。カルタゴは都をかこまれて大いに驚き、はるくと遠征してゐるハンニバルに救を求めなければならぬ程意久地がなかつたのです。急使をハンニバルのところへ飛ばしました。

思へば九歳の時、神に誓つてローマを滅さうと、父につれられて、イスパニヤに移つてから三十五年、アルプスの峻嶂を越えて、ローマに攻め入り、北に南に敵軍を惱まし、ローマ人の心膽を寒からしめた英雄ハンニバルも、今や事、志と違つて、ローマ征服の望も少なくなつて惱んでゐる時、突如、本國の危急を知らせて來たのであります。

彼の心中はどんなであつたことであらう。遂に決心して、彼は全軍を統べて本國に

引きかへしました。

さうしてカルタゴの南方ザマといふところで、スキピオと一大決戦を試みたのですが、英雄の知略も、傾むく運命には勝てず。スキピオ軍のためにさんぐに敗られてしまひました。

一度は敵首都ローマにせまつたカルタゴも、もはやローマを破る道はまつたくなくなつてしまひました。降参するより外ありません。

イスパニヤをローマに割き、すばらしい償金を拂ふ約束をし、軍艦は全部ひきわたして遂にローマの軍門に降りました。

ローマは遂に勝つたのだ。

幾多の尊い犠牲の血を流した、ながい苦しみに堪え忍んで來た。

ローマは遂に勝つたのだ。

ローマの喜びはどんなであつたでせう。すべての神殿は、扉をひらき、三日の間盛

んな謝恩しゃおんのお祭りまつりがありました。また赫々くわくくわたる武勳ぶくんを輝かがやかして、勇將ゆうしやうスキピオがローマに凱旋がいせんした時も全市ぜんしは沸わきかへつて歡迎くわんげいいたしました。

ハンニバルは後故國のちこくカルタゴを逐おはれて、遠くアジャの片田舎かたゐなかにローマの空そらを睥にらみながら非業ひごふの死しをとげてしまひました。カルタゴも間もなく亡ほろびてしまひました。ローマは、今やカルタゴの領地りやうちを併あせ、マケドニア、ギリシヤを併合へいがふし、かくて西にしはイスパニヤから、東ひがしは小アジアせうせうまでの實じつに廣大な領地りやうちをもつ國くにとなりました。實じつに古代だいローマは奮闘ふんたうの歴史れきしをたたかひ拔ぬきました。

ムツソリニー首相しゆしやうが

『ローマを思おもへ』

と、國民こくみんを鼓舞こぶするのは、決して、これから後の華やかけなな大ローマを指ゆびさすのではないのです。堅忍持久けんじんちきう！苦闘くたうの歴史れきしを指ゆびさして云いふのです。このローマの意氣いき、この意氣いきこそなにものを、打うちちしりぞけて完成くわんせいさす力ちからでなければなりません。

## 四、大英雄ユリウス・ケーザル

### 1 投げられた骸子

次々と強敵を破つて、今から二〇〇〇年も昔に、ローマは世界第一の國となりました。

榮えたギリシヤの文化はローマに移りました。四方の富はローマをさして流れ込みました。

上流社會の人は豪壯美麗な大邸宅を構へ、數百の奴隸を使つて、思ふ存分な豪華な生活をするようになりました。

しかしそれと共に大切な建國以來のローマ魂は次第に消え、質朴剛健な風は去つ

てしまひ、道德は腐敗して、自分の利益ばかりを考へ貪るようになってしまひました。満つればかくるのが世の習と云ふのでせう。成功すると人間の心はゆるみ易いもの

です。

そして、こんどは、だん／＼と衰えてゆくのです。注意しなくてはならぬ事です。

古代ローマ人の心を何時までも忘れずに、しつかりと胸にたたみこんでゐたら、恐らくローマは永遠に平和であり



ルザーケ・スウリニ

榮えた事でせう。

最後のカルタゴ征伐に出掛けた小スキピオ將軍（スキピオの子）は炎々として燃え

さかるカルタゴを望み見て、

『アッシリヤは既に亡び、ペルシヤ、マケドニヤも亦滅びた。而して今やカルタゴは火中に在る。』

噫々、想ふに、ローマの滅びる日も亦次いで来るであらう！』

と、嘆息したとの事であります。

ローマも外敵がなくなると、こんどはお互に國內で相争ふようになりました。

ローマの缺點は王様がなかつた事です。王様がありませんから、立派な法律をつくり、世の中がうまく治まるように工夫をこらしたのですが、お互に政治の權力を握らうと競争するようになります。

そのために、人を陥れる、友達を亡ぼすと云つた工合の争が起つてまいりました。世界的大英雄ユリウス・ケーザルも亦かうした犠牲に斃れていつた人です。

西洋では英雄と云ふと三人をあげます。マケドニヤのアレクサンドル大王、フラン

ニのナポレオン、そしてローマのケーザルです。

世界の三大英雄の一人が大ローマに現はれました。

勿論ローマ第一の大人物です。政治家としても、軍人としても、これ程の人は前後にないのです。

彼は曆法、天文、土木、法律等、學問として通じないものはなく、また筆をとつては立派な文章を後世に残しました。

永い間の内輪の争ひで、傾きかけた大ローマ國の建て直しをやり、千載の後まで、誇るべきローマ帝國の基礎をつくつたのは、實にこのケーザルの手腕であつたのです。ケーザルは早く父を失ひ、賢い母の手によつて教育されました。幼い時は病氣ばかりしてゐた弱々しい子供でした。

しかし、食べものに氣をつけ、武藝をはげみ、克己の力によつて健康の人となりました。

その姿は瘡<sup>す</sup>けて女<sup>をんな</sup>の様<sup>よう</sup>でした。しかし元氣<sup>げんき</sup>は人並<sup>ひとなみ</sup>以上<sup>いじやう</sup>でありました。幼<sup>をさな</sup>い時<sup>とき</sup>から、海<sup>かい</sup>外<sup>がい</sup>を渡<sup>わた</sup>りあるき、十分<sup>じふぶん</sup>にその天<sup>てん</sup>才<sup>さい</sup>をみ<sup>み</sup>が<sup>が</sup>ま<sup>ま</sup>した。彼<sup>かれ</sup>はマケドニヤのアルクサンドル大王<sup>たいわう</sup>を深<sup>ふか</sup>く尊<sup>そん</sup>敬<sup>けい</sup>してゐ<sup>い</sup>ました。



アレクサンドル大王

或<sup>ある</sup>日<sup>ひ</sup>ケーザルはその傳<sup>でん</sup>記<sup>き</sup>を讀<sup>よ</sup>んで、感<sup>かん</sup>に堪<sup>た</sup>へず涙<sup>なみだ</sup>を流<sup>なが</sup>して、

『大王<sup>たいわう</sup>は自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の年<sup>とし</sup>齡<sup>れい</sup>の時<sup>とき</sup>には、既<sup>すで</sup>に全<sup>ぜん</sup>世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>を征<sup>せい</sup>服<sup>ふく</sup>してゐ<sup>い</sup>たのに、今<sup>いま</sup>自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>は何<sup>なに</sup>もしてゐ<sup>い</sup>ない』

と、嘆<sup>なげ</sup>きました。

ある人<sup>じん</sup>物<sup>ぶつ</sup>で、ナポレオン大<sup>たい</sup>帝<sup>てい</sup>すらも、二十<sup>じゅう</sup>五<sup>ご</sup>歳<sup>さい</sup>の時<sup>とき</sup>に、アレクサンドル大王<sup>たいわう</sup>は、西<sup>せい</sup>洋<sup>やう</sup>の誰<sup>たれ</sup>でもか崇<sup>すう</sup>拜<sup>はい</sup>して

『あゝ、このちつぽけなヨーロツバなんかとてもつまらない舞<sup>ま</sup>臺<sup>だい</sup>だな』と、云<sup>い</sup>つて、到<sup>たう</sup>底<sup>てい</sup>アレクサンドルのように、自<sup>じ</sup>由<sup>いう</sup>に東<sup>とう</sup>洋<sup>やう</sup>迄<sup>まで</sup>も戦<sup>せん</sup>争<sup>そう</sup>に出<sup>で</sup>られ<sup>れ</sup>ない身<sup>み</sup>分<sup>ぶん</sup>を



つくぐと唧ちました。

ナポレオンは二十五歳になつても、まだ砲兵士官にすぎなかつたのに、アレクサンドルは、その齡に、ギリシヤがどうしても勝てなかつた長年の敵ペルシヤと大戦争をしてそれを目茶苦茶に打ち破つてゐたのです。

實際、アレクサンドルの傳記は後世の若者の心を發憤させるに、大きな力があります。

アレクサンドルは、小さい時に、父王がたくさんの國々を征服するのを見て、友達に悲しげに打ち明けたものです。

『おゝ、僕のやる事が、みんななくなつてしまふ』  
かうして悲しみました。

二十歳で父の後を繼いで王様になると、彼の華々しい活動が始まるのです。

先づ第一番にギリシヤを屈服せしめ、ペルシヤを打ち破り、進んでエジプトに迄遠

征しました。そして近臣に、

『エジプトの西には何かあるのか？』

と、尋ねました。近臣は、

『大沙漠だけ、どこまで行つても、焼けるような砂しかありません』

そこで、大王は、アジャへ引きかへし、バビロンを始めペルシャを破り、中央アジアへ進み、そして雪を戴く山に登つて下界を見下ろし、北方のさびしい地方を望んで、

『あれを越えると、何かあるのだ？』

と、部下に尋ねました。

『凍つた沼地だけ、いくら行つても雪と氷だけであります』

大王は吐息をついて、軍を南にかへし、印度の榮えた町を次から次と攻めとり、大イギリス河の岸邊に立つて、これを越したものでどうかと、考へあぐんでゐました。

兵隊共は、そんなに進んでは、故郷にます／＼遠ざかつて、何處へ消えてしまふか

も判<sup>わか</sup>らないと、心配<sup>しんぱい</sup>して、

『もう、どうしたつて行<sup>ゆ</sup>けません』

そこで、大王<sup>だいわう</sup>は大河<sup>たいが</sup>を指<sup>ゆびさ</sup>しながら、

『このすばらしい河<sup>かは</sup>の東<sup>ひがし</sup>には何<sup>なに</sup>があるのだ』

と、尋<sup>たず</sup>ねました。

『深く茂<sup>ふか</sup>つた森<sup>もり</sup>だけ、いくら行<sup>い</sup>つてもそれだけでございます』

大王<sup>だいわう</sup>はもつと、東<sup>ひがし</sup>まで攻<sup>せ</sup>めたかつたのですが、これを聞<sup>き</sup>いて仕<sup>しかた</sup>方<sup>かた</sup>なしに、船<sup>ふね</sup>をつくつてインダス河<sup>か</sup>を下<sup>くだ</sup>り、大海<sup>たいかい</sup>に出<sup>で</sup>ました。

『この向<sup>むか</sup>ふには何<sup>なに</sup>があるのだ？』

と、又<sup>また</sup>大王<sup>だいわう</sup>は尋<sup>たず</sup>ねました。

『人<sup>ひと</sup>氣<sup>げ</sup>のない、波<sup>なみ</sup>と水<sup>みづ</sup>だけ、いくら行<sup>い</sup>つても深<sup>ふか</sup>い海<sup>うみ</sup>しかありません』

と、答<sup>こた</sup>へました。すると大王<sup>だいわう</sup>は、

『そうか、すると、人間の全世界はすつかり、朕が領土か、東西南北、朕が征伐するところは、もうなくなつたのか、だが考へて見れば何と小さな王國なんだらう』と、叫んだと思ふと、どつかり坐つて、さめくと泣き出したと云ふのです。

アフリカからヨーロッパ、東洋に跨る大國を建設して、まだ満足しなかつたアレクサンドル大王の心は本當に大きいものであつたと云つていゝでせう。しかも戦へば必ず勝つ、行くところ皆草の風になびく如し、と云ふ有様であつたと云ふのです。

すごい王様もあつたものです。

ケーザルは、この大王を心から崇拜してゐたのです。そして、ついに大王と並べられて、世界から尊敬される程の英雄となつたのです。

ケーザルは、ローマのために、アルプスを越え、ガリヤを征伐しました。

ガリヤといふのは今のフランスです。

そしてまだ、この頃は、文明の低い野蠻人が、たくさんゐて、恐ろしい野獸の住む

森林りんりんが一面めんにあつて、高い山たかや暗い谷くらが路みちをふさいでゐました。それをすつかり平たいらげて遠とほくイギリスの方はうまで、従したがへてしまひました。ローマの市民しみんは狂喜きやうぎして、

『あゝ、もうガリヤの野蠻人やばんじんが、アルプスを越こえて、ローマを襲おそつて來くることはな  
い。

アルプス山さんなんか凹へこませろ！

あんな城壁じやうへきなんかも要いらないのだ！』

と、喚わめきました、ケーザルの名聲めいせいは、飛とぶ鳥とりを落おとす程ほどの勢いきほひでした。

その頃ころ、ローマには、ケーザルと同じ位くらゐの權力けんりよくのある人ひとがもう一人ひとりゐました。

ポンペユウスと云いひます。ポンペユウスはこの國家こくかの功勞者こうろうしやケーザルが、評判ひやうばんのよくなるのを、たいへん嫉ねたましく思おもひ、ローマに於おける軍事ぐんじの大權たいけんを握にぎり、ケーザルを免職めんしよくし、その率ひきゐてゐる軍隊ぐんたいを取り上あげようとしてました。

そこで、ポンペユウスはガリヤにあつてローマのために、大功たいこうを立てゝゐたケーザ

ルに、國家の名をもつて呼び返しました。

それには、期限までに歸つて來なければ、國賊とみなすとありました。

ケーザルは、この本國からの命令を聞いて怒りました。

ただちに、部下の將卒を集めて悲壯な態度で、その無法を訴へました。

全軍の兵も皆憤り、尊崇するケーザルのために、擧つて、命を捨て、戦はうと誓ひました。

ケーザルは、部下の軍勢を率ゐて、イタリアにかへつて來ました、ローマに近づくにしたがつて、ケーザルは、ローマ市では、更にケーザルの味方がいじめられてゐることが判りました。早くローマに入らなければならぬ。

全軍が、イタリアの國境ルビコン河まで進んでくると、  
拵おきて

大將は、軍兵を率ゐて、ルビコン河を越ゆるべからず。

これに叛ける者は、ローマの敵なり。

容赦なく討つべし。

ローマ共和國。

と、いふ掟が、河邊にたてられてゐました。ケーザルに、軍隊を解散して、ただ一人ローマに來いと云ふのです。

言ふまでもなく、ポンペユウスのたくらみなのです。

流石のケーザルも迷ひました。國家の掟です。叛けば國賊、軍隊を解散すれば、ポンペユウスのために、おとしいれられてしまふ。ルビコン河の流れを、ちつとながめて稀世の英傑ケーザルもしばし考へあぐんでゐました。

遂にケーザルは決心いたしました。立ち上ると大聲で、

『骸子は投げられたり!』

と、叫んで、ラツバをふき、全軍に渡河命令を下しました。

運命は決したのだ。ルビコン河を渡れば、謀叛人である。もはや後にはひかれぬ、

一か八か、あたつてくだけなければならぬ。ローマの國賊か、ローマの統治者か、勝てば官軍、負ければ賊軍である。

ケーザルは、この運命に身を委ねた。

ケーザルの大軍は嵐のような勢をもつて、イタリアの廣野を突進した。

一度決斷すれば、その行動の早いことは疾風のようなのが、ケーザルのやり口です。

ローマの町は忽ち湧き立ちました。

うろたへ叫ぶ人は町にみちあふれました。

その中に、もうケーザルの大軍はローマに迫つて來ました。

ポンペユウスも、ケーザルの神の如き早術には、應戰の暇がありません。

かれらは忽ち逃げ出しました

ケーザルは威風堂々とローマに入城いたしました。

かくしてローマの全權を握り、市民を安心させ、部下の將軍を四方に派遣して、自分



に手むかふ者を征伐をさせ、自らは部下を率ひてイスパニヤに出征をしポンペユウスの根拠地を全滅せしめて、かへり、東方に逃げたポンペユウスを追撃して、十萬の大兵を僅五萬で打ち破り、更に逃げるポンペユウスを逐つて、エジプトに入りました。エジプト王はケーザルの勢におそれて人を送つて、ポンペユウスを暗殺させました。

エジプトに上陸したケーザルは一代の英雄ポンペユウスの首を見せられて、流石に猛々しかつた今までの意氣も消え、一度はローマに威をふるつた、ありし日のポンペユウスの姿を思ひうかべて今は罪もなくなつた舊友の顔に涙を注いで、壯大な葬式をもつて、厚く葬つてやりました。

武骨なケーザルの目にも、かうした涙はあつたのです。

## 2 英雄の末路

神速、果斷、ケーザルの現はれるところ、まことに、双向ふものとしてありませんでした。

ケーザル、その名は當時の人に、神！と言ふ意味にひびきました。その頃エジプトにも内亂がありました、忽ちに鎮めて、有名な女王クレオパトラを位につけ、更に進んで、反旗を翻した小アジアのポンツス王も、僅の間に征服してしまひました。

アフリカに居たと思ふと、もう小アジアに現れてゐる。小アジアに來たと思へば、もう勝利をしてゐる。ケーザルの機敏なことにはただ驚くばかりです。

ポンツス王を征服した時に、ケーザルは、本國ローマに戦勝を知らせました。

——來た。見た。勝つた——

古今の最簡潔なる書信として有名なものです。

更にローマの内亂を鎮め、

轉じて、イスパニヤに残敵をうち、

再びアフリカに入つて、ポンペウスの殘黨五萬餘を打ち破る。

まつたく、——來た。見た。勝つた——式で嵐の如くに世界中を吹きまくつてしまつた。

かうして、もうケーザルの敵はどこにもなくなつてしまつたのです。

そこで、始めて、ケーザルはローマに凱旋いたしました。市民は興奮して喜びました。

その凱旋式は實に盛大なものであつたと云ふ事です。

幾十輜ともなくつづく、金銀珠玉をちりばめてかざつた花馬車。

長い鼻で炬火を捧げ、錦繡をもつて盛裝されてゐる數十頭の巨象の群。

無數の大旗、小旗。

將軍の戦車の後に鎖で珠數つなぎにされて、従ふ戦敗國の王族、顯官、名將、以下

おびただしい捕虜。

山と積んだ戦利品のいろく。

未だかつて、かくの如く目覺しいものはなかつたと傳へてゐます。

ついで、彼はローマ人の歡心を得るために公道に、無數の食卓をならべて市民に自由飲食せしめ。或は競馬、競車、猛獸闘技、などの種々の娛樂を公開して市民をなぐさめました。

かくして、ケーザルは全國民の尊敬を一身に集めました。

ローマは昔から共和政治で、各種の役人がありました。今は全くケーザル一人でその重な役を占めました。

共和政治と云つても、實際は、ケーザルと云ふ大帝王に治められるローマ大帝國となつたやうなものでありました。

ケーザルはその大きな權力をもつて、ローマの政治の悪いところを取り去り、貧し

い人々を救ひ、大いに土木事業を起して、ローマの街を立派に飾り、圖書館を建て、文學、藝術の發達を獎勵したので、今やローマの國民は平和を樂しみ、繁榮を喜ぶことが出来るようになりました。

ケーザルは實際は王様と同じ權力をもつてゐたのであるが、しかし決して自分では『王』と申しませんでした。

それはローマでは古くから『王』と云ふ名稱をひどく嫌つてゐたからです。

けれども、彼の威勢があまり盛なものですから、世間では、彼がしまひには王とならうといふ野心をもつてゐると思ひ込んだ者も少なくありませんでした。

カシウスといふ政治家がその一人です。彼は、どうかして、ケーザルをローマから除きたいといふ、深い憎しみの感情を持つてゐました。

そうして、ひそかに同志の人を集めて、ケーザルを除かうといふ陰謀をめぐらしましたが、思ふように仲間になる人が集りませんでした。

そこで、カシウスは、人々が信用して呉れるような大人物を首領に推して、同志を集めようと考へたのです。

その大人物として、カシウスが白羽の矢を立てたのがブルタスといふ人です。

ブルタスはローマでも殊に優れた名家の生れでありました。性質が剛直であり、また正義のために屈せぬ性を持つてゐました。

カシウスはその妹婿です。

それでもケーザルはブルタスにとつては大恩人であつのです。ブルタスがかつてケーザルの仇敵ポンペウスの部下でありましたが、ケーザルに救はれ、その後も常にケーザルに愛され、高い役に引き上げられ、深い恩を蒙つてゐました。

ブルタスも、もちろん、それを感じて、決して、ケーザルに叛く心はありませんでした。

ただ、ブルタスの缺點として、見識が狭く實際の情勢を知る事が極めて下手であり

ました。

カシウスから陰謀の相談を受けても、決して、それに加はらうと思ひませんでした  
が、カシウスは熱心に説き、誘ひ、煽動したのです。

『ケーザルはローマの敵です。』

共和政治を覆して自ら「王」となろうとしてゐます。

ごらんなさい。彼の政治のやりかたは専制です。

『共和制の破壊』

『ローマの賊』

一本調子のブルタスの心は次第に動いてきました。

『ブルタスよ！ あなたはケーザルから恩をうけてゐるために、正しく判断するこ  
とが出来ないのですよ、

本當の心が眠つてゐるのですよ』

カシウスの誘惑はたくみであつた。ブルタスは次第にケーザルを賊であると考へるよ

うになり、とう／＼カシウスの陰謀に加ることに  
なりました。

ブルタスが陰謀に加つた。この事はケーザルに  
とつて、もつとも不幸なことでした。

ブルタスがケーザルを國賊であると云つた。か  
う云つただけで、ケーザルを疑つてくる人はたく  
さんあつたのです。二十人、三十人と同志が増し  
てきます。

深められた陰謀を誰も知りません。

三月十五日、元老院で會議がひらかれます。そ  
こでケーザルを暗殺しようといふことにきまりました。



ケザール刺さる



ただ天だけは、早くから、この陰謀を見てゐたのでせう。

十五日が近づくに従つて、まづ天に不思議な現象が現はれたり、地に怪しい事件が起りました。ケーザルも、ケーザルの妻も悪い夢を見ました。しかし、そんな僅かの事で、天下の政治をゆるがせにすることは出来ません。

紀元前四十四年三月十五日元老院に少し遅れて出席をいたしました。

すると、陰謀の一味のシンバー、といふ者がケーザルの前に進んでゆき、

『兄の罪を許して下さい』

と、願ひました。

兄と云ふのは罪を犯して、外國に流されてゐるのです。

『それは、いけない』

ケーザルは、きつぱりと斷つた。

『どうしても、いけないのですか』

『斷じていけない』

それが合圖の様に、ケーザルの背後にキラリと、短劍が光つた。

『無禮者！』

大喝一聲！ その腕を捻ぢ上げた。

同時にバラ／＼と一味四十餘人が短劍を閃かして、八方から突いてかかつた。

ケーザルは一本の鐵筆をもつて、以前の大敵ボンベウスの石像の前に身構へた。  
己に身に數ヶ所の傷を受けながらも、一味をハツタと睨みつけて、立ち上つた。

『何をするか！』

大聲一呼

『云ふな國賊』

『民衆の敵』

さつ！ と突いて來たのをかはして、

『迷ふな！』

八八

と、その腕をはらひのけた。前によろけて、ケーザルにはつたと顔を會はせたのはブルタスであつた。

『ブルタス、汝もか』

悲壯な一聲であつた。

あれ程に信じ、あれ程に親しんだブルタスではないか。

ケーザルは感念した。

袖でバツと顔をおほひながら、一切の抵抗をやめて、そのまゝ降るような白刃に身を委かせた。

二十三創の傷を蒙つて、其の場に斃れた。五十六歳のあえない最後でありました。その側にはポンペユウスの石像が、冷やかに、笑ふが如く立つてゐます。

すべてを何もかも、すっかり見てゐたように、ケーザルに逐はれ、遂に異域でエジ

プト人に刺し殺されたポンベユウスの像が立つてゐました。

ケーザルはその前に横はり、迸り出る鮮血で、像の臺石を紅に染めました。

『ケーザルが刺された』

『ケーザルが殺された』

一大悲報に、全ローマ人はひつくりかへる程に驚きました。

すはこそとばかりローマの市民は、元老院にかけつけました。

一代の英雄ケーザルは斃れた。

げに、ケーザルは人の世に現れ難き大天才、ローマを大ローマに築き上げた非凡の

大英雄。

ローマ市民が崇拜してゐた大傑士ケーザル、往くところ勝たざるはなき大將軍ケーザル。敵すらも神と戦きし雄將ケーザル。

しかも、彼を殺したのはローマ人自らであつた。

誤れる愛國の心は恐ろしい！

迷へる勇氣は恐ろしい！

ケーザルを斃して、ローマに何の益があつたと云ふのであらう。

ケーザルの葬式の日、ケーザルの親友アントニウスは、ケーザルの遺言狀と、ケーザルが殺された時、着てゐた血痕なま／＼しき上着をもつて、大哀悼演説を行ひました。

極めて壯重な、そしてまた悲痛な口調をもつて、ケーザルの功績を説き、その不幸をなげいて市民に訴へました。

『ケーザルは山なす戦利品も、敵から取つた償金も皆ローマに納めたではありませんか、ケーザルは貧しい人々の泣くのを聞いて、自分も心から涙を流しました。

私はケーザルに王の冠を奉呈しようとしたことが三度ありました。さうして三度それを却けられました。

ケーザルに野心やしんがあるといふのなら、どうしてこのようなことができません。

若し涙なみだあるローマ人じんならば泣なかずにをられませうか。

この上着うはぎをごらんなさい。

カシウスが突ついた刃やいばの痕あとを。

ブルタスが刺さした刃やいばの痕あとを。

ケーザルは、常日頃つねひごろブルタスを愛あいしました。さうして酬むくいられたのがこの剣けんでありました。

大膽不敵だいたんふてきのケーザルも、ブルタスが剣けんをふりかざして迫せまつたのを見たときは絶望ぜつぱうしたのです。

さうしてこの上着うはぎで顔かほをおほつて、あけに染そんで、ポンペユウスの像ざうの下したに倒たふれました。』

ケーザルの遺骸みがいを指ゆびさして、

『ここをこらんなさい。

大ケーザルが陰謀の徒に刺されて倒れてゐます。』

それからケーザルが、かねて書きとどめておいた遺言狀を読み上げました。

その中にはローマ市民にその財産を分配する様にと書いてありました。

アントニウスは涙にむせんで、

『あゝ、今やローマはケーザルを失つてしまひました。

ローマがふたたびかかる英雄を迎へるのは何時の日でありますか』

## 五、大ローマ帝國なる

### 1 オクタヴィヤヌスの制覇

ユリウス、ケーザルは殺された。

ローマ人の手によつて殺された。

異國人からは鬼神の如く、畏れられたケーザルは、自分のもつとも信賴すべき部下に殺された。

ローマの缺陷がここに存在してゐます。

ローマを強固にした、ローマを世界のローマにした、このローマの大恩人に報ゆるに二十三創の刺傷でありました。

ケーザルは自分で「王」とは云はなかつた。すべての權威を一身に集めて、事實上は帝王であつた。しかしケーザルは「王」と云はなかつた。

「王」と云はなかつたが、ケーザルは、大ローマに「王」のない事が不合理であると感じてゐたであらう。

だが、ローマの國のなりたちが「王」を持たなかつた。

その不合理にケーザルは斃れた。



王わうのない事ことが自由じゆうであつて、幸福かうふくであると思つた。そして王わうのような權威けんゐんをもつたケ  
ーザルを斃たふしてみた。果たして、幸福かうふくであり得たのであらうか。

だが、ローマが、ケーザルを王わうにして、果して、永久えいきうに幸福かうふくであり得るかどうかと  
云ふことは、これからの歴史れきしが明かに物語ものがたるところ、ローマは一つの不幸ふかうをもつてゐ  
たと云はなければならぬ。

仲間なかまの一人が「王わう」となる。これは堪たえがたい事ことであるかも知れない。

私達わたしたちは國くにのなりたちの有難ありがたい事を、そして、大切な事ことをしみて、考かんがへさせられる  
ではありませんか。どこの歴史れきしでもいゝ、外國ぐわいこくの歴史れきしを讀よんで見て、私達わたしたちは常に祖國そこく  
日本にっぽんの、けだかい、そして有難ありがたい國柄くにがらに涙なみだの出る思おもひがいたします。心こころから日本人にっぽんじんであ  
る事に幸福かうふくを感じます。

古い國くにもあつた。文化ぶんかの榮さかえた國くにもあつた。大きな領土りやうどを持つた國くにもあつた。

榮枯盛衰えいこせいすいは世よの習ならひでせう。治亂興亡ちらんこうぼうは人ひとの世よの運命うんめいかも知れません。

しかし、私達わたしたちは、もつと、深い、大切な、原因げんいんが別べつにある様ように感じられます。

ひとり、我わが日本にっぽんだけが三千年の歴史れきしを持ちつづけてゐるのが、それです。

宇佐八幡うさはちまんは和氣清麻呂わけのきよまろに告げて、

『我わが國くには、國始くにはじめつて以來いらい、君臣くんしんの分定ぶんさだまれり』

國くにが始はじめつたのは、また、民族みんぞくの始はじめまりです。

民族みんぞくがあつて、國くにをつくつて、王わうが出來たのではありません。

仲間なかまの一人ひとりが王わうになつたのではありません。王わうと國くにと國民くんとたみと、一つのところから始はじめ

つてゐるのです。

日本にっぽんの始はじめまりが、天皇てんわうの始はじめまりであり、日本人にっぽんじんの始はじめまりであります。

この事は、今いまから決して眞似まねの出來ない事ことであります。

しかも、すべての始はじめまりの時ときから、

『皇位くわうゐの榮さかえまさんことは、天地てんちと共に窮きはまりなかるべし』

と、定まつてゐたのです。

世界の一番東に、大陸と離れて、諸國の傷ましい歴史に對して、嚴然と、この國がある事は、何か、尊い神のおぼしめしと云つたものを、思はないではいられません。よく、日本は島國であつたから、外國におかされないですんだのだと云ひます。

島國と云へば、アメリカ大陸は何千年來、他の民族から知られないでゐた一大島國です。そこには國家もあれば、住民もゐたのです。南アメリカにはインカ帝國といふ立派な國もあつたのです。それらがやはりほろびてゐます。

尙、明治維新當時、印度を攻略し、支那と戦つた、イギリス、印度支那半島に來たフランス、フィリッピンを占領したアメリカ合衆國、シベリヤ、樺太を侵したロシア若しも、普通の國であつたら、とつくの昔に、白人に侵略される運命にあつた日本です。

島國であつたから、それは確かに島國であつたから、よかつた事もあります。

或る専門家のお話によると、日本が、今少しく、大陸に近いか、或は遠いかによつてたいへん空襲に便利になるそうであります。

今の位置が、一番に空襲困難だそうです。このお話だけでも、島國だといふよりはこの位置に尊い國が出来上つたといふことに深い、使命の存在してゐる事が感じられるではありませんか。

したがつて、日本は島國だからよかつたなどいふ事は、この崇高な日本の國體をけがす、言葉だといはなければなりません。

話がたいへん横道にそれました。

今かりに、ケーザルが日本に生れたと考へてごらんなさい。

ケーザルは、どんなに幸福な事であつたことでせう。

思へば、氣の毒なケーザルではありませんか。

偉人ケーザルが覺れた事は、早く云へばローマに首がなくなつたようなものです。

首くびのないローマ、不幸なローマ、また誰たれか首くびの座ざに坐すはるまでは、ごたつきます。

ローマの首くびは、からだから出たものではないのです。のつかつた首くびです。首くびのおちたお地藏ぢざうさんによく首くびがのつかつてゐます。

あとからのつかつた首くびはうまく、くつつきません。地震ちしんがあればすぐ落おちてしまひます。

おちて、なくなつてしまへば、また代かりをつくらなければなりません。その間あひだ首くびなしのおかしなものがたつてゐることになります。

ケーザルが斃たふれた。

ローマは首くびなし地藏ぢざうになつたのです。

勿論もちろん、ケーザルの首くびをおとしたブルタスもカシウスはローマにゐる譯わけにゆきません。

オクタヴィヤヌスと云いふケーザルの養子ひやしとアントニウスのために、滅ほろされてしまひました。

そして、ローマはアントニウスと、オクタヴィアヌスと、今一人レピダスと云ふ三人に三分して治められることになりました。

しかし、三人が仲よく、何時迄もつづくものではありません。



アウグストゥス

第一番にレピダスがオクタヴィアヌスと衝突して破れました。ついでアフリカにクレオパトラ女王と住んでゐたアントニウスが亡びて、天下はケーザルの嗣子オクタヴィアヌスによつて、再び統一されました。

達は、全部ブルタスや、カシウスと共に滅びてしまひました。

ローマの市民も内亂にはあき／＼してゐました。そこでオクタヴィアヌスにアウグ

スツスと云ふ尊號そんがうをあたへて。事實上の帝王ていわうにいたしてしまひました。

帝王ていわうがゐた方が、政權せいけんを争ふ亂らんが起らなくて、平和へいわでいゝとローマ人じんも考へて來たのです。

平和へいわになれたローマ人じんは戦争せんそうが嫌きらひになつたのです。戦争せんそうが嫌きらひになつたので王様わうさまを認めたのです。

天下てんかの富とみはローマに集あつつてくるし、戦争せんそうもなくなつたから、ローマもこれからしばらく太平たいへいを、たのしむ事が出で来るようになりました。

## 2 ローマの文化

ローマは大國たいこくになつた。

大ローマ帝國たいとくは東洋とうやう、西洋せいやう、アフリカに跨またつてゐた。

そして、各地かくちの富とみはローマに流ながれこんだ。

各地かくちの文化ぶんくわもローマに流れこんだ。

ローマは大國たいこくになつて、文化ぶんくわを更に各地かくちへひろめた、東洋とうやうの文化ぶんくわと、西洋せいやうの文化ぶんくわを混合がふさせた。

ローマ市しは文化ぶんくわの中心ちゅうしんになつた。

立流りつぱな文化ぶんくわをつくり上げた。

殊ことにローマ人じんは土木事業どぼくじげふを大仕掛けおほじかけにやつた。

それは、二十世紀せいじの今日こんにちの文明人ぶんめいじんを驚おどろかせる程ほどのものをつくり上げました。その中なかの有名いうめいなものを二三紹介せつかいして見みませう。

## コロセウム

ローマ人じんは競技きやうぎを好みこのました。それも勇ましい競技きやうぎを好みこのました。

猛獸もうじうの咬かみあひや、人間にんげんとライオンの戦たたかひや、人間同士にんげんどうしの眞劍勝負しんけんしょうぶといつた、すごい勝負しょうぶを好みこのでやりました。



ローマ人は男でも女でも、丁度、

日本人が國技館の相撲を喜んで見る様におしかけて見物いたしました。

競技が幾日もつづいて、たくさんの猛獸が殺されてゐくのを喜ぶローマ人は尙武の氣風もあつたのでせうが、私達日本人では一寸想像のつかない荒々しい性質もあつたように思へます。

眞劍勝負をやるのは奴隸がやるのですが、奴隸といつても、決して、かはつた人間ではない筈です。かうした競技をやるために、實にすばらしい競技場がつくられました。

ローマ人が、こんな競技を好むようになった。

それだけで、何かしら、ローマ人が、もはや榮へる國民ではなくなつたように思はれ



コロッセウムの闘士決闘

ます。

それを見物する爲につくられた競技場がまた驚くばかりに大きなものです。

一番大きいのをコロセウムと云ふのですが、二代皇帝にまたがつてつくられたもので、西暦八十年に出来上りました。

四階造りの圓形なもので、周りが四五五米、高さが四七米もあります。各階共に柱から間どりの仕方が違つてゐて、中には十萬人の見物人が入れる大きなものです。

ここに旅をしてきた詩人が、この大建築物に驚嘆して、

コロセウムのあらんかぎり

ローマはあるべし

コロセウムの滅びる時

ローマは滅ぶべし

而してローマの滅ぶる時

世界も亦滅びん

と、うたひました。

# 浴場

ローマ人は風呂にはひる事が好きで、町でさへあれば、大小を問はず、どんな田舎町でも、必ず浴場を建てました。

最も有名な大浴場は、カラカラ帝の造つたもので、壯麗雄大で、二千人以上も入れると云ふのだからおどろきます。

その中には、冷水の風呂、温かい風呂、ごく熱い風呂、そして、その別に蒸し風呂まで設けられてあります。

これだけでもたいへんなものですが、更にこれに附屬してつくられたものが、また實に立派なものでした。

着物を更へる室、化粧をする室、その別に讀書室、應接室、運動場、庭園なども備

つてゐて、いづれも贅澤に出来てゐました。

ことに床は、美しい寄せ木細工のように出来てゐて細い石が並べられ、いろ／＼な

美しい模様を現してありました。

### 凱旋門

凱旋門は、多くの皇帝が、遠く外國を打ち破つて歸つた記念に建てられたものです。

ローマは勿論、遠い田舎町にもあります。皆壯大華麗を極めてゐます。



羅馬の凱旋門

門の前面の上部には、戦勝を記念する意味の文句が刻まれてあります。

その周囲には凱旋式の光景、戦捷祭の様子、などが、美しく浮き彫りされて美事なものです。

現在げんざいに残のこつてゐるものの中には、チツス帝てい、コンスタンチン帝ていとう等らのものが有名いうめいです。

### 道路だうろ

道路だうろは殊ことによく造つくられました。

ローマは小さい町まちから起おこつて、廣ひろく領土りやうどを持つようになりました。

この廣ひろく領土りやうどを持てるようになったのは、一度征服せいふくした地方ちほうを上手じやうずに治ささめて、決けつして失うしなはないようにしたからです。

そのためにやつた大事だいじな方法はうほうの一つに、道路だうろを立派りっぱに造つくつた事ことです。

征服せいふくした地方ちほうには、みな、ローマまで通つうずる道みちをつくりました。

『天下てんかの道みちはすべてローマにつづく』と云いふ言葉ことばが残のこつてゐます。

道路だうろは主おほに軍用ぐんようの目的もくてきで造つくられました。一朝事てうことがあれば、直たゞちに軍隊ぐんたいを送おくる事ことが出来るきようにしてあつたのです。

もちろん、地方ちほうにも軍隊ぐんたいはゐましたが、大きな叛亂はんらんや、戦争せんそうになれば、ローマ市しか

ら大軍を速かに送らねばなりません。

そのために道路は、出来るだけ、まつすぐにして、大切な町と町をつなぐことにし、そのためには、費用や勞力を惜しむことなくぐんぐん造つたものです。

一番早くできた軍用道路はアツピヤ街道です。これはローマの町から東南に向つて九十八哩餘の間まつすぐです。

そんな長い間を直線にしたのですから、途中にいろいろな邪魔物がありました。

沼があれば、それを埋めてしまひ、山があれば、それを切り割つてゆきます。その道幅は九米位もありますが、全部石をしきつめて舗装されてあります。

二千年の昔、ローマでは人のゐない田舎道まで舗装してあつたといふのだから、おどろくではありませんか。

## 水道

水道も驚く程に發達してゐました。



道 水 の マ ー ロ

ローマの市外しぐわいには、もちろん一番ばんたくさんありますが、ずつと片田舎かたなの都會とくわいにも大規模だいきぼの水道工事すゐだうこうじがあります。

凡そおよ、ローマ人じんの住すんでゐるところは、どんな邊鄙へんびなところでも、ガリヤでも、アフリカでも、必ず立派りつぱに水道すゐだうが出来できてゐたのですから、びつくりいたします。

ローマ市しでは、二千數百年すうねんの昔むかしに、大きな水道すゐだうをつくつて、遠い山やまから、水みづを引ひいてゐました。一番遠いばんとほのは、六十一哩マイルも遠くから引ひきました。高い土地たかちのところは管くだを貫つらぬき、低い場所ひくばしよには、石いしや煉瓦れんぐわを積み上げて橋はしを築きずき、その上うへに水路すゐろを

作り、蛻々として、つづいてゐる光景は、實にさかななものです。

その外、港を築くことも進んでゐました。

ローマには、法律のことも、早くから考へられ、その出来上つたものは、ローマ法典といつて、今でも大切にされてゐます。

美術、文學、哲學の方面もそれ々に立派なものをづくり上げてゐます。

實に、ローマ時代の文化は、今の人の想像することも出来ない程に、進んでゐました。

## 六、キリスト教とローマ

### 1 キリスト生る

西洋で年代を數へるのに西曆紀元といふものを用ひます。



昭和十三年は西暦一九三八年です。これは何かもとになつてゐるのかといふと、キリストが生れた年の四年前を紀元元年としてあります。

本當はキリストの生れた年を紀元元年としたのですが、あとで考へて見ると四年前だけ違つてゐたことが判り、紀元元年がキリストの生れた年よりも四年前といふことになつたのです。

西洋で、このやうにキリストを大切に扱ふのは西洋の殆んど全部がキリスト教信者だからです。

て、キリスト教を信する者が多くなつてまいりました。近頃、日本にもたくさん教會が出来

て、世界中三人の聖人を數へる時には、印度の釋迦と、支那の孔子に、ユダヤのキリス



聖母像

トと云ひます。

世界の三大聖人、歐洲人全部を信者に持つキリストが、ローマの盛な時代にユダヤ人の中へ生れました。

ユダヤ人は古代から流浪して歩いた民族でしたが、後に獨立して、丁度、ヨーロッパとアジアの境にあるエレサレムを中心に國を建てました。

ユダヤ人はエレサレムにあるエホバの神殿を中心にして、かたい信仰に結ばれてゐました。

ユダヤ人は自分達だけ、エホバの神にまもられてゐるのだと考へてゐました。しかし、ユダヤもローマの力が東に伸びてきた時に征服されてしまつたのです。けれどもユダヤ人の間には一つの豫言がありました。

『今に神の使が降つて來て、その使が、ユダヤ人を率ゐて世界中を従へてしまふ』それが、かたく信じられてゐます。

したがつて、今こそ自分達はローマに征服されてゐるが、今にローマも自分達に従ふようになるかと考へてゐました。

ところが、その神の使ひといふ者が現はれました。

イエスです。

イエスのお父さんはナザレといふところに住んでゐた大工さんのヨセフ、お母さんはマリヤといひました。

ヨセフは貧乏な大工さんで、村から村へ、町から町へとわたり歩いて仕事を頼まれて歩きました。

丁度イエスの生れた晩も、冬の寒い十二月二十五日でしたが、宿屋の厩屋であつたところに泊めて貰つてゐました。

そのイエスが三十才頃迄は何の事もなく、すごしてきましたが、三十才の時に悟るところがあつて、突然

『私は神かみの使つかひです  
わたしは神かみの子こです』



キリストの説教

と、云いひ出だしました。

ユダヤ人じんはびっくりしました。失望しつぱうしました。

『何なんだい！』

イエスが神かみの使つかひだつて、馬鹿ばか々々しい

貧乏びんぼう大工だいくの子供こどもぢやないか』

『いや！ あれは山師やましだよ』

『氣違ちがひだ』

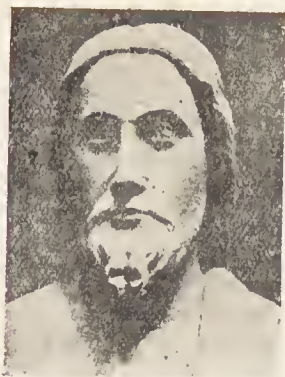
『惡魔あくまの使つかひだ』

そう云いつて、イエスを馬鹿ばかにいたしました。

ユダヤ人じんは、神かみの使つかひは金きんの鎧よろひでもつけて、天てんの一方いっぽうから降おり、ユダヤ人じんを引ひき連つれ

て、世界征伐に乗り出すものと考へてゐたのです。

ところが、イエスの言ふことは、今までユダヤ人が考へてゐたこととはまったく反對のことをいつたものです。



キ リ ス ト

イエスは武力に訴へて世界を征服しようとはしなかつたのです。

イエスの武器は『愛』といふものでした。戦争といふ方法と違つて、説法といふ方法で、諸國民に望み、己の教を信奉させようとしたのです。

だが、イエスの説教したところは、彼の生れた故郷だけであり、期間も僅かに三十才から三十三才の三年間だけでありました。

貧乏大工の子イエスが、たつた三年間しか説教しなかつた。この教が後に全地球上

にひるまり、イエスはキリストとあがめられるようになったのです。

キリストと云ふのは神の使ひと云ふ意味です。

これだけ考へて見てもイエスは偉大な人物であつたに違ひありません。

イエスの一生涯のようすは、新約聖書といふ、キリスト教の方でお経文のように大切に書物の中にこまかに書いてあります。

ローマのケーザルも偉人です。

ケーザルは武力をもつて、歐洲を征服いたしました。しかし、今や、そのローマはありません。

ナザレのイエスは三十三才といふ短い生涯で一生を終りました。しかし、イエスは全ヨーロッパから、廣く全地球上に、信者をもつて、今日までつゞいてゐます。

おもしろい、二人の對照ではありませんか。

## 2 イエス十字架にかゝる

イエスは全地球上に信者をもつてゐます。

イエスは世界中から仰がれてゐます。

イエスは武力をもつて征服しませんでした。

イエスは世界の帝王ともいひませんでした。

しかし考へてみれば、確かにイエスは世界の帝王とも云へるでせう。

イエスが死んで間もなくローマ全體がキリスト教になりました。

ユダヤ人が考へた征服とは違ふが、やはりローマを征服したことになるでせう。

イエスは撲つて従へたのではなく、愛して服従させたのです。

説教したのも僅かに三年です。

聞いた者は漁夫であつたり、百姓達でした。したがつて、イエスはむづかしい事

や、高尚かうしやうなことも決して云いひませんでした。

しかし、いくら考かんがへて見ても、ユダヤ人じんには物ものたりなかつたのです。

どうしても、神かみの子ことは思おもへなかつたのです。

『我われ汝等なんぢらに告つげん。惡あくに敵てきする事こと勿なかれ』

とか、

『すべて我わが言げんを聞ききて行おこなふ者ものを、磐いはの上うへに家いえを建たてたる賢かき人ひとにたとへん、雨降あめふり、大水出おほみづいで、風吹かぜふきて、その家いえを打うてども、倒たふるゝことなし、すべて我わが言げんを聞ききて、行おこなはざる者ものを砂すなの上うへに家いえを建たてたる愚おろかなる人ひとにたとへん』

ユダヤ人じんにはしつくりしないのです。これでは多年熱望ねんねつぼうしてゐるユダヤ王國わうこくが出來できないと思おもつたのです。

遂ついにユダヤ人じんはイエスを、山師やましだ、詐欺者まぎしやだと云いつて憎にくくむようになり、磔はりつけにし、てしまふ様やうに決議けつぎして、ローマの役人やくにんに許ゆるしをもとめました。



ローマの役人も、イエスが、王國を建てるといふのは、つまり、ローマに反對してユダヤ人の獨立を恢復する爲であると誤解し、イエスを刑に處する事に許可をあたへました。

かうして、神の子として生れ、世を救はんと、念願した。聖者イエスも、遂に同胞ユダヤ人の手によつて、十字架上に三十三年の一生涯を終つたのであります。しかも、イエスは十字架上にあつて、更に苦悶の色もなく、彼を殺さんとする人達の幸福を祈つて、

『神よ、彼等を許せ、そは彼等は爲すべき所を知らざればなり』

なすところを知らぬと、イエスに憐まれたユダヤ人は、祖國を滅亡させて二千年になります。ユダヤ人は二千年間、亡國の民として、世界中に放浪してゐます。

そして、未だに、ユダヤ人の中に神の使があらはれて、世界を征服する時がくるのだと信じてゐます。

ユダヤ人は、世界中に散らばつてゐて、常に世界統一の事を計畫してゐるのだと云はれてゐます。

ユダヤ人の間には秘密結社があつて、世界を攪亂しようともくろんでゐるのだといはれてゐます。

ドイツでは、ひどく、このユダヤ人を嫌つて、國外に全部、ユダヤ人を逐ひ出してしまひました。

キリスト教も、ユダヤ人を救ふ教とはならず、ユダヤ人以外に擴まつてゆきました。

イエスは殺されましたが、その教は、彼の弟子、即ち使徒達によつて、だん／＼と廣く、擴まつてゆきました。

### 3 キリスト教ローマに入る

キリスト教を、ローマに傳へたのは、使徒のポーロでした。

ポーロは、非常に學問の深い、辯舌のたくみな人でした。

初め、ローマの役人でしたが、後にキリストの弟子になつたのです。

ポーロは、ローマ人の生活を猛烈に攻撃して、神の福音をときました。

ローマ人は、贅澤三昧な生活をしてゐます。猛獸の争や、奴隸の眞劍勝負と云つた、娛樂をたのしんでゐます。

ポーロはさういふ、つまらない楽しみごとを戒めて、神の福音を、たくみな熱辯によつて説きました。

ローマ人は、ぞく／＼とポーロの弟子に入つてゆきました。

そして、宇宙に唯一のエホバーの神を信ずるようになりました。

そして、世の中でエホバーの神が一番有難く、エホバーの命ずるところに従へばいゝのだと、ローマ人は考へてきました。

それは、ローマ王を輕んずるようにすらりました。

これは、ローマ皇帝から考へて一大事です。したがつて代々の皇帝は、キリスト教をたいへん嫌ひました。キリスト教徒を迫害いたしました。

ネロ皇帝の如きは、キリスト教徒の大虐殺を行つたものです。

丁度、その頃、ローマ市に大火があつて、ローマの町の大半が焼けてしまひました。

ネロ皇帝は、ローマを焼いたものはキリスト教徒であるとなし、キリスト教徒を全部捕へてしまひました。

そして、山の様に集つてきた見物人の前で獅子、その他の猛獸の餌食としたり、幾十臺といふ十字架を一行に立て並べて、これにキリスト教徒を釘付けにし、其の下に薪を積み重ねて、焼き殺すようなむごたらしいことをいたしました。

キリストの弟子で、ポーロと共に有名な人にペテロといふのがあります。ポーロも、ペテロも、この時に十字架で殺されてしまひました。

これに就いて有名な話があります。

ペテロも、ポーロも、その身が危険になつてきました。

そこで、ペテロは暫く、ローマを避けて、時機を待たうといたしました。

朝早く、ローマの町を出て、郊外に向ふ途中、旭の光がまばゆくさし、忽ち一道の

光明が、自分の前に現はれたと思ふと、そこにキリストの姿がはつきりと見えましてた。

キリストは自分と反對に、ローマの町をさして歩いてゆかれます。

ペテロはびつくりいたしました。そして、自分の前に姿を現はして呉れたキリストの愛に喜び、地面にひざまづき、思はず、

『主よ！』

いづくにゆかれますか』

と、叫びました。

すると、キリストはおごそかな聲で、

『お前まへが、かはいそうなローマの民たみを見捨みすて、去きつて行くから、自分じぶんが再び行くのだ、そして、また磔はりつけになるのだ』

と、聞きこえました。

ペテロは、たいそう後悔こうくわいして、すぐローマに、戻もどつて、他の人々ひとぐと共に、どんなおそろしい迫害はくがいも恐れおそえないで傳道でんどういたしました。

しかし、遂つひに捕とらへられて、十字架じかじやう上に殺ころされてしまひました。

ポーロも、同じ運命うんめいを逃のがれることが出来できませんでした。

キリスト教徒けうとの迫害はくがいはそれからもつゞきました。

名高なだかい、賢い皇帝かしてくわうていでさへも、度々たびぐかれ等を迫害はくがいいたしました。

しかしキリスト教けうしんじや信者しんじやは、地下ちかに、數百哩すうまいにわたる地下室ちかしつを設もうけたり、秘密ひみつの會所くわいじよをつくつたりして、信仰しんかうをつゞけました。

殊に、イエスが教の爲に、一身を犠牲にしたといふ例が、キリスト教徒をして、教のために喜んで死につかせたものです。教のために死ぬことはこの上もない幸福な事であると思ひこませました。十字架にかゝつて死ねばキリストと共に天國に入れるのだと信じこませました。こんな工合でしたからどうしてもキリスト教をなくすことが出来ませんでした。

そこで、後には、遂に信仰を許しましたので、しまひにはキリスト教がローマの國教にまでなつてしまつたのです。

恐ろしいものは信仰の力です。

代々の皇帝が必死になつて、禁止をした、キリスト教は遂にローマの國教とまでなつてしまつたのです。

## 七、ローマ帝國衰ふ

### I ローマの皇帝

英雄、ケーザルは、皇帝になる心があるのであらうと疑はれて、殺されました。

それはローマ人が、自由をもとめる民族であつたことと、仲間の一人に威張られるのが嫌であつたからです。

しかし、ローマが天下の中心になつて、ローマが榮へて、ローマ人は、思ふ存分の贅澤が出来るようになりました。

そこで、ローマ人は、たび／＼政治の權力を争ふ亂などなくして、平和でゐたいと考へるようになりましたから、遂に皇帝が出来てもいゝと自然と考へるようになった



のです。かうしてローマは帝國ていこくとなることになりました。

しかし、皇帝くわうていになつた人達ひとたちも、出來できるだけ、ローマ人じんを樂たのしませるように、ローマ人じんに好すかれるようにやつてゆかなければなりません。そういう風ふうにやることは、決してローマ人じんのためによいことではないのですがもともとローマ人じんは戰爭せんそうをなくして樂たのしみたいために王様わうさまをたてたのですからやむを得えません

したがつて、これからますますローマ人じんを、きまりのない、贅澤ぜいたくを好このむ、弱よわい民族みんぞくにしてしまいます。

アウグスツスは内亂ないらんをしづめ、天下てんかを統一とういつした偉人えいじんでしたが、後のちには力ちからのある、立派りっぱな人ひとばかりが出來でてくるといふ譯わけにゆきません。

後の皇帝のちのくわうていも、たとへば、アウグスツスが、たいへん偉えらかつたから、その人の德とくをし たつて、その家いへを王家わうけにしたとか、實力じつりよくでローマ人じんを屈くつ服ぷくせしめて、帝位ていゐについたとかいふのでありませんから、代々よゝゝ子孫そんが後あとを繼つぐといふのもありませんでした。

ローマに皇帝くわうていが出来てみたが、結局けつぎよくうまく行ゆかなかつたといふのも國くにのなりたちがよくなかつたからでせう。

このようにローマの皇帝こうていは今のヨーロッパや支那しなの王様わうさまとは、たいへん違ちがひます。勿論もちろん、日本の天皇てんわうとは、全然ぜんぜん違ちがつたものです。

支那しなに出来た國々くにぐも、ずいぶん厄介やくかいな、困こまつた國くにが多おほかつたのですが、それでも、支那人しなじんは、天子てんしといつて、王わうになるのは、徳とくの高たかい人ひとが天てんの命令めいれいでなるのだと、考かんがへてゐましたから、王様わうさまが、悪い事わるいことをしないかぎり尊敬そんけいされてゐました。

ローマの皇帝くわうていには尊敬そんけいされる理由りゆうといふものがありませんでした。

皇帝くわうていの位くらゐが、尊たふといものなどと考かんがへる者ものがありませんでした。

誰たれでもが、勝手かつてになれる皇帝くわうていの位くらゐです。これでは決けつしてうまくゆくものではありませんし、よい皇帝くわうていばかり出でてくるともかぎらないでせう。

従したがつて、後のちには、皇帝くわうていを脅おびやかしてやめさせ、自分じぶんが代かはつてなるとか、戦争せんそうを起おこして、

天下をとつたり、軍隊を養つてその力で皇帝になるといつた者も出てまいりました。

さうなれば、自然天下が亂れなければなりません。

軍隊といつても、ローマの兵隊は、傭兵の連中ですから、主君に對して忠義といふ考など毛頭ありません。

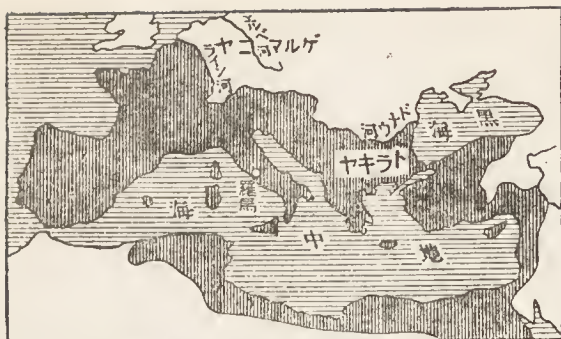
自分達の頭を推し上げて、自分達の好きな人を皇帝にもりたてゝ、後で何かといふことにありつかう、なんと考へてゐるのですから、たまりません。

したがつて、ローマの皇帝は軍隊に氣にいられるようにもしなければなりません。氣にいらなければすぐ亂を起します。

そんな譯で、九十年の間に二十三人も皇帝が、かはつたこともあり、一時に六人もあちらこちらに皇帝が出たこともあります。

昔の、伸びてきた時代のローマ人とは、大變心の持ちかたが、かはつて來ました。こんなありさまでは、もうローマも長くつゞくわけがありません。滅びて行くより

別に道はありません。



域領の國帝馬羅の代時スツスグウア

## 2 ローマの黄金時代

ローマの黄金時代は、なんと云つてもやはりアウグスツス大帝時代でありました。

大帝は、徳もあり、實力もあつたものですから、したがつて天下もよく治まりました。

今までつゞいて來た悪い政治は改まるし、ローマの町も美しくなる、皇帝は、

『朕は煉瓦の町を大理石にした』

と、自らも云つてゐるように、帝都を立派にいたしました。

學問や、藝術のことも奨勵したので、學者や、文人がたくさん出ましたから、この時代をローマの黄金時代と云つてゐます。

アウグスツスの次には養子のチベリウスが立ちました。

チベリウスは疑深い人で、誤つた政治をたくさんしたし、カリグラ帝と云ふのは暴君で臣下に殺され、グラウヂウス帝は軍隊に擁立されて、皇帝になつたもの、この皇帝は今のイギリス島を征伐した英雄です。

イギリス島はその頃、ブルタニヤと云つて野蠻な國でしたが、グラウヂウス帝は、こゝにローマの文化を傳へました。

その他、アフリカの西北部の方面、バルカン半島の全部、シリヤの方面と領土を擴げた立派な皇帝でした。

その次のネロ皇帝は、キリスト教のところでも、一寸書いておきましたが、この皇帝は「暴君」ネロと云つた方が通りがいゝ程に、暴君の見本になつてゐます。



羅馬時代の貴族生活

支那の殷の紂王と、ローマのネロは世界に於ける二大暴君であります。

したがつて、世の中がうまく治るわけがありません。内亂が起つて、ヴェスパシヤヌスが鎮定して即位しました。

ヴェスパシヤヌス皇帝は、皇帝の權力をひろげて、本當の皇帝らしく、皇帝の位をかためました。

前に書きました、コロセウムを起したのもこの人であります。

ユダヤ人の都、エルサレムを完全に陥れユダヤ人を現在のような放浪の民にならしめ

たのも、この皇帝くわうていです。

ユダヤ人は故郷こきやうを逐おはれて、これから二千年、亡國ぼうこくの民たみ、放浪ほうらうの民たみとしての生活せいかつを

つゞけるようになりました。

ユダヤ人じんを故郷こきやうから逐おつたのは、實際じつさいに征伐せいばつに行つた皇子わう子のチツスです。チツスは父ちいの後あとを繼ついで即位そくゐし、コロセウムを完成くわんせいさせました。

### ボ ン ベ イ 市 街

チツス帝ていの時の大きな出来でき事ごと

としてはイタリアのヴェス

ヴィオ火山くわざんの大破裂だいはれつがありま

す。この火山くわざんは一晚ばんの中にボンベイ、ヘルクラネウムの町まちを灰はいの下に埋うづめてしまひま



した。

近頃ちかごろになつて、ボンペイの町まちが掘りはじめられてゐますが、その頃ころの住民ぢゆうみんが逃にげることも出来できず、苦しんだ姿すがたのまゝ、化石くわしきみたいになつて、出でてくるといふことです。以上いじやうの皇帝くわうていからしばらく経たつて、ネルヴァ統とうの皇帝くわうていが五代だいごつゞきます。

ネルヴァ、トラヤヌス、ハドリヤヌス、ピウス、アウレウスで、ローマの五善帝ぜんにていと云いひ、その治世ちせい八十餘年間やへんかんがローマ極盛時代きよくせいじだいです。

トラヤヌス皇帝くわうていはまたく領土りやうどを擴張くわくちやうしてアラビヤ方面はうめんまで征伐せいばつして、ローマの領地りやうちを一番廣ばんひろくした人ひとです。ピウス帝ていは支那しなの方にまで使つかひをよこし、支那しなでは安敦あんどんと呼よんでゐます。これからは名君めいくんも出でなくなつて、ローマ帝國ていこくが愈々いよいよ瓦解くわかいに近ちかづいてゆきます。

### 3 分裂するローマ



大ローマ帝國として、隆盛を極めたローマも、人心が弛み、皇帝にもすぐれた者が  
出なくなつて、次第に衰へて行きます。

かつて詩人が、

ローマの滅びる時は

また世界も滅びん

と、うたつたのですが、その頃の心持ちをローマ人は、もちつゞける事が出来なかつたのです。

紀元二〇〇年頃から、軍隊が、わがまゝになり、皇帝の威力が衰へてからは、ローマのような大帝國を、一人では治めきれなくなつてきました。

それで紀元二八四年に、ディオクレチヤヌスが、皇帝となると、ローマを四つに仕切つて、四人で分括して治めることにしました。

それと共に政治の仕方もいろ／＼と改めましたから、ローマも一時よく治まりました。

さつてしまひました。



羅馬帝國分裂圖

た。

けれども皇帝がなくなつて、また／＼ローマは亂  
れました。

コンスタンチヌス帝が現はれると、遂にローマの  
町を捨て、ヨーロッパとアジアとの境近くにあるビ  
ザンチウムに都を移してしまひました。

ローマ、ローマの始まつたローマの町、ローマの  
祖先から傳えられたローマの町、美しいローマの都  
を捨て、コンスタンチヌスは都を移してしまひま  
した。

ローマ市に住んでゐるローマ人もすっかり心がく

ローマ市にゐる兵隊は亂暴でした。

ローマの市民は皇帝をあまり好まぬ。王の命令をきかぬ性質をもつてゐました。それ等に手を焼いたコンスタンチヌス帝は、ローマ市を嫌つて遂に都をビザンチウ



帝大スヌチンタスニコ

ムに移し、コンスタンチノーブルと町名をつけた。しかし、これがローマを大きく二つに分裂させる原因になつたのです。

ローマ市を中心にしたローマとコンスタンチノーブルを中心にしたローマ、その後テオドシウス帝は、ローマを遂に東西にわけて、二人の子供に配けてから、ローマは東ローマ帝國と、西ローマ帝國と分かれてしまふのです。

大帝國ローマも、遂に大きなからだをもてあます時がきたのです。それはローマに力がなくなつた事を示すものです。

二つに分裂した、東ローマは、大ローマの一部ではありますが、もうローマとは云へないでせう。もちろん、イタリアとは縁がなくなりました。

西ローマだけがイタリアに縁があります。半分になつてしまつたローマ、これから小さくしてみても果たしてながくつゞけることができたでせうか。

自分のからだをもてあましたローマ、そこにこんどは實に思ひがけない敵が現はれました。この敵は本當に、大暴風雨のように歐洲の天地をふきまくりました。

#### 4 ゲルマン民族の移動

ローマが衰へかゝつた頃から、ヨーロッパには、たいへんな事件が起りました。人類史にまたと見られない大事件です。

ヨーロッパの天地はこの頃から、全然變つてしまふのです。

正しく云ふと、現在のヨーロッパは、これから始まつたと云つた方がいゝかも知れ

ません。

それはゲルマン民族といふ新しい分子がヨーロッパに入つて來たといふのです。

イギリスでも、フランスでも、ドイツでも、みんなゲルマン民族です。

ギリシヤやローマと全然違ふ民族が、ヨーロッパ全體に入りこんで來ました。

したがつて、ギリシヤ、ローマ時代と、ゲルマン民族移動後のヨーロッパは、たいへん違つた姿になつた譯です。

現代の大部分のヨーロッパ諸國の先祖が、ギリシヤ、ローマではないのです。

違つた世界が、ヨーロッパに始つたと云つていゝでせう。

現在ヨーロッパを形成する民族の大移動が行はれました。

この頃のゲルマン民族は、たいへんに野蠻な民族でした。

勇猛で、勤勉で、戦争を好む民族でした。これに對して、ローマ人はもうすつかり

元氣のなくなつた民族となつてゐました。

それでもローマが強盛な國家であつた時代には、なか／＼にローマに入りこむことも出來ず、北方の方に潜んでゐたのです。

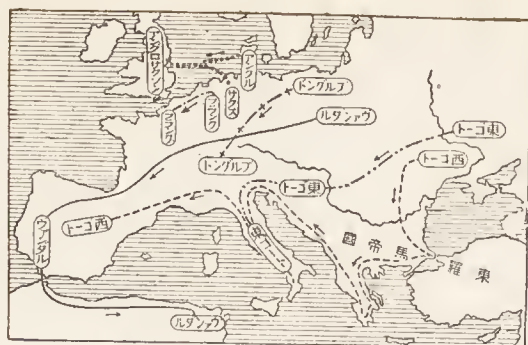
ところが實實剛健だつたローマ人も、ぜいたくになり、おごりにふけるようになつてからだん／＼と國民が軟弱となり、兵隊になることを嫌ふようになりました。

かういふ風に國民の氣風が軟弱になることは何と云つても、その國家を衰えさせる大きな原因です。

おごる平家は久しからず、といふ諺もあります。

そこで、ローマ皇帝は、ローマ人をもつて國を護るといふことが出來なくなつてしまつたのです。しかたがないから、北方に住んでゐた、勇敢なゲルマン人を傭つて、兵隊にしたのです。ゲルマン人は喜んで、ローマの兵隊になりました。

このゲルマン人の兵隊がだん／＼數をましてくると、何しろ強い民族ですから、だん／＼に、のさばつてくるようになりました。



ゲルマン諸族移動略圖

ローマの政治に干渉する、

後には皇帝を勝手に代えてしまふといふ風な力まで持つ

ようになつたのは、前に書いた通りです。

かうなれば、ローマ帝國の威信なんてものは、まったくなくなつてしまつたものといつてもいいでせう。

大ローマの皇帝が、ゲルマン人の軍隊によつて、自由にされ、政治もゲルマン人の考通りやらされるといふことになつたのですからいくら、意張つてみても、もはやローマ人は、ゲルマン人の自由になつてしまつたと見るべきでせう。

この頃、アジアから、蒙古族の一種のフン族といふのが、大舉して、ヨーロッパに移つて來ました。

これに逐はれて、ヨーロッパの西境に住んでゐたゴート族といふのが、ローマの國の方に入つてくる事になりました。

これから、各民族が、逐ひつ、追はれつ、大移動することになるのです。

ローマは弱くなつて、東西に分裂してしまふ。東ローマは、移動して來たゴート人を使つて、西ローマを攻めさせる。西ローマは、東ローマと戦争をはじめて、ゴート人と戦ふと、いつた工合に、ローマが仲間喧嘩を始めたから、今までローマの邊境に潜んでゐたゲルマン人が一度にローマ領土内に、なだれをうつて入りこんで來てしまひました。

ゴート族も、ゲルマン民族の一種です。

突入して來たゲルマン民族は、忽ちにしてローマに攻撃してくる程になつてしまひましたから、ローマ國內は大騒動となつてしまひました。



## 5 ローマ滅ぶ



一世の頃マルゲの軍士

ゲルマン人は、ローマー一帯をふみにじつてゐます。

そのゲルマン人を逐つて來た、アジャヤ人種フン族は、次第にヨーロッパに入りこんで來ます。

フン族といふのが、また勇敢な種族でした。王をアツチラと云つて、アツチラ王の軍勢は丁度、疾風猛火のようでした。

この軍勢が過ぎると、すべてのものが破壊されてゐました。

アツチラは、忽ちの中に中部ヨーロッパを占領し、東ローマ帝國を従がへて、西ローマに迫つてゆきました。

ヨーロッパは、アジア人のために滅ぼされてしまひそうになりました。

おそろしい勢です。

おどろいたのは、ヨーロッパ人です。

ローマ人だ、ゲルマン人だといつてゐる譯にゆきません。彼等は大同團結して、フン族と一大決戦をすることになりました。

バリーの東北にカタラウヌスといふ大きな原野があります。

こゝで、白人大聯合軍と黄色人種フン族が一大決戦をする事になりました。

黄白人種の大戦争です。

東軍の王はアツチラ

西軍の將は西ローマ帝國の將アエチウス

西ゴート王テトドリツク、アラン王

兩民族の關原の合戦です。

アツチラは勝ち誇つた大軍を提げて、威風堂々とカタラウヌ原頭に進んで來ました。

戦は、アツチラ軍の投槍によつて開始されました。

兩軍は、しばらく投槍戦をやつてゐましたが、アツチラは部下の精兵を率ひて、まつしぐらに聯合軍の中央を突破して、敵を二つに分裂さしてしまひました。

つゞいて、疾風迅雷の勢で右翼をまもる。西ゴード軍の側面に殺到いたしました。西ゴート王テオドリツクは自ら陣頭にたち、將士を鼓舞してゐたが、遂に、長槍に當つて馬から落ち、味方の馬蹄に、蹂躪されてしまひました。

この戦は實にもすごいものでした。

たつた一日でしたが、兩軍の死者十六萬餘と云はれてゐます。

久しく雨がなくて、水涸れてゐた諸川に、兩岸から流れ込んだ戦死者の血汐は、忽ち河をなして、流れたと傳へられてゐます。

その後大決戦もなく、對陣してゐたが、西ローマの將アエチウスは、たとへ天佑によつてフン族を全滅させても、かの西ゴート人が必ずローマに仇をするに違ひない。むしろ今此の強敵を残しておいて、ゲルマン蠻族と争はせた方が得策であると考へついたので、俄に聯合軍を解いて退却しはじめた。

アツチラも不思議に思つたが、敵がかへつて行くので、自分も一先づ軍をかへしました。

かうして、黃白兩人種の決戦は物分かれとなつてしまひました。

しかし、西ローマ帝國は、その後ながくつゞく事が出来ませんでした。

西暦四七六年、ゲルマン人オドワケルといふ者のために滅されてしまひました。

ローマの建國は紀元前七五三年から、西ローマ滅亡まで、實に千二百二十九年の長年月にわたつて榮えたのでありましたが、新入民族ゲルマン人の爲に遂に滅びてしまひました。

我が雄略天皇の御代であります。

榮えに榮えた大ローマも遂に滅びました。

それは何故でせう。

つまり、ローマ人が弱くなつて、周りの蠻族を防ぎきれなくなつたからです。

なぜ弱くなつたのでせう。

それは、ローマがあまり榮えた爲に、先祖たちの國を興した千辛萬苦を忘れてしまひ、樂をすることはばかり考へるようになったからです。

ローマはゲルマン人といふ強い野蠻人に亡ぼされました。

しかし、若しもローマ人が、昔のローマ人のように質實剛健であり、愛國の至誠に燃えてゐたら、ゲルマン人位はわけもなく打ち破ることが、できたにちがひありません。

ローマ人を亡ぼしたのはローマ人自身であつたといはねばなりません。

こゝで、ローマの歴史が終りますが、ローマの歴史は私達にいろ／＼なことを教へてゐます。

私達はローマの榮えたことに學び、亡びたことに考へて、立派な尊い使命をなしとげる國民になれるよう心掛けなければなりません。

## 八、中世のイタリー

### Ⅰ ローマ法王

大ローマ帝國は遂にほろびた。

民族の争にほろびた。

新入ゲルマン民族は、歐洲の天地を一變してしまひました。歐洲の天地を縦横に蹴散らしました。

ゲルマン人は野蠻未開の民族でした。

しかし、彼等は強壯でした。

彼等は剛健の氣風に富んでゐました。

彼等は信義に富み、武勇にすぐれてゐました。

彼等は勤勉で、獨立の氣風に富んでゐました。

これが、ゲルマン民族の最大の武器です。ローマ帝國の廣い領土に入つてくると、そこにくつかの國を建てました。

彼等の歴史は侵略から始まつてゐます。

彼等はローマ人の長所を學ぶ事も忘れませんでした。

野蠻未開な彼等もやがて近代文明を築き上げた、イギリス、フランス、ドイツ、オランダ、ロシアなどの國となつてゆきます。

かうした民族にかゝつては、軟弱化した、ローマ人は競争することが出来ません。

これから先<sup>さき</sup>イタリー半島<sup>はんたう</sup>はながく、ゲルマン人<sup>じん</sup>のために幾つかの小國<sup>せうこく</sup>に分裂<sup>ぶんれつ</sup>させられたり、滅ぼ<sup>ほろ</sup>されたりして、立派<sup>りっぱ</sup>な國<sup>くに</sup>が出来<sup>でき</sup>ませんでした。

しかし、ゲルマン人<sup>じん</sup>は、古代<sup>こだい</sup>ローマ帝國<sup>ていこく</sup>を亡ぼ<sup>ほろ</sup>しましたが、ローマの文化<sup>ぶんくわ</sup>は大切にいたしました。

ローマの文化<sup>ぶんくわ</sup>と共に榮えた<sup>さか</sup>キリスト教<sup>けう</sup>には敬服<sup>けいふく</sup>いたしました。

そこでローマ帝國<sup>ていこく</sup>は亡び<sup>ほろ</sup>ましたが、ローマの文化<sup>ぶんくわ</sup>と、キリスト教<sup>けう</sup>だけは、イタリーの土地<sup>とち</sup>と共に残り<sup>のこ</sup>りました。

殊<sup>こと</sup>にキリスト教<sup>けう</sup>の勢<sup>いきほひ</sup>は益々盛ん<sup>ますますさか</sup>になりました。

キリスト教<sup>けう</sup>は、ヨーロッパ<sup>ぜんぶ</sup>全部にゆきわたつて、上<sup>かみ</sup>は帝王<sup>ていおう</sup>から、下<sup>しも</sup>は百姓<sup>ひやくしやう</sup>に至<sup>いた</sup>るまでの心<sup>こころ</sup>を支配<sup>しはい</sup>することになりました。

そのキリスト教<sup>けう</sup>の中心地<sup>ちゅうしんち</sup>がローマの町<sup>まち</sup>でした。ローマ教會<sup>けうくわい</sup>でした。この教會<sup>けうくわい</sup>の頭<sup>かしら</sup>がローマ法王<sup>はふわう</sup>です。



ローマ法王はふわうは、イタリアに領地りやうちをもつて、全ヨーロッパを支配しはいする程ほどの威力りよくを持つてゐました。帝王ていわうよりも法王はふわうの方が一そう高い位たかにあつて、全ヨーロッパを支配しはいしてゐました。

ローマ帝國ていこくは亡びてしまひましたが、イタリアのローマは、依然ぜんとして全ヨーロッパの中心地ちゅうしんちでありました。

今ローマに行つて見ますと、セント・ピーター大寺だいじと云ふのが残のこつてゐます。

この大寺院だいじを見ただけで、ローマ法王はふわうが、どんなに勢力せいりよくをもつてゐたかゞわかります。おそらく世界せかいにこれ程ほど大きな寺院じふんはないでせう。

全部ぜんぶが石造せきぞうで、入り口くちから奥おくまでの長さながが約二一八米メートル、幅はばは廣ひろいところが一五八米メートルもあります。

その堂だうの上うへには高い圓屋根まるやねの塔たふがあります。この屋根やねの絶頂ぜつちやうには金の十字架じかが輝かいてゐます。十字架じかまでの高さたかが一二一米メートルで、ローマの町まちから七哩マイル位くらゐ離れたところから

も、この高い圓屋根が白く光つて眺められます。

この寺院が出来上るには一〇〇年以上もかゝつてゐます。

## 2 法王の破門

當時の法王の力がどんなものであつたかといふ例に一つの有名な話をいたしませう。

ローマ法王の中に英傑グレゴリー七世といふ人があらはれました。



世七ーリゴレグ

グレゴリー七世は列國の君主の上に立つて世界の王となり、列國の是非曲直を天に代つて裁判し、世界から戦争をなくしてしまひたいと考へてゐました。

ところが、その頃、ドイツ皇帝にヘンリー四世といふ、これも英雄がゐました。  
ヘンリー四世は、グレゴリー七世の考へ方に反對して、急に宗教會議をひらいて、  
グレゴリー七世を廢してしまひました。

英傑グレゴリー七世は、大いに怒つて皇帝を破門してしまひました。

そして、ドイツ國民に對して、今後皇帝に對して忠誠をつくす必要のないことを命  
じました。

流石のヘンリー四世も大いに弱つてしまひました。

國內に命令がゆきわたらないだけではなく中には、自分を廢してしまはうと考へる  
者も出て來たのだからたまりません。

この時代にあつては破門程恐ろしい罰はなかつたのです。

ヘンリー四世も、とうとう頭を下げなければならなくなりました。

その年も暮れようとする頃に、皇帝は、皇后と皇子の外に僅か一人の家來を伴なつ

ただけで、本國を出發し、遙々とイタリーにむかひました。

途中にアルプス山があります。

冬のアルプス越えですから、まことに困難な旅です。

或る時は雪崩に魂を冷やし、或る時は絶壁をはつて、危険な山越えをいたしました。

破門されたばかりの艱難辛苦です。

やうやくにしてイタリーに入り、グレゴリー法王のあるカノツサ城に急ぎました。

カノツサの城内にをつた法王は、皇帝が來ても、容易に面會を許しません。

皇帝は、仕方がなく、自分の罪を後悔したといふことを示すために、上着を脱ぎすて、下着ばかりとなり、靴も脱いで、跣足となり、寒さに慄へながら、城の門前に立つてゐました。

なんとみじめな有様ではありませんか。

皇帝はかうして、三晝夜も立つてゐたのです。

カノツサ城主のマチルダ夫人はあまりに氣の毒と思つて、法王にいろ／＼とりなしやうやくの事で面接が許されました。



景光の願歎に人夫ダルチマ

皇帝は城内に走り入り、泣いて法王の足下にひれ伏し、深くその罪を謝して、わづかに破門の罪が許されて、ドイツにかへることが出来ました。

### 3 十字軍

中世に於けるローマ法王の勢力は實に

絶大なものでありました。

イタリーは、ドイツ皇帝に治められてゐました。これが、ローマ法王を常に守護し

てゐました。このドイツ皇帝を神聖ローマ皇帝と云ひました。

中世のヨーロッパは、神聖ローマ皇帝と、ローマ法王によつて支配されてゐました。

ヨーロッパの全部はキリスト教で支配されてゐたのです。

學問でも、藝術でも、みなキリスト教のためのものでした。

裁判もキリスト教の僧侶がやりました。

ヨーロッパはキリスト教といふ色に塗られてしまひました。

迷信は流行する、不善は行はれ、窮屈な、暗い世の中となりました。

世の中で、法王が一番偉くて、次に僧侶、キリスト教を守護する、皇帝、武士が、

尊敬され、一般庶民はみじめな階級となつてゐました。

ところが、かういふ時代がくづれて、ヨーロッパの中に、また／＼大きな變化が起りました。

それは、キリストの墓地のある、エルサレムがトルコ人の爲に占領されてしまつた

ので、これをとりかへす爲に長い間戦争をしたことであります。

トルコ人を征伐して、エルサレムを取りかへさなくてはならぬ！

全ヨーロッパ人は十字架をかざして、起ち上りました。

神のために、エルサレムをとりかへす。

神のおぼしめしの戦争だ、

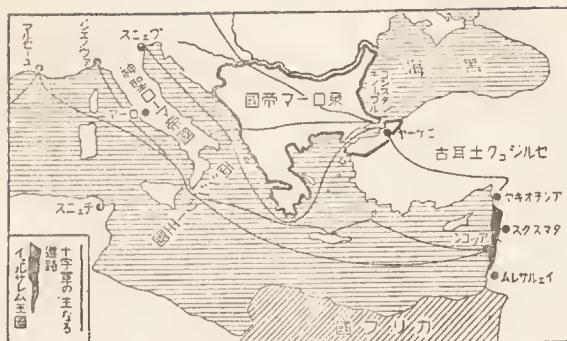
神は我等をまもり給ふ。

ヨーロッパ人は神の軍隊として、トルコに遠征をいたしました。

それが彼等のつとめであり、神の恵に浴することが出来る、この戦も勝てると信じて



十字軍の攻城



十字軍遠征略圖

ゐたのです、

この戦を十字軍戦争と呼んでゐます。

ところが、この戦争を二〇〇年もつゞけましたが、遂に勝つ事が出来ませんでした。

トルコ軍に神罰も下らなければ、十字軍に神の祝福もありませんでした。

十字軍の方では子供十字軍まで出征したのですがこの子供達は多く戦死し、僅かにエジプトに逃げた者も全部奴隷に賣られてしまひました。

かうなると、ヨーロッパ人も神様にこりすぎてゐた事に馬鹿々々しくなつてきます。

今まで法王を尊敬しすぎてゐたことが不思議にな



つてきます。

ヨーロッパ人の考へ方の上に、心の上に大きな變化が起つてきました。

そしてなほ今までの大名も武士も、多く滅びてしまつたので、世の中の様子も大分變つてまいりました。

これに従つて、法王の權力といふものも今まで通り盛んにならなくなりました。ヨーロッパには大きな變化がまた起りはじめました。

#### 4 水の都ヴェニス

イタリアの北部にヴェニスといふ町があります。四方が海でかこまれた小さな島全體が町になつてゐます。四方が海でかこまれた小さな島全體

小さな島に、多くの人が住んで、たくさんの家が建てられてゐますから、島全體はほとんど家で埋まつてしまひ、空地は甚だ少なく、道路も極めて幅の狭いものです。

しかし海中かいちゆうの島しまですから、細い河かはが、縦横じゆうわうに通とほつてゐて、島しまの人ひとは、陸をかの道路だうろよりも、この狭せまい川かはを船ふねで往來わうらいするのを便利べんりとしてゐます。まるで、ヴェニスヴェニスは水みづの中なかから生れ出たような町まちですから、水みづの都みやこと呼ばれてゐます。

このヴェニスの町まちは中世ちゆうせいの頃ころ、今いまから五六百年程ねんほどの昔むかしに盛さかんになつた町まちです。

十字軍戦争じくせんせんそうによつて、武士階級ぶしかいぎふが衰おとろえてきました。

武士達ぶしたちは、戦争せんそうのために、その財産ざいさんを失うしなひ、いろ／＼の權利けんりも町人ちやうにんに賣うつて戦たたかひました。負け戦いけきを、二〇〇年ねんもつゞけたのですから、戦死者せんししゃも多いし、勢力せいりよくもなくなつて、武士達ぶしたちはだん／＼と亡ほろびて行ゆきました。

その頃ころ、町人達ちやうにんたちは武士ぶしが城しろをつくつて住すんでゐるのに對たいして、一つの町まちをつくり、その町まちが一つの國くにのように獨立どくりつしてゐました。

町人達ちやうにんたちは、十字軍戦争じくせんせんそうによつて、新あたらしい東洋とうやうの世界せかいのあることを知しりました。その他た、いろ／＼な知識ちしきを得えました。

これから、町人達は、商賣や、貿易の上に、活潑に働きました。

ヴェニスヴェニスの商人は特に海上で活動をしていました。市民は大きな地中海を船で自由に乗り廻はして東洋の國々と、ヨーロッパの國々との貿易をやつたのです。

従つてヴェニスの町は、大そうお金持ちの町となり、他の立派な國々と同じように勢力がありました。ヴェニスは、金持ちの町でしたから、市内には立派なお寺や、御殿がたくさんあります。

殊に、サン、マルコ寺院と、市廳は有名です。

サン、マルコ寺院は大きなものですが、面白い形をした圓屋根がたくさんあつたり



ヴェニス市の光景

壁や柱が金色にぴか／＼輝いてゐるのが、珍らしく感ぜられます。

正面の入口の屋根の上に、大きな馬の銅像が四頭飾つてあります。

この馬は、ヴェニスの軍艦が、東ローマの都コンスタンチノールを攻めた時、あちらの寺院から分捕りしてきたものだといはれてゐますから、昔のヴェニスが、どんなに活動したかが、想像されます。

市廳の二階には大廣間があつて、その天井から壁には一面繪が描かれてゐます。

ヴェニスの歴史が描かれてあるので、皆ヴェニスの有名な畫家によつて描かれたものです。

ヴェニスの川には珍らしい舟が浮んでゐます。

立派な大理石や宮殿の影をおとした、漫々たる水に、この小さな舟は浮んでゐます。船の舷が角のようにまがつてゐます。それが、木の葉のように輕くうかんで、すい

／＼とすべつてゐます。

ゴンドラと云ひます。

ジェニスの町には、コンクリートの建物や、自動車はみられません。

中世の姿をそのまゝに残したゆかしい町であります。

## 九 イタリア人の活躍

### 1 歐洲の中心地

大ローマ帝國没落後はイタリアには立派な國は出来ませんでした。

神聖ローマ帝國はドイツ皇帝がその皇帝をかねたから、ローマの國名があつても、ドイツ化したローマであります。

イタリアの南部の方にはシシリー王國、ナポリ王國などがありました、あまりふ

るひませんでした。

しかし、歐洲おうれうの中心地ちゅうしんちと云へば、やはりイタリーでありました。

列國れつこくの皇帝くわうていの中でも、神聖ローマ皇帝しんせいは、皇帝中くわうていちゅうの皇帝くわうていといはれました。

歐洲おうれうからは何時いつの時代じだいでもイタリーは忘れられぬ地位ちゐをしめて居をりました。

大ローマ帝國たいこくが嚴然げんぜんとして、存在そんざいしてゐた頃は、勿論もちろん、ヨーロッパはローマによつ

て治められてゐたのです。

大ローマ帝國たいこくが没落ぼつらくいたしますと、ローマ教會けうくわいが宗教しうけうの力ちからで、全ヨーロッパぜんを治め  
てゐました。

一度ど、十字軍戰爭じじくせんさうに失敗しつぱいして、キリスト教けすや、軍人ぐんじんが衰えてくると、地中海ちゅうかいの王者わうじや  
ヴェニスべんが貿易上ぼうえきじやうの中心ちゅうしんを示します。

この様に、イタリーは常に、何かと歐洲おうれうの中心ちゅうしんを示してゐました。  
今また歐洲おうれうは、今までのキリスト教中心けすちゅうしんの世よの中から、新しく出直でなほそうとしてきま

したが、その中心ちゅうしんもイタリアでした。

ヨーロッパでは、キリスト教けりすとうが勢力せいりよくをもつてからは、すっかり學問がくもんや文化ぶんくわが下火したびになつてしまひました。

十字軍戦争じゅうじゆんせんそうで、アジア地方あじあに進すすんだ文化ぶんくわをみてきて、びつくりしたのです。

キリスト教國けりすとうこくが一番ばんすぐれた國くにだと思おもつてゐました。

キリスト教國けりすとうこく以外は野蠻やばんなものだと思おもつてゐました。

ところが、野蠻國やばんこくだと思おもつてゐたトルコに負まけ、その野蠻國やばんこくが、ヨーロッパよりも進すすんだ文化ぶんくわをもつてゐたのです。

歐洲人おしやうじんは何なんとか考かんがへなほさなくてはならなくなりました。

それにつけても思おもひ出だされるのが、ギリシャ、ローマの文化ぶんくわです。

キリスト教けりすとうのなかつた、ローマ時代じだいの文化ぶんくわです。

そこでローマ時代じだいに、かへらなくてはならぬと考かんがへてくるのは自然しぜんです。

キリスト教が、入らなかつたローマ時代に復活をしなければならぬと考へて來ます。

そういう考がイタリーから、始まつて、全ヨーロッパにひろまりました。これから、ヨーロッパに學問の研究が盛んになつて、遂に現代の文化を産むようになつたのです。

かういふ風に、イタリーは何かと、ヨーロッパの中心になつてゐました。近頃になつて、イギリスや、フランスに、世の中の中心が移つてしまつて、イタリーはあまり、振はなくなつたのです。

これを心配して、大いに國民をはげましてゐるのがムツソリーニです。

さて、キリスト教時代が終つて、近代文化の時代に入るとき、イタリーからどんな人達がでてきたかを調べてみませう。

この時代を文藝復興といふのです。



と骨折りをいたしました。

これからだん／＼世の中が自由な春のようにのび／＼とした世の中になつてくるのです。

ペトラルカもボツカチオも詩人でしたが、今までキリスト教のお坊さん達がつくつてゐた詩と違つた、美しい詩をつくりました。

畫家の方では、同じく、イタリーからラファエルとかミケランジェロ、チチアなどといふ、美しい畫家が出て來て、文藝復興のさきがけをいたしました。

これはたちまち全ヨーロッパにひろがつてはな／＼しい文化が生れてくるようになります。

### 3 地球は廻る

地球が廻る！

何でもないことです。

地球は西から東へ廻る！

こんな事は誰でも知つてゐます。誰もかう云つても不思議に思ふ者はありません。

ところが昔の人はそう思つてゐませんでした。

地球は動かないで、太陽が、東から西へと廻つてゐると思つてゐたのです。

ことに、中世の人達は、聖書といふキリスト教のお經文に書いてあることが正しく

て、まちがひないと信じてゐましたから、決して地球が動く！

などと考へませんでした。

だが、學問がヨーロッパの一般にひろまつてきて、いろ／＼と天文のことなど研究されて見ると、だん／＼聖書に書いてあるのが正しくないと氣づいてきたのであります。

地球が動く！

人類の中で一番先きに氣附いたのが、コペルニクスといふ人でした。

しかし、うつかり、そんなことを云ひ出したら、どんな事になるかわかりません。何しろ、聖書に嘘がかいてあるといふことになるのだから、なか／＼大變なことです。

教會のお坊さんや、法王といった者たちが何といつておこるかわかりません。

そこでコペルニクスは三十六年間も黙つてゐて、死ぬるときにはじめて、書物にしました。

しかし、コペルニクスは、その書を見ないで死んでしまひました。

印刷屋ではびつくりいたしました。もしこんな書物が外に知れたら、どんなことになるか知れぬと、職工さん達は、側に鐵砲を用意してゐて、仕事をしてゐたといふことです。

まことに、もの／＼しいことではありませんか。もちろん本になつても、ひろくゆきわたりませんで、ごく秘密にされてゐました。

ところが、これをひろく世の中に云ひ出した者がイタリーから現はれました。

ガレリオです。

ガレリオはイタリーのビザの人です。

ビザには有名な斜塔と云つて、斜にかしいでゐる高い塔があります。

この塔の中に下つてゐたランプの揺れるのを見て不思議に思ひました。

どんなに大きく揺れても、小さく揺れても揺れる時間がどうも同じらしいと氣づいたのです。

そこで、自分のドキン／＼と打つてゐる脈を數へて、ランプの動く回数調べて見ると、同じ時間に、同じ回数だけ動くといふことがはつきりいたしました。

それからいろいろ研究して、遂に振子時計の理を發見したのです。

なほ、ビザの斜塔の天井から、おもりを下げて振子を研究してゐる中に、また一つの不思議な事に氣がつかしました。

それは長い間に次第と振子の方向が變るといふことです。

そこでガレリオは振子の方向の變るのは、地球が動くからと考へつき、望遠鏡で天體を觀測し、遂に地球が動くものであるといふことを、確めることが出來ました。

そこで、その事を書物に書いて出しましたから、たまりません。ローマ教會の僧達けうくわいそうたちが讀んで、かん／＼に怒りました。

ガレリオをローマに呼びつけて、地球が動くものでないと云ふことを誓へと云ひました。ただが彼はやはり、

『しかし、地球は廻る』

と、口の中で云つたので、ローマ法王は怒つてしまひ、彼を罰してしまひました。

地球は廻る！

まちがひはありません。

この正しい學者をローマ教會は罰してしまひました。

ローマ教會けうくわいひとたちの人達は、ガレリオを罰ばつしてしまへば地球ちきうがうごかなくなるとでも思おもつたのでせうか。

たとへ、ガレリオが死しんでも、この正ただしい眞理しんりにはかはりありません。かうして、イタリー人は科學くわがくの方ほうの先鞭せんべん者しやともなりました。

#### 4 東方見聞記

イタリー人は、次つぎから次つぎへと、全ぜんヨーロッパ人じんに新あららしい事ことを教おしへてゆきます。ダンテや、ミケランゼロ等らうは、キリスト教けうの藝術げいじゆつ以外いぐわいに、もつと美うつくしい、のびのびした藝術げいじゆつの世界せかいのあることを知しらせ、ガレリオは、命いのちを捨すてゝ、天文界てんもんかいの不思議ふしぎを教おしへました。

こんどは、ヨーロッパ以外いぐわいに東洋とうやうといふ、たいへん立派りっぱな世界せかいがあり、その中なかには日本にっぽんといふすぐれた國くにがあると、知しらせたマルコ、ポーロといふ人ひとが、またもやイタ

リーのヴェニスから出て來ました。

ヨーロッパ人はたゞ／＼びつくりしてゐるばかりでした。

マルコ、ポーロはベニスの大商人の子として生れました。



マルコ・ポーロ

マルコの父は支那の方まで商賣に出掛けてゐたものですから、いろ／＼と珍らしい話や、おもしろい話をたくさん知つてゐました。

マルコは、父の話を聞いてゐると、だん／＼に東洋の事が面白くなり、どうしても東洋に行つてみたいと思ふようになりました。

そして十六才の時に、やうやく、父にゆるして貰つて、支那の方へ出掛けました。その頃、支那では、世界最大の國を建てたと云ふ元の時代でした。

マルコは、ベニスを出發して、中央アジアを通り、途中、たいへんな困難をおかし

て、四年めに、元の都につきました。

大王勿必烈は、マルコを、たいへんかはいがつて、朝廷に重く用ひました。

それから、マルコは十七年も、元に住んでゐました。

その間にマルコは、すっかり支那の生活になれてしまひ、方々の様子も研究いたしました。

マルコは數ヶ國の言葉に通じてゐました上に、諸國の地理や事情も知つてゐたので、元帝勿必烈は深くポーロを愛しました。

元が日本に攻めよせてきて、大敗したのもこの頃です。

ポーロは、ヨーロッパと支那以外に、もう一つ、日本といふ立派な強い國があることを知つてびつくりいたしました。

後にポーロ達は二十五年振りで故郷ヴェニスにかへりました。

何しろ二十五年振りに歸つたのですから、浦島太郎と同じで、故郷の様子がすつか



り變つてしまつてゐました。

ながい支那の生活をしてゐた爲に、顔かたちまで變つてしまひました。

なか／＼故郷の人達が判つて呉れませんでした、元の皇帝からいたゞいたためづらしい土産物をたくさん見せて、いろ／＼と説明して上げて、始めて判りました。

それから、市内の少年達が毎日、マルコのところにやつて來ては、東方諸國の珍らしい話をきいておどろいてゐました。

マルコはあまり毎日、たくさんな人達が話を聞きに來るので、一々話をするのも大變なので、東方諸國のことを一冊の書物に書き上げました。

『東方見聞記』がそれです。

この本には印度、マレー半島、支那の事などが、おもしろく、珍らしく書いてあります。

日本の事も書いてあります。

日本にっぽんの事ことをヂバンにっぽんグと云いふ名なで書かいてあります。

日本にっぽんといふのを、なまつてヂバンにっぽんグと云いつたものです、

西洋人せいやうじんが、日本にっぽんの事ことを知しつたはじめです。今いまでも、西洋人せいやうじんは日本にっぽんの事ことをヂヤバンな  
どゝいふのは、ヂバンにっぽんグと云いふのが更さらになまつたものです。

東方見聞記とうほうけんぶんきには日本にっぽんのことを、こんな意味いみに書かいてあります。

『日本にっぽんは、支那しなの海岸かいがんから東ひがしの方はうへ一五〇〇里かいりも離はなれた海うみの上うへの一大島國おほしまぐにです。  
國民こくみんは色白いびろしく、禮儀れいぎ作法さの正ただしい立派りつぱな人達ひとたちです。

神かみをあつく信しんじ、天皇陛下てんわうへいかが治をさめてゐます。

此この國くには黄金わうごんが、實じつにおびたゞしく産出さんしゅついたします。

どの位くらゐまだ埋うづまつてゐるか見當けんたうもつかぬ程ほどです。

天皇陛下てんわうへいかは輸出ゆしゅつすることを嚴禁げんきんしてゐますから、貿易ぼうえきはあまり盛さかんではありません。

宮殿きやうてんは、屋根やねでも、天井てんじやうでも、すべて純金じゆんきんでもつてつくられてゐます。

各室には、黄金製のテーブルや、器物がおかれてあります。

寺院の窓や床も金でつくられてゐます。

此の國はまた多くの眞珠を出します。その色は淡紅く、その形は圓るく大きくて白い眞珠よりも美事です。

この國は完全な獨立國です。

元の勿必烈が、大艦隊をもつて、征服せんとしたが失敗しました。

實に日本は、美しい寶の國です』

今まで、ヨーロッパ以外に世界がないと思つてゐた、西洋人は、この東方見聞記を讀んで、どんなにおどろいた事でせう。

そして誰でも、一度は日本に行つてみたいと考へないものはありませんでした。

したがつて、これから、どし／＼と西洋人が東洋へ、東洋へとやつてくる事になり遂にアメリカ大陸發見といふ大事件となるのです。

## 5 コロンブスのアメリカ發見

ヨーロッパ人は、マルコ・ポーロの「東方見聞記」を讀んでからは、しきりと、支那や日本に憧れました。

誰でもが、支那や、日本に行つて見たいと思ふようになりました。

ところが、ヨーロッパとアジアの境に、オスマン、トルコといふ強い國が出来てしまつたので、ヨーロッパ人は東洋の方へ行けなくなつてしまひました。

これで一番困つたのが、イタリーの貿易商人です。

今までインドから、いろ／＼と珍らしいものを輸入して、商賣をしてゐたものが、急にトルコの爲に途が中斷されてしまつたのですから、もう商賣が出来なくなつてしまひました。

そこで、どうしても、新らしくインドに行く途を開かなくてはなりません。

その途みちの一つとして、アフリカをぐるりと廻まはつて、インドに行く道みちを見つつけようとするものがありました。

これは、たいへんな苦勞くろうした揚句あげくに、ポルトガル王の助けによりヴァスコダ、ガマといふ人によつて成功せいこういたしました。

ところが、この頃ころ、また新しい事ことを云いつて人々を驚おどろかした人がイタリーに出でてきました。

天文學者てんもんがくしやのトスカネリです。

トスカネリは、地球ちきうが圓まるいのであるから、インドに、行くには、アフリカを廻まはつてゆゆくよりも、反對はんたいに西にしの方はうへ直航ちよくかうした方が早速はやみちだといふのです。

東方とうほうのインドに行くのに、西にしの方はうへ行いつたが近いと云いふのだから驚おどろきます。

この説せつを信しんじて、實際じつさいにやつてみたいと考かんがへたのが、これも同じイタリー人じんコロンブスです。

コロンブスは幼い頃から、船乗りになつた勇敢な性質の持ち主でした。

どうかして、西の方からインドに出たいと考へたコロンブスはポルトガルが航海に熱心であつたので、ポルトガル王に、

『私は西の方からインドに出たいと思ひます。そして、インドに出る近路を發見したいと思ひますから、お援助をしていただきたくございます』と、願ひ出しました。

一體、そんなことが、できるのかできないのか、夢のような話ですから、王も決して、家來達に相談いたしました。

ポルトガル人は、コロンブスの話を聞いておどろきました。

そして、新しいインド航路をイタリー人によつて、發見されるといふことを、美ましく思ひ、何とかして、そのてがらをうばつてやらうと思ひました。

そこで王に、

『コロンブスから委しく説明をきかなければ成功するか、どうかと、いふ見當がつきません』

と、返答を申し上げたのです。

コロンブスは、此の話をきいて、早速、細い計畫や、明細な地圖を提出して明瞭に説明いたしました。

ところが、卑怯にも、ポルトガル人はこれをとりあげてしまつて、しかも、ひそかにこの計畫と地圖に依つて、探検隊を出してみたのです。

もとより、こんな卑怯未練の人達によつて行はれたことですから、とても成功する筈がありません、悉く失敗に終つてかへつてきました。

そこで、家來達はくやしがつて、王様に、コロンブスの計畫はでたらめで、とても成功なんか出来そうもありませんと、申し上げてしまつたのです。

コロンブスはこの事を知つて、烈火の如くに怒つて、本國にかへつてしまひました。

本國にかへつて、本國政府に願つてみたのですけれども、やはり用ひて呉れません  
でした。

しかたなく、ヴェニスに行き、計畫しましたが、また失敗いたしました。

しかし、コロンブスの志はそんな事位でくぢけるような弱いものではありません  
でした。かならず、やつてみせるといふ心はます／＼強く、こんどはイスパニヤに行  
つて、王に歎願いたしました。

コロンブスの立派な計畫と、強い意志は、遂に、皇后イサベラによつてみとめられ  
ました。

イサベラ皇后は、コロンブスを助けて、新航路を發見させようと、決心いたしまし  
た。

コロンブスの多年の宿望が達せられたのです。彼は天にも上る心地がして、用意萬  
端を整へ、勇みに勇んで、イスパニヤのバロス港を出發いたしました。



西曆一四九二年八月三日

一八四

コロンブスの乗つたサンタ、マリヤ號を先頭に三隻、乗組員百二十餘人でした。

寢ても忘れられぬ、ジバング、即ち日本に行けるのだ！ コロンブスの胸はよろこびにあふれてゐました。

未知の大海に漕出したのです。

果たして、インドにゆけるか、日本に出るかわかりません。

地球は圓くなくて、海の果ては絶壁になつてゐるのかも知れません。

考へて見れば、これ程の冒険がまたとありませうか。

船は本國を遠ざかつてゆきます。

次第に陸地から離れてゆきます。

乗組員は、だん／＼心細くなつてきました。

或る一隻の乗組員は、わざと舵を折つてしまつて、途中から引き返さうとしました。

しかし、コロンブスは許しません。

アフリカのずっと端にある島に寄航して、船を修繕し、ふたゝび、航海をつづけました。

これからは、いよいよ未知の世界です。

アフリカともわかれてしまひます。

アフリカとわかれて、三日間といふものは、全く海に風がなく、船は油を流したような海面を、愉快に進んでゆきました。

白い鷗も飛んでゐます。

九日目の夜明け頃から少しく風が吹いてきたものですから、十分に帆を張つて、西へ西へと船を走らせました。

いまはもうすっかり陸地の影も見えません。

見渡すかぎり青海原です。

いくら行つても水ばかりです。

帆に一ぱい風をはらんでまつしぐらに、一體どこに向つて進んでゐるのでせう。

乗組員の中には寂しくなつて、泣きだすものも出て來ました。元氣がなくなつて黙りこんでゐる者もありました。

コロンブスは、そういふ人達をなぐさめるのにどんなにか骨を折りました。

かうして幾日か進んでゐる中に、船は熱帶地方に入つて、毎日猛烈な暑さがつゞきました。

おじけついてゐた乗組員達だからたまりません。

『あゝ、今に熱湯の海に行くに違ひない』

『地獄の海だ！』

そういつてゐたときに、どうでせう。風もないのに、すさまじい海鳴りがしてききました。

それとともに忽然と怒濤がわき起りました。

船は顛覆しそうです。

『いよ／＼地獄だ！』

『海神の怒りだ！』

船員達は蒼くなつて、ふるへ上りました。

これは大洋中の遠方につた暴風の餘波を受けたものですが、かつて、かうした事に出會つたことのない船員は、すっかりおじけてしまひました。

『陸なんか見えやしないぢやないか！』

『地獄海だよ』

そして、ひそ／＼と相談して、コロンブスを海に投げいれ、船を引き歸さうとしました。

その時一人が、

『陸地だ！』

陸地だ！

陸地が見えた！』

と、叫びました。

船員一同は驚いて、海の彼方を見渡しました。

見える！ 地平線に陸地の影が見える。

彼等の喜び方はたいへんなものでした。

だが、明る朝になつて見ると、その陸地は影も形もなくなつてゐました。

恐らくは暮方の雲であつたのでせう。

かうして、月日は流れて十月七日になつた。二ヶ月間は水ばかり見てゐたのである。

もう、かへるのめたいへんな距離になつてしまひました。

二〇〇〇哩以上も航行して來てゐるのであります。

コロンブスが、ジバングを發見出來ると測定した距離はとつくにすぎてしまひま

した。一同はたゞ運を天にまかせて航行しはじめました。

と、丁度この日、それは何日振りであつたらう。

『鳥だ！』

と、誰かゞ云ひました。

『鳥だ！』

皆集つて來ました。

『飛んでゆく方向を調べよ』

コロンブスは云ひました。

『西南！』

羅針盤係が云ひました。

『舵を西南へ！』

船長の命令だ。

——陸がある——

皆の胸の中にそう響いた。

『草が！』

水面を眺めてゐた一人が云ひました。

船上は急に、活き／＼として來ました。

船は西南に舵をとつて、翌朝まで進みました。

翌朝午前二時頃

先頭の船から一發の號砲がなりました。

ふと、見ると、彼方に火がちら／＼と見えるではないか。

『ヂバング！』

コロンブスは叫んだ。

## 『デバンダ！』

乗組員は狂せんばかりに喜んだ。

やがて陸影が現はれた。

船は夜更け頃、海岸についた。

陸地に安着したのだ。

コロンブスは大地にひれ伏し、感極つて泣きつゝ天に感謝いたしました。

新大陸が発見された瞬間です。アメリカ大陸が世界に発見された瞬間です。

しかし、コロンブスは、あくまでも東洋だと、思つてゐました。日本の近くか、印度

の近くだと思つてゐました。

三二三〇淫 六十九日間の苦闘だつた。これから、コロンブスは四回もきたのであ

つたが、遂に死ぬまで、東洋だと思つてゐたのであります。

後に、これもイタリー人のアメリカ、ヴェスプツチが極めて、詳細に、研究して、



新大陸しんたいりくであることをハッキリさせた爲ために、この人ひとの名なをとつてアメリカと名なづけられたのであります。

このように、アメリカは、イタリアに縁ゆかりの深いものです。だが、このアメリカも、イタリアの發展はつてんする天地てんちになることが出来できませんでした。

とにかく、世界せかいに一つの新大陸しんたいりくが加くははつたのです。これから、ヨーロッパ人じゅんはますます學問がくもんを研究けんきゅうし、海外かいがいに發展はつてんするようになったのです。

このように、イタリア人は近代きんだいのもとを次第しだいに開拓かいたくして行いつたのであります。たゞ、イタリア本國ほんこくが立派りつぱな獨立どくりつをしてゐなかつたばかりに、かうした實たからは、全部ぜんぶ他國たこくにとられてしまはなければなりませんでした。

おいしいことです。

そこで、イタリアは立派りつぱな建國けんこくをしなければならぬと考かんがへてくるのも當然たうぜんでせう。こゝに近代きんだいイタリアの建國運動けんこくうんどうが始はじつて來きます。

しかしすでに他の諸國に遅れて、建國するのですから、他國と競争するには、ずいぶんと困難があるといふことも、またやむを得ないことでせう。かうして、イタリーはおくればせながら建國運動を起してゆきます。

## 一〇、イタリーの統一

### 1 建國の志士ガヴール

大ローマが亡びてからも、イタリーは、何かと、ヨーロッパの中心をなしてゐました。

ローマ法王は宗教の力で、全ヨーロッパを支配してゐました、ヴェニス、フロレンス、ゼノアなどは商業の上から、全ヨーロッパの中心になつてゐました。

その他、學問でも、藝術でも、イタリアは、ヨーロッパの中心を示してゐました。しかし、國內は幾つかに分裂してゐて、あまり振ひませんでした。



ル　　ー　　ヴ　　ル

いくら、新航路を発見しても、新大陸を見つけても、うまい汁をすふのは、全部、他國でありました。國內が統一されてゐないからです。

あのせまい、イタリアの中には、幾つも小さな國があり、法王領があつて、またお互が相争つてゐました。

フランスのナポレオンが盛んであつた頃は、ナポレオンに屬してゐました。ナポレオンはイタリア王とも云つてゐたのです。

後にオーストリアが盛んになると北の地方はオーストリア領になつてゐました。こんな工合ですから、イタリアが盛んになれる筈がありません。

どうしても、イタリアが全部統一されなくては、今に、他民族の爲に、亡ぼされてしまふかも知れません。

すでに、イギリス、フランス、ドイツ、ロシヤなどは、立派な國を建國して、強大になりつゝあります、

イタリアも統一しなくてはなりません。國中がうつて一丸となつてゆかなくてはなりません。

これはイタリア人民の、全部の願になつて來ました。

この時に現はれたのが、英傑ガヴールです。ガヴールは、幼い頃から、頭がよくて十八才で、士官學校を卒業してゐます。

ガヴールは、どうしても、全イタリアが統一されねばならぬといふ考を、熱烈に持つてゐましたから、一たん、軍人をやめて、列國の間を廻つて歩きつゝ知識をひろめてきました。

そこで、カヴールは、イタリーが統一とうされるには、どうしても、他國たこくの力を借りなければならぬと、考へかんがました。

ガヴールは、イタリーの中にいくつかの國くにがありましたが、その中のサルヂニヤの國民こくみんであつたのです。

したがつて、ガヴールは、サルヂニヤの力ちからで、全イタリーを統一とうしようと思へたのです。

それには、誰たれか味方みかたをして呉くれなくては、他國たこくを統一とうすることが出来できないわけです。丁度ちやうど、その頃ころ、クリミヤ戦争せんそうが起つてゐました。

クリミヤ戦争せんそうといふのは、ロシアと、トルコ、イギリス、フランスの聯合軍れんがふぐんとの戦争せんです。

ロシアとイギリス、フランスとは昔むかしから仲なかが悪わるかつたのです。しかし、この戦争せんそうでは聯合軍れんがふぐんが非常ひじやうに、苦戦くせんをいたしました。

これを見たガヴールは、

『よし！ 今だ！』

と、起ち上りました。

彼はサルヂニヤ王、エマニエルに進言いたしました。

『王様！ 今です、

我國が、イギリス、フランスに近づくのにたいへんいゝ時です、

兵を出して、英佛を助けませう』

そして、遂にサルヂニヤは一萬五千の兵をクリミヤに出して、英佛を救ひました。  
かうして、クリミヤ戦争は、聯合軍の大勝になりました。

英佛は、サルヂニヤから恩を受けた譯です。これで英佛はサルヂニヤに對して、何か恩返しをしなければならなくなりました。

このような様子につけてこんで、ガヴールはフランス王ナポレオン三世にイタリー

立運動りつうどうの相談さうだんをもちかけたのです。

フランスは強敵きやうてきオーストリアを、おさえる爲ためにも、それが便利べんりであると考かんがへ、ガヴールに二十萬まんの兵へいを出だして獨立戰爭どくりつせんそうを助たすけようと約束やくそくをし、イギリスも場合ばあひによつては出兵しゆつへいしてもいゝと約束やくそくして呉くれたのですから、ガヴールの喜びよろこは、たいしたものです。

イタリー半島はんたうを統一とつして、獨立出來どくりつできる！

ガヴールの血ちは湧わきたちました。

サルヂニヤ人じんの意氣いきも盛さかんです。

エマニエル王わうは遺書ゐしよをしたゝめて、決死けつしの覺悟かくごで一線せんに立つ事ことになりました。光榮くわうえいのイタリーが獨立どくりつするのだ！

かくして宿敵しゆくてきオーストリアに、宣戰布告せんくふこくをいたしました。

一八五九年四月三十日にち、兩軍りやうぐんは遂つひに戰端せんたんを開ひらきました。

五月二十日に戦闘が開始されて、サルヂニヤ熱血兒は縦横に狂ひ戦ひました。

愛國の熱火に、流石オーストリアも支へる事が出来ません。

みるゝ敗退して、六月二十四日のソリフエリノの激戦では、九時間の交戦に二萬の死傷を出して、オーストリア軍は退却いたしました。

オーストリア軍は國境に退いて、堅固な要塞にたてこもりました。

長期抗戦です！

然るに、臆病なナポレオン三世は、この長期戦を嫌つて、勝手にオーストリア軍と和議を結んでしまいました。

かくして、獨立運動は半にして、ナポレオン



ナポレオン三世

三世の變心により、サルヂニヤ王の心をくちいてしまいました。



收まらぬのは憂國の志士ガヴールの心中です。王の優柔不斷を憤り、ナポレオン三世の變心を罵り、遂に官を捨て、故郷にかへつてしまひました。

折角の獨立戦争も途中で折れました。

サルヂニヤ人の心も収りませんでした。

一旦は和議を結んだサルヂニヤでしたが、ウツ／＼として、樂しめぬ日を送つてゐました。この風雲に乗じて現はれたのが、奇傑ガルバルヂーです。

## 2 奇傑ガルバルヂー

イタリーの三傑と呼ばれる人にガヴールとマツチニと、ガルバルヂーがあります。マツチニも早くから、イタリー獨立の事を考へてゐましたが、サルヂニヤが、オーストリヤと和議を結び、ガヴールが失意のあまり、故郷にかへつてしまつたといふことをスイスにゐて聞きましたから、急いで歸國いたしました。

イタリーの<sup>ひとたち</sup>人達は、皆<sup>みな</sup>ナポレオン三世<sup>せい</sup>の變心<sup>へんしん</sup>を憤<sup>いきど</sup>つてゐます。そしてだんぐと  
『我々<sup>われく</sup>は、我々<sup>われく</sup>で獨立<sup>どくりつ</sup>を立派<sup>りっぱ</sup>にしよう』  
と、考<sup>かんが</sup>へるようになりました。



サルバルガ

サルザニヤ以外<sup>いそわい</sup>のイタリー諸國<sup>しよこく</sup>もだんぐと  
『我々<sup>われく</sup>は、サルザニヤに合併<sup>がつぺい</sup>しよう』  
と、考<sup>かんが</sup>へて來<sup>き</sup>ました。

其處<sup>そこ</sup>にマツチニがかへつてきたのです。

マツチニは、それ等<sup>ら</sup>の諸國<sup>しよこく</sup>の間<sup>あひだ</sup>にあつて、たく  
みにとりなし、遂<sup>つひ</sup>にサルザニヤと中部<sup>ちうぶ</sup>イタリーの

大合同<sup>だいがふどう</sup>の下準備<sup>したじゆんび</sup>をつくり上げました。

その中<sup>なか</sup>には數百年<sup>すうねん</sup>來<sup>き</sup>つゝいて來<sup>き</sup>た法王領<sup>はふわうりやう</sup>もあります。

マツチニは、この下準備<sup>したじゆんび</sup>を、提<sup>たづ</sup>へて、サルザニヤ王<sup>わう</sup>エマニエルに、謁見<sup>えつけん</sup>して、建議<sup>けんぎ</sup>

しようとなりました。

王は、再びガヴールを任用して、マツチニの計畫を相談しました。

ガヴールは喜びました、大賛成いたしました。英雄二人はこゝに手を握りあつて、イタリー建國を誓ひました。

この頃、南部イタリーにも奇傑ガルバルデーがありました。

二人は、遙かにガルバルデーに手をさしのべました。

こゝに名トリオ、イタリー建國の三英雄がしつかと、手を握り合ふことができたのです。

ガルバルデーは、イタリーのカブレラ島に生れました。

少年時代には、舟乗りが好きで、常に大海に乗り出して遊んでゐました。

彼の身體も精神も、この海上生活で、鐵のように、かたく、鍛鍊されました。

その上に彼は生れつき、燃えるような、愛國心を持つてゐました。

大きくなつて、しば／＼イタリア統一の爲に力をつくし、幾度生命を失はうとしたことがあるかしない程です。

しかも、志を翻しませんでした。

ガルバルデーはガールの獨立運動のしらせをうけて、血を躍らせた。  
更にシシリー島にもイタリア統一の運動が起りかけました。

ガルバルデーは、カブレラ島の義勇兵千九百をひきつれて、シシリー島に渡りました。

シシリー島の人民は歡呼して、彼を迎えました。あらそつて、彼のところに集つてきました。忽ちにして、シシリー島はガルバルデーのために、征服されてしまひました。

ガルバルデーの軍隊は、皆赤色の軍服を着てゐたために、赤色軍服軍とも赤色黨とも云はれてゐました。

赤色軍服軍の偉力は、忽ち、全イタリアに傳はりました。士氣は過激で、猛烈でありました。

シシリー島を統一した赤色軍服軍は、突如南イタリアに上陸いたしました。

人民は喜び勇んで、彼の部下になります。

誰一人として、ガルバルヂーと戦ふ力はありませんでした。

南イタリアシシリー王國の都ナポリは難なく、ガルバルヂーに占領されてしまひました。

一方、ガヴール、マツチニはサルヂニヤ王を奉じて、次第に南下して來て、法王領を收めローマ市に入り、こゝに王軍と、赤色軍服軍が歴史的會見をいたしました。

ガルバルヂーは進んで、自分の占領地を王に獻上し、イタリア全土は、略々征服統一され、エマニエル王はイタリア王冠を戴き、フロレンスに都して、イタリア建國の大業が完成されました。



見會のとーザルバルガと王ヤニヂルサ

イタリーは遂に獨立した。

光輝ある大ローマを生んだイタリーは遂に獨立した。

ガルバルヂーはイタリーが獨立すれば、もう自分の任務が終つたと云つて、一切の名譽も地位も捨て、飄然と故郷カプレラ島の我が家にかへり、一農民として靜かな一生を終つたと云ふことです。

奇傑ガルバルヂー、その美しい、尊い一生は全イタリー人に神の如き尊敬をはらはせてゐます。

その後、イタリーはプロシヤ、オーストリヤ

戦争に、プロシヤに味方をし、イタリアからオーストリヤを逐ふことに成功し、プロシヤ、フランス戦争の時に、ローマを守つてゐたフランス兵を敗つて、ローマを占領し、イタリアは光輝あるローマに都をして、全島を統一することに、成功いたしました。

この後、イタリアはヨーロッパ強國の一たる勢となり、トルコとの戦争に勝つて北アフリカに領地をひろめました。

世界大戦には聯合軍に加はり、オーストリヤを撃つて、また此の方に領地を加へました。

今はムツソリニーといふ大政治家に率ゐられて、ますます隆盛を加えてゐます。次にムツソリニーのお話をいたしませう。

## 一一、驍雄ムツソリニー

### i 鍛冶屋の子ベニト

一代の風雲兒ムツソリニー、今歐洲はムツソリニーに依つて動いてゐると云つていい。

ギョロツとした大きな眼で睨むムツソリニーの顔は全世界の人達を恐れさせてゐます。世界中の人達で、一番日本人に親しまれてゐるのも亦ムツソリニーであります。

このムツソリニーを生んだのは、イタリーのロマニヤ地方にある、ドヴァイアといふ小さな村でした。

一八八三年、七月二十九日、日本で云へば、明治十六年、うららかな日曜日、村の



鎮守祭ちんじゆさいの日ひに生うれましました。

ムツソリニーは日曜にちようつ子こです。

昔むかしから日曜にちようつ子こは幸運かうんにめぐまれてゐるといはれてゐます。

ムツソリニーはこの日曜にちようつ子こ、幸運かうん兒じとして生うれましました。

ムツソリニーの名前なまへを、ベニトと云いつてゐます。ベニトは鍛冶屋かぢやの子ことして生うまれましました。

『喧嘩鍛冶けんかかぢ』と云いはれる亂暴らんぱうな父親ちちおやの子ことして生うまれましました。

このお父さんとほは、子供こどもに對たいして非常ひじやうに嚴格げんかくな人ひとでした。

ベニトも、大おほきになると、お父さんとほの手助けてさすをしなければなりませんでした。

ベニトのやる仕事しごとは鍛冶場かぢばで、鞆ふいごを吹ふくことです。

暑あつい中うちなどに鍛冶場かぢばで、お父さんとほの助手じしゆめをやるといふ事ことは、たいへんな仕事しごとです。  
熱鐵ねつてつから逆さかり出でる恐おそろしい火花ひばな。

子供のベニトが鍛冶場で、火花が飛んできたときに、顔でもそむけたり、瞬きでもし  
ようものなら大變です。

『馬鹿！』

そんな事で一人前になれるかッ』

お父さんの大きなげんこつが、ばん／＼と、頬に飛んで來ます。

しかし、少年ベニトは、口答へ一つしませぬ。じーつと涙を噛みしめて、我慢して  
ゐました。

お父さんは云つてゐました。

『子供が、世間に出て、人に二つ打たれるより、今の中に父の手で一つ殴つておい  
た方が、親のなさけだ』と。

ベニトは、少年時代から、鐵拳で鍛へ上げられました。

それが、何物をも恐れぬ、一代の英雄ムツソリニーをつくりあげたのです。

『人生は険しいものだ、

十分にきたへなければとても、人並みに生きてゆけない。』

お父さんは、また、そういつてゐます。

## 2 不敵な少年

鍛冶屋の子として牛れ、鐵のように頑固な父親に育てられたベニトは、負けぬ氣の一徹な少年となりました。

七つの時の話です。

この村に、新しい、珍らしい機械がきました。

勢よく、ガラ／＼と廻つて、小麥を粉にしてゆく機械を、子供等も、わい／＼云

ひながら見物してゐました。

勿論ムツソリニーも見物に來てゐます。

早くから、一番見よい場所を占領して、いい氣持になつてゐました。  
脚をぶら／＼させながら、おでこの下の大きい眼を輝やかして一生懸命に見てゐ  
す。

『おい！ ベニト、

彼方で、戦ごつこだ！ 行かないか？』

突然、後から聲がしました。見ると、年上の遊び友達です。

『戦ごつこ？』

ベニトは、ひらりと、自分の場所を飛び下りました。すると

『お前なんか、こない／＼場所で見てるなんて、生意氣だ！』

横面を殴りつけておいて、いう／＼と、その子供は、場所を占領してしまつたのです。

まんまと欺された。

殴られたのも口惜しい。

しかし、欺まされたのはもつと口惜しい。その子供は、強そうな腕を組んで、口笛を吹いてゐる。

ベニトは口惜しくたまらぬ。憎らしくてたまらぬ。泣きながら、家へかへつて行きました。

七つのベニトである。

家にゐるのが頑固な鍛冶屋の親爺、

『馬鹿！』

喧嘩して泣いてかへる奴があるか！』

幼いベニトを奴鳴りつけました。

すると、ベニトはぴたりと泣くのを止めた。大きな眼でお父さんの顔をちつと凝めてゐたが、やにはに家を飛び出しました。

元の場所にやつてきたのです。

手にしつかと石塊いしこみを握にぎつてゐる。

『おい！ 下りてこい』

『何だい！ 欺だますんだろ』

にや／＼笑わらひながら、その子供こどもは下りてきた。

『欺だますのはお前まへぢやないか、

卑怯ひけふ者！』

ベニトは年上としうへの子供こどもに組くみついた。

そして手てにもつてゐた石塊いしこみで、相手あひての眉間みけんをつづけざまに、打うつた。

赤い血あかちが、タラ／＼と、子供こどもの眼めの上うへを流ながれた。

年上としうへの子供こどもは、痛いたさに我慢がまんが出来できなくて、泣なき出だした。

それを見ると、ベニトは、安心あんしんしたように、悠然いうぜんと立たち去さつた。

『我々われは弱よわい者もの苛いじめを許ゆるしておいてはならぬ！』

だい  
大ムツソリニーは今でもそう云つてゐます。

かうしたムツソリニーは少し大きくなるともう餓鬼大將になりました。

五つや六つ年上でも、ベニトの一撃にかなふ者はなくなつてしまひました。

この少年ムツソリニー黨は、ある日、一本の林檎の木を發見いたしました。

『おい！』

あれをとつてこい！』

『よしきた』

ベニトの命令に、部下の一少年がするくくと木に登りはじめました。

その時大喝一聲、

『誰か！』

持ち主だ、林檎泥棒に癪癪を起してゐた、持ち主は、いきなり鐵砲を持ち出して、狙ひをつけた。

『あぶない！』

みつかつたぞ！』

その聲と一緒に、亂暴な男もあつたもので、

ガンと一發！

『あつ！』

と、云ふ間に、木の上から子供が落ちてきた。

脚をやられたのだ。

下に待つてゐた子供達は、蜘蛛の子を散らすように、逃げ去つた。

ただ一人、少年ムツソリニーは逃げなかつた。

『どうした？』

えい！ 足か』

ムツソリニーは、素早く、ハンケチをさいて、縋帶をしてやつた。



『どうだい！ まだ痛いかい、

泣くな！ お前は勇士だ！』

少年ムツソリニーは、鐵砲をもつて、まだ怒つてゐる大人の前を悠々と、その子供を背負つて、家にかへつて行つた。

『卑怯！』

それを、彼は極端に嫌つた。

何者をも怖れず、身をもつて友をまもる！  
あまりの豪膽なようすに、大人は啞然として見送つてゐました。

ムツソリニーは、いたづら者でありました。いたるところで、亂暴をいたしました。しかし、あくまでも、正々堂々とやるといふのが、ムツソリニーの、やりかたでした。

卑怯！

と、云ふ事は、命を捨てても、やらぬといふのが彼のやりかたでした。

### 3 故郷を出づ

餓鬼大將で、亂暴者の、少年ムツソリニーは村の嫌はれ者でした。

大人はみんな、彼の敵でした。

でも、彼は、平氣であばれまはつてゐました。

たつた一人、ムツソリニーのお母さんだけは心から、彼を愛してゐました。

お母さんをローザといひました。

優しい、物しづかな、お母さんでした。

ムツソリニーに勉強を教えたのもお母さんでした。

世間の嫌はれ者になつてゐたムツソリニーを、

『この子は、變つてゐる、

『今にえらくなる』

そう思つたのもお母さんでした。

あばれまはる、ムツソリニーの心の中をよりく知つてゐたのもお母さんでした。

ムツソリニーは本當に悪い子供ではないのです。ただ、身體中にみちてゐる元氣と、誰よりも偉らくなりたいと云ふ功名心とが、ムツソリニーを亂暴にしてゐたのです。

お母さんはそれをよりく知つてゐました。だから、亂暴なムツソリニーも、優しいお母さんの前では、靜かにしてゐました。

彼は自叙傳の中に、

『僕が勇氣を示すごとに、僕の身體には、生傷が残つた。僕は、その傷を、お母さんに見せまいとして骨を折つた。

晩のごはんのとき、肱にうけた傷が、見えやしないかと、パンをとるために、手をおぼすにも、ヒヤ／＼した』

と、書いてゐます。

かうしたムツソリニーも、だん／＼大きくなつてくると、せまい村がいやになつてきました。

村の餓鬼大將ぢやつまらなくなつてきました。

何か、もつと、大きな世界がある！ そんな氣がしてなりませんでした。

その頃から、彼は夢中になつて、書物を讀み始めました。

書物は、彼に、いろ／＼な珍らしい事を教えて呉れました。

コルシカ島に生れた、一世の英雄ナポレオン、ボナバルト、世界の王と云つた、アレクサンドル大王、ローマの英雄ケーザル、どれも、これも、少年ムツソリニーの血を湧かしました。

餓鬼大將では駄目だ！

そう考へてきたのです。

お母さんのローザは、このムツソリニーの心をよく知つてゐました。

——この子を、こんな片田舎においてはいけない——  
そう思ひました。

『ベニトは、ただの子供ではありません。』

だから、中學校に入れて下さい』

と、お母さんは、お父さんに頼みました。

『馬鹿！』

あんなところは人間の屑のゆくところだ』  
頑固な鍛冶屋さんは、怒鳴りつけました。

優しいお母さんは、子供の爲にと、幾度も、幾度も、涙を流して頼みました。  
流石のお父さんも、たう／＼我を折つて、

『仕方がない、』

やつてやらう』

と、承知しょうちをしてくれました。

町まちへ行く！

中學校ちゅうがくかうへ行く！

ムツソリニーの心こゝろは躍おどつた。

やるぞ！

何かなにしら出來できる。大おほきい仕事しごとが出來できる！ そんな氣持きもちちがして、ムツソリニーは村中むらぢゅうかけまはつて喜びよろこびました。

そして、もうこの村むらとも別わかれねばならぬと思おもふと、寂さびしくもなりました。  
なつかしい故郷こきやうの山野さんや。

一緒にしよ、いたづらをして歩あるいた友達ともだち、

お母さんかあ、

おとうと いもうと  
弟や妹、

お父さん、

みんなと別れねばならぬ。

ベニト、ムツソリニーは村中をかけまはりました。愈々明日出發と云ふ日には、友達と喧嘩して、なぐりとばした、積りで、柱を、げんこつで力一ぱいぶつつけました。亂暴の仕納めと殴ぐりつけたのが柱だからたまりません。指の關節をいためてしまつて、家を出る時は繃帶をしてゐたといふのだから愉快な少年ではありませんか。お父さんは、自分で、馬車の支度をしました。馭者臺に父が乗つて、ムツソリニーがその側に乗りました。

お母さんは戸口に立つて見送りました。

溢れる涙を、デツとこらへて、病身のお母さんは青ざめた顔で立つてゐました。お母さんは一滴も涙を出しません。

一言も言葉（ことば）を發（は）しません。

ただ黙（だま）つたまま門口（かどぐち）に立（た）つてゐました。

優（やさ）しかつたお母（か）さん。世（よ）の中で一番（いちばん）なつかしいお母（か）さん。身（からだ）體（だ）のお弱（よわ）いお母（か）さん。

今日（けふ）かぎりお別（わか）れしてしまふのだ。

ムツソリニーは「ちら！」とお母（か）さんの方（ほう）を見（み）ました。

お母（か）さんは、かすかに微（ほ）笑（え）みました。

亂（らん）暴（ぼう）なムツソリニーも、思（おも）はず、熱（あつ）い涙（なみだ）が臉（まへ）の底（そこ）から湧（わ）いてきました。

馬（ば）車（しゃ）は走（は）り出（だ）しました。

お母（か）さんは何（い）時（じ）までもたつてゐました。

ムツソリニーはとめどもなく、涙（なみだ）があふれてきました。

後（あと）を振（ふ）りかへて、小（ち）さくなつたお母（か）さんの影（かげ）に、

『お母（か）さん、



ベニトはきつと偉えらくなりますよ』

と、叫まけびました。

#### 4 中學校を放校

ムツソリニの入はいつた學校は、キリスト教けうの教會けうくわいのやつてゐる、宗教學校しうけうがくかうであります。その頃は、この近所きんじよにそれ以外いぐわいの學校がくかうはなかつたのです。

亂暴者らんぼうもののムツソリニの入はいつた學校が、宗教學校しうけうがくかうです。

『學校は牢屋ろうやだ！』

はちきれそうな元氣げんきをもてあまして、ムツソリニはそうつぶやきました。

檻かりに入はいつた虎とらのように、のしつ／＼と校庭かうていを廻まはり歩あるきました。

そして、彼かれは、勉強べんきやうをそつちのけにして、歴史れきしや英雄えいゆうの傳記でんきに讀よみふけりました。古代ローマこだいの歴史れきしを貪むさぼり讀よみました。

『あゝ！ 光榮ある古代ローマの歴史よ！』

彼は絶叫いたしました。

『チベル河の畔り、七つの丘に始つて、遂に、當時の世界を支配した祖先の赫々たる功業は今何處にあるか』

ムツソリニーは古代ローマの昔を思ひ出しては現在のイタリアの姿が物足りなく考へられて來ました。

『大ローマ時代の光榮にかへれ、

大ローマは世界を征服してゐたではないか』

少年ムツソリニーは胸の血を湧かしながら、

『よし！

俺がやる！

俺は古代ローマと新イタリアを結びつける鋼鐵の鎖になつてやらう』

ムツソリニーはそう決心しました。

ローマ、ローマ

彼は教科書にも、ノートにも一ぱいかきつけた。ローマ、ローマ。

ナイフで机にも、椅子にも刻みつけた。

勉強はそつちのけにしてゐたが、ムツソリニーの一生の決心はこゝでしつかりときめられました。

そして、大ローマ帝國の基を開いたケーザルを尊敬して、

『ケーザルの如く國を起して、ケーザルの如く刺されて死なう』

と、心に誓つた。

かうしたムツソリニーであるから、他の坊主くさい生徒と、うまくゆく筈がない。

或る日、遂に喧嘩をしてしまつた。

喧嘩をすれば昔の亂暴者である。

『何を！』

と、云つた時は相手は血を流してたほれてゐた。

彼は直ぐ校長の前に呼びつけられた。

『神の名によつて放校を命じます』

『謹んで、お受けいたします』

彼は、い——と校長室を出て行つた。

彼は、晴れ——とした心になつた。

『村の方がいいや』

そうつぶやいた時、彼は突然足をとめた。

『アッ！ お母さん』

村を思ひ出した時に、お母さんのまぼろしが浮んだ。

故郷を出る時に、門口にシヨンボリと立つてゐたお母さんを思ひ出した。

『ベニトはきつと偉くなりませうよ』

と、誓つた言葉を思ひ出した。

彼の頬には涙が流れてゐた。

『俺はかへらんぞ！』

偉くならん中とはかへらんぞ！』

彼は、その日の中に荷物をまとめると、こんどは次の町に出かけて、翌くる日は、もう師範学校の生徒になつてゐた。

實にアツと云ふ間の出来事です。

ムツソリニーのやりかたの中にはぐずぐずしたことがあります。

物事の機敏なことは電光石火の如くでした。

## 5 ムツソリニー先生

師範學校しはんがくかうに入はいつて三年間ねんかん、ムツソリニーには腹はらがたつても、面白おもしろくなくても、がまんしようけんと決心けつしんいたしました。

『お母さんかみにすまない』

そう思おもふと、何なんでも、がまんできると思おもつたのです。

『一日いちにちでも早はやく、お母さんかみを安心あんしんさせなくてはならん』

そして彼はかれ、

『よし、俺われは人ひとが三年ねんで卒業そつげふするところを二年ねんでやつて見みせるぞ』  
決心けつしんをすると、ムツソリニーは全まったく別人べつじんのようになる。

誰たれとも話はなしをしない、遊あそばない、ただ黙々もくもくとして、猛烈もつれつな勉強べんきやうをつづけて、彼かれは見事みごとに二年ねんで師範學校しはんがくかうを卒業そつげふいたしました。

卒業證書そつげふしよを握にぎると、ムツソリニーは飛とぶように、故郷こきやうへかへつてゆきました。  
なつかしの故郷こきやうへ！

ムツソリニーは卒業間近の時、よくお母さんの夢を見ました。

學校を卒業した。

小學校教員になつた。

十八才のムツソリニーは胸を躍らせて故郷へかへつた。

眞先に迎へたのは、幼い弟や、妹であつた。なつかしいお母さんは優さしい微笑で、

『お歸り、ベニト』

嬉しそくに、大きくなつたムツソリニーをしげ／＼と眺めながら、そう云つただけでした。

それだけで、ムツソリニーは十分でした。

亂暴なくせにお人好しのお父さんは躍り上つてよろこびました。

かうしてムツソリニーは月給二十圓の小學校の先生になりました。

未來の大宰相ムツソリニーも、第一歩の踏み出しは二十圓の月給取りでした。

その二十圓の中から十五圓は下宿代になつてしまつたのです。

おでこの大きい、目玉のギョロツとした先生は、しかし、子供達に一番なつかしまれた先生でした。

ムツソリニー先生は、子供達と一緒に、かけつこをしたり、相撲をとつたり、お話の時は大きな聲でローマの話をよくして呉れました。

子供達は、みんな、ムツソリニー先生が好きになりました。

丁度この頃、この村に、イタリア建國の志士ガルバルズの銅像がたつことになりました。

近郷近在の大騒ぎです。

何しろ、イタリアの神様のよう慕はれてゐるガルバルズ將軍の銅像が建つといふのですから、たいへんなものです。



ところが、いよ／＼その日になつて、一つのコまつたことが出来ました。

それは、この日にガルバルヂの演説をしてくれる約束になつてゐた人が急にこられなくなつてしまつたからです。

『こまつたなー』

『どうしよう?』

と、村人達は相談しました。

『これは町長さんにやつてもらふんだね』

『町長?』

あんな靴屋のおひぼれなんか何が出来るものか』

『うん、いゝことがあるぞ』

『いゝこと?』

『そうだ!』

學校がくかうのムツソリニー先生せんせいに頼たのまう、あの人はガルバルヂ崇拜家かうはいか、きつとうまく話はなすぞ』

『それは、うまいところへ氣附きづいた』

と、十八才さいのムツソリニー先生せんせいに白羽しらばの矢やがたちました。

ムツソリニーは演説えんぜつがたいへんうまいのです。生れつきの雄辯家ゆうべんかです。

胸むねにひびくような力強い言葉ちからつよことばで、熱心ねつしんに話はなしてゆくのですから、聞きいてゐる中うちに誰たれでも夢中むちうになつてしまふ。

そして、ガルバルヂが、イタリー青年せいねんに叫まけびかけたように、愛國あいこくの至誠しせいに燃もえて語かたるムツソリニーの演説えんぜつは、聞きく人ひとの心こゝろに砲彈ほうだんの樣やうにぶつかつてゆきます。

『ガルバルヂの再來さいらい！

萬歲ばんざい！

ムツソリニー！』

拍手はくしゅと喝采かつさいの嵐あらしです。

演説えんぎは大成だいせい功こうでした。

ムツソリニーの人氣にんきは素張すばらしいものです。

ところが、町長ちやうぢやうの靴屋くつやの親爺おやぢさんは苦にがり切きつてゐます。

自分じぶんの領分りやうぶんでも侵をかかされたように考かんがへてゐます。

この事ことがあつてから、町長ちやうぢやうさん、何かと、ムツソリニー先生せんせいにあたちちらしいです。

『先生せんせいともあらうものが除幕式じよまくしきに上着うはぎを抜ぬいで話はなしをするとは何事なにごとだ！』

と、喰くつてかかります。

あまりいろ／＼と、邪魔じゃまをするので、ムツソリニー先生せんせい面倒めんたうくさくなつて、ボンと

辭表じへうをたゞきつけると、さつさと先生せんせいをやめてしまひました。

そして教室けうしつに行いつて、

『甚はなはだ残念ざんねんですが、先生せんせいは今日けふ限かぎり、この學校がくかうを去さらなければなりませぬ』

皆ち一つと、先生の顔を見てゐます。その中に誰かすすり泣きをはじめました。

『最後に！』

先生も涙ぐみました。

『一言だけ！』

そう云つて、黒板に「堅忍不拔」と書きました。

『これをおぼへてゐて、立派な國民になつてゐて呉れ』

子供等は、先生にとりすがつて別れを惜しみました。皆泣いてゐました。

## 6 賢母ローザ

失業したムツソリニーは故郷へ歸れません。失業しましたと歸れば、またお母さんに心配をかけるに定まつてゐる。

『そうだ！』

働はたらかう

それにはスイスがいゝ』

だが、ムツソリニーには旅費りょひがありません。

彼かれはお父とうさんに旅費りょひを送おくつて呉くれるようにと、電報でんぱうをうちました。

その頃ころ、家はどうかであつたのでせう。

ムツソリニーのお父とほさんは、頑固がんこな人であると共に、政治狂せいぢきやうでありました。

選舉せんぎよなど始はじまると、仕事しごとを放はつておいて、演説えんぜつをして歩きます。

ムツソリニーの手紙てがみのつく、前まへの日ひ、お父とほさんは反對黨はんたいたうの選舉せんぎよに防害ぼうがいをあたへたと

いふので警察けいさつに連つれて行ゆかれてしまひました。

後あとに残のこつた病身びやうしんのお母かあさんは、全く途方まづたにくれてしまひました。

夫そとは牢獄ろうごく、

幼なまない子供こどもは二人ふたりもある。

しかも、自分<sup>じぶん</sup>は病身者<sup>びやうしんもの</sup>、

『ベニト、お前<sup>まへ</sup>がゐてくれたらねー』

と、悲し<sup>かな</sup>みに暮<sup>く</sup>れてゐました。

『いつそ、全部<sup>ぜんぶ</sup>でベニトのところへ行<sup>ゆ</sup>かうかしら』

お母<sup>かあ</sup>さんは、その晩<sup>ばん</sup>まんじりともしないで考<sup>かんが</sup>へてゐました。

その長男<sup>ちやうなん</sup>ムツソリニから、

『スπισニユク、リヨヒスグオクレ』

と、電報<sup>でんぱう</sup>が來<sup>き</sup>たのです。

自分<sup>じぶん</sup>達<sup>たち</sup>だつて、くらしが出來<sup>でき</sup>なくなつてゐるではないか、それなのに――

しかし、お母<sup>かあ</sup>さんは、

『出世<sup>しゆつせまへ</sup>前の大切<sup>たいせつ</sup>なからだ』

と、自分<sup>じぶん</sup>の身<sup>み</sup>のまはり品<sup>しな</sup>を賣<sup>う</sup>りのはらつて、二十圓<sup>ふんだま</sup>黙<sup>もく</sup>つて送り<sup>おく</sup>ました。

血の出る様な苦しい二十圓だつた。

杖とも柱とも頼むムツソリニーが遠く、スミスに行つてしまふ。

先生をやめて、スミスに行くからには、何か事件があつたに違ひない。

しかし、ベニトは、必ず運命を切り開いて立派に成功するに違ひない。

子供の爲には、どんな苦しい事でも忍ぶのが、親としての務めだ。

弱々しいお母さんの心の中には、尊い力がありました。

家の事は何にも知らせないで、お母さんは二十圓の金を送つたのです。

そして、

『神様！ どうぞ

ベニトをお助け下さいまし！』

と、獨り、神に祈つてゐました。

勿論ムツソリニーはそんな事を知る筈がありません。

町長さんちやうくの靴屋くつやの親爺おやぢと喧嘩けんくわをすると、生徒達せいとたちに見送みおくられてスミス行ゆきの汽車きしやに乗のつてしまひました。

『田舎ゐなかぢや駄目だめだ！』

廣ひろい天地てんちが俺われを待まつてゐる』

失業青年しつげふせいねんムツソリニーは、遙はるか遠とほい自分じぶんの未來みらいを想像さうざうしながら、汽車きしやに乘のりました。

『お母さんかみ！』

ペニトはきつと偉えらくなります』

と、口くちの底そこで強つよく云いひました。

國境こくきやう近くの驛えきで、最後さいごのイタリヤ新聞しんぶんを買かひました。

スミス行ゆきの汽車きしやに乘のりかへるために下車げしやしたからです。

買かつた新聞しんぶんを何心なにげなく開ひらいて、

「あ！』



ムツソリニーは思はず、聲を出しました。

お父さん捕縛の記事が出てゐたのです。

『お父さんが牢獄に！』

はじめて、家の事情を知つたのです。

いまごろは、幼い妹や弟は、病にやつれたお母さんの膝にもたれて、自分の事

を考へてゐるのではなからうか。

お母さんは途方にくれてゐるのではなからうか、

もう、景氣のいいお父さんの鐵槌の音も聞こえない。

淋しいだらうな、今晚あたりは……

何を考へてゐるだらうか、

せめて、俺でもゐてやれば、

あゝ、そうだ、

歸らう！

歸らう！

山間の停車場に、新聞を握つて、ムツソリニーは、考へ込んでゐました。

しかし！

何故お母さんは、黙つて金を送つてくれたのであらう。

さうだ！

心配せずに、新しい運命を拓け、

そう、心に念じてゐられるのだ、

すまない！

このお母さんの心を無にしては………かへりたい。

かへつて、お母さんをなぐさめたい。

しかし、それは本當に親孝行になるだらうか？

いや！ 違ふ

俺は偉らくならなければならぬ。

ムツソリニーの心が、いろ／＼と亂れてゐる時に、スミス行きの列車が入つて來た。  
發車のベルがなつた。

『行かう！』

彼は、スミス行きの汽車に飛びこみました。

『お母さん

すみません

ベニトは、今に、きつと、偉らくなつてかへります』

## 7 どん底生活

牢獄につながれたお父さん！

幼い二人の子供をかかえた病身のお母さん。腸がちぎれるようなムツソリニーは國境を越えて、スキスに入つて行つたが、果たして、スキスにムツソリニーの幸福が待つてゐたでせうか、

見ず、知らずの外國に、たつた一人入りこんで、どうなるといふのであらうか。木賃宿に陣どつて、ムツソリニーは、職を探がさなくてはならぬ。

働かなければ食へぬ。

食はなければ、何も出来ぬ。

世界の大ムツソリニーと云はれる彼も、スキスに入つて、シヨボ／＼と職業を探し歩いたこともあつたのです。

探しあてた仕事、

手押車に石を載せて、建築中の二階に搬ぶといふ、労働者になりました。

大望を抱いて、

血の出るようなお母さんの金を旅費で、スミスに來たムツソリニは一介の勞働者になりさがつてしまいました。

教員上りの十八歳の勞働者である。なれない身體で、よた／＼と、その單純な運搬を

百二十一往復した時には、神經がなくなつてしまつたように疲れてしまいました。

その晩は、焼いた馬鈴薯を晩食にして、藁の寢床の上に眠りました。

翌朝になつて見ると、全身が疲れきつてしまつて、起き上げられない程でした。それでも仕事に出かけなければなりません。

流石不敵のムツソリニも、この激しい勞働には一週間でまいつてしまいました。

重い足を曳つて、親方の前に立ち、

『親方、もう止めます、

賃銀を計算して下さい』

『何だ、もう止める？』

どうして止すんだ』

『身體がつづきません』

『身體がつづかない？』

馬鹿！ だから、苦しいぞと云つたぢやないか』

ムツソリニーは黙つて、その顔を見上げてゐます。

『何を黙つて、人の顔ばかり、睨みつけてゐるんだ』

『賃銀を計算して下さい』

『賃銀？』

この泥棒奴！』

親方はいきなり、ポケットから、一握りの銀貨をつかみ出すと、机の上に抛りつけた。

ムツソリニーは、あまりの口惜しみに、ムラ／＼として來たが、昨日から食べない空腹と疲勞でたほれそうである。

着物も、靴もぼろ／＼である、

彼は黙つて、抛り出された銀貨を拾ひあつめて、出てゆきました。

それからロザンヌの町に行きましたが、こゝでも、彼は幸福になれませんでした。

彼はそれから、方々に自分と同じようなイタリー人がごろ／＼してゐるのをみつけ

ました。

ムツソリニーも無一文の放浪者になつてしまひました。

朝から何にもたべてゐません。公園のベンチに腰掛けて、見てゐると、立派な様子をして歩くのは大抵イタリー人ではありません。

別の連中は、

『錢を下さい』

と、すぐ寄つて行くのであるが、

ムツソリニーは決して乞食をしなかつた。

共同便所きょうどうべんじょの中に寝ねたり、古い船ふねの中で夜よを明あかしたり、橋はしの下したに宿やどをとつたりしたこともありました。

しかし、ムツソリニーは、このどん底生活どんせいかくの中で、何なにを感じかんじ、何なにを考かんがへてゐたことであらう。

『どうして、イタリー人じんは、外國人ぐわいこくじんに馬鹿ばかにされるのだらう』

と、云いふことと、

イタリー人じんは金かねにきたない。

イタリー人じんは怠なまけ者ものだ。

イタリー人じんは勇氣ゆうきがない』

と、いふ、イタリー人じんの缺點けつてんを知しりました。

『そうだ！』

俺われはこのイタリーを、根底こんていから救すくはねばならぬ』



と、決心けつしんしたのです。

昔むかしのローマのように立派りっぱな國くにをつくり上げなければならぬと考かんがへたのです。

えらい人は、どんな境遇きんぐうにあつても、普通ふつうの人ひととは違ちがつた考かんがをもつてゐます。

無む一文もんになつて、橋はしの下したに寝ねてゐたムツソリニーは、ローマを救すくふものは自分じぶんであると考かんがへてゐたのです。

しかし、これからもまだ――彼かれの苦くるしい生活せいかくはつづきます。

天將てんまさに大命たいめいを下くださんとするや、その身心しんしんを苦くるしめる

と、昔むかしから云いつてゐます。

どんな乞食こじきよりも、どんな貧乏びんぱうよりも、もつと苦くるしい生活せいかくをやつてきたのが、ムツソリニーです。

現在げんざいのムツソリニーに、何者なにものをも恐れぬ力ちからと何者なにものをも打ち碎くだく強い力ちからのあるのは、かうしたどん底生活時代どんせいかくわつじだいに鍛きたえられた力ちからです。

これからいろいろな労働をいたしました。その中でも、ムツソリニーは左官屋の腕前は一人前になりました。

冬になつて、建物の仕事がなくなると、酒屋の樽拾ひにもなるのです。

左官屋さんになつたり、樽拾ひをしてゐる間に、だん／＼と、生活も楽になり、夜は大學の夜學に通つて勉強してゐました。

その中にムツソリニーの名前は、若い青年の間に評判になつてきました。

その頃から、また／＼昔の亂暴と、負けし魂が首をもたげて、こんどは餓鬼大將ではなく、青年達の間の一方の大將となり、喧嘩はする、演説はやる、社會主義者の仲間入りはすると云つた工合で、牢獄にはぶちこまれる、國外に追放されるといふ、流浪生活がつづけられます。

スピスを追はれて、ドイツへ、ドイツからフランス、オーストリア、と、どここの牢獄にも打ちこまれ、どこの國からも追はれつづきでありました。

そうした中にも、ムツソリニーの名は、擴つてゆきました。

傑い若者だ！ 今に何かするに違ひない！ そう云つて、青年達から尊敬されてゐ

ました。

列國から追放されて、彼がイタリーに歸つて來た時には、多くの青年達が、彼を停車場に迎えてゐました。

## 8 母の死

偉い人になります。

そう云つて、故郷を出たムツソリニーは、どん底生活と、牢獄生活の旅をつづけてゐます。

その間に丈夫な身體と、強い心を養つて、歸つて來ましたが、相變らずの無一文でした。

苦勞くらうしつづけのお母かあさんに、何なに一つ報はぐゆることなく、こんどは兵役へいえきの義務ぎむを果はたす  
爲ために狙撃兵そげきへいだい第十一聯隊れんたいに入營にふえいいたしました。

鍛冶場かぢばから小學校せうがくかう教員けういんへ

教員けういんから流浪るちうへ

流浪るちうから軍隊生活ぐんたいせいくわつへ。

運命うんめいの神様かみさまは、次々つぎ／＼にムツソリニーを曳ひきづり廻まはします。

その間あひだやさしいお母かあさんは、病身びやうしんのからだで、おつと、子供こどもの成功せいこうを待つてゐまし  
た。

たとへ、どんな生活せいくわつに陥おちいつても、お母かあさんはムツソリニーを信しんじてゐました。

ムツソリニーの志こゝろざしは大きかつたのです。

大きな志こゝろざしはなか／＼達たつしられるものではありません。

『ムツソリニー二等兵とうへい！』

一寸こい』

『ハッ』

中隊長の緊張した顔でした。

中隊長は一枚の電報を渡しました。

ムツソリニーの顔色は土のように蒼白となつた。

『ハハキトク』

彼は歸休を乞うて、停車場へかけつけた。とるものもとりあへず、家にかけてつけた。

『お母さん！』

お母さん！

ベニトです』

室に入るや、いなや、母の手を握つて叫んだ。

だが、母は答へませんでした。

微かにうなづいたようであつたが、一言も言はないで、息をひきとつてしまひました。ムツソリニーは聲をあげて泣きました。

橋の下で寝てゐたときも、

牢獄にゐたときも、

一日も忘れたことのなかつた

お母さん！

そのお母さんが死んでしまつたのだ、

この世でたつた一人の味方であつたお母さん、

思へば氣の毒なお母さんでした。

ムツソリニーの出世は信じてはゐたが、

餓鬼大將

浮浪人

ふりやうせいねん  
不良青年

にふくしゃ  
入獄者

と、<sup>みぢめこども</sup>惨な子供だけしか知らないで、<sup>し</sup>死んで行つたお母さん！

イタリーの<sup>だいさいしやう</sup>大宰相となつた姿を一目見たらどんなに喜んだであらうに、<sup>びやうしん</sup>病身なお母

さんはそれまで<sup>いのち</sup>生命を保つことが出来ませんでした。

ムツソリニーはどんなに<sup>かな</sup>悲しく、<sup>ざんげん</sup>残念であつた事<sup>こと</sup>でせう。

それからのムツソリニーは人間<sup>にんげん</sup>が變つたようでした。

<sup>くる</sup>晝の中はお父さん<sup>とほ</sup>を助け、夜は靜かに<sup>どくしよ</sup>讀書してゐました。

<sup>がきたいしやうじだい</sup>餓鬼大將時代も、<sup>ふらうじだい</sup>浮浪時代も忘れてしまつたように、<sup>どくしよ</sup>讀書を靜かに、つづけまし

た。

<sup>あひだ</sup>この間にムツソリニーの<sup>かんかへ</sup>考は深まつて行つたのです。

<sup>みち</sup>道を歩く時<sup>とき</sup>でも、二宮金次郎<sup>みやぎんじらう</sup>のように本<sup>ほん</sup>を讀んでゐました。

深い谷川の上になると、本をとちて、ちーつと考へこんでゐました。  
その間に中學校教員の免許狀もとりました。

## 9 ムツソリニータンク

浮浪生活によつて、ムツソリニータンは、あらゆる苦難に打ち勝つ、身心を鍛錬いたしました。

列國を流浪して、彼はイタリア人が、外國人に、どんなにか、馬鹿にされてゐるかを見ました。

イタリア人の、怠け心、だらしなさ、をも知りました。

しかし、イタリアはかつての歐洲の支配者であつたではないか。

かつての、イタリア人は、勇猛果敢、勤勉力行の、人民であつたではないか。

このままでは、イタリアは先祖に申し譯ない。



このままでは、イタリアは滅びるより別に仕方がない。

無一文のムツソリニの心には、烈々たる、愛國心が湧いて來ました。

イタリア人の心をたたきなほさなくてはならぬ！

イタリア國を大ローマ帝國の昔にかへさなくてはならぬ！

『そうだ！』

俺はケーザルのように戦つて、ケーザルのように刺されて死のう！』

かくすればかくなるものと知りながら

やむにやまれぬ大和魂

日本の志士吉田松陰は、かう詠つてゐます。一生を國家に捧げた吉田松陰は、遂に幕府のために小塚原で、首を斬られました。

親思ふ心にまさる親心

今日のおとづれ何ときくらん

ムツソリニ一の心は、日本人によく似てゐます。浮浪生活、牢獄生活の中で恐らく  
ムツソリニ一は、やさしお母さんローザを思ひ出して、

親思ふ心にまさる親心

今日のおとづれ何ときくらん

と云ふ氣持ちになつてゐたでせう。

しかし、ムツソリニ一の中に流れてゐる、愛國の血潮の中には、

やむにやまれぬ大和魂

に似た、力がふくまれてゐたのです。

なつかしいお母さん

不幸なお母さん

何一つ樂しませる事なく、死なしてしまつた、お母さんの事を思つて、大ムツソリニ  
一の心は暗くなりました。

毎日、お母さんのお墓に来ては、ながいこと、涙を流してゐたムツソリニーの姿を  
村人達はよく見かけました。

しかし、お墓に詣るたびにムツソリニーは

『ベニト！』

勇氣をお出し

お前は必ず偉らくなるんだよ』

と、お母さんが云つてゐるように思へました。

『そうだ！』

女なら、なげき、かなしんでゐるのもよからう。

だが！ 男は勇氣を出して世の中のために闘はなければならぬ。

社會のために働き、わが家、わが國の名をあげんために、なげき、かなしんでゐてはならぬ』

ムツソリニーは奮ふるひたちました。

これから、ムツソリニーは、タンクの如ごとくに勇敢ゆうかんに、はげしく、活動くわつどうを開始かいしいたします。

第一だい、イタリー人じんの心こころを根本こんぽんから、たたきなほさなくてはならぬ。

彼かれはどんな人ひとの集あつまりの中にでも、どしどし出掛でかけて行いつた。そして火ひの出でるような熱辯ねつべんをふるつて、彼等かれらの心こころをふるひたたせました。

彼かれはあらゆる雑誌ざっし、新聞しんぶんに書かきたてた。しまひには自分じぶんで新聞しんぶんを出だして、猛烈もうれつに書かきたてました。

その新聞しんぶんは、弱よわり、かなしんでゐる者ものに元氣げんきをあたへるように書かき、悪い政治せいぢが行おこなはれれば、遠慮會釋えんりょあしやくなくビシ／＼とやつつけました。

愛國あいこくの至誠しせいが迷ほとばしるところ、聞きく者ものをして、感激かんげきせしめずにはおかぬ。

役人達やくにんたちは彼かれを邪魔者じゃまもの扱あつかひにした。

かれは牢獄ろうごくにつながれてしまふかも知れない。そんな、噂うはさがたちました。友達ともだちは心配しんぱいしてムツソリニーの下宿げしゆくにやつてきました。

扉ドアを開ひらいて友人達いうじんたちは、思おもはず、

『呀あッ』

と、云いひました。

もう、ムツソリニーを捕縛ほげするために警官けいぐわんが來きてゐるではないか。

鋼鐵かうてつタンク、ムツソリニーは、その前まへで悠々いっくと、新聞しんぶんを讀よんでゐます。

『君きみ！』

ムツソリニー君くん！』

友達ともだちは思おもはず叫さけびました。

『あゝ一寸待ちよつとまつて呉くれ給たまへ

この記事きじを讀よんでしまふから』

落ちつきはらつて、新聞を讀んでしまふと、友達と、氣輕な調子で話をすまし、警官の方をむいて、

『お待ちどうさま』

と、兩手をさしのべました。

牢獄に行けば、牢獄で、法廷に出れば法廷で、彼は熱辯をふるひました。

皆、愛するイタリー人だ。

みんなの心を、たたき直さなければならぬ。これが、ムツソリニーの考でした。彼は法廷で叫びました。

『無罪の宣告は、我輩にとつて喜であるが、有罪の宣告は、我輩の名譽である。

それによつて我輩は、始めて、罪人にあらずして、理想の主張者であり、良心をもてる者であり、正しきことのために闘ふ勇士であることが、いよくはつきりするからである』

## 10 世界大戦

一介の青年、ムツソリニーが如何程に叫んでも、ゆるみきつた全イタリア人の心を、たゞき直すのは容易な事でありませんでした。

そこに忍びこんで來たのが社會主義です。ます／＼イタリアは、目茶苦茶になつてゆきます。

イタリアの政府には、深く國家の事を心配するような立派な人は一人もゐません。そうした時に、突如世界大戦が起りました。イタリア人は魂が飛ぶ程に驚きました。

隣國のドイツ、オーストリアが戦争をはじめたのです。

イギリス、フランス等が相手です。

そうした國々は、あらかじめ戦争の起ることを心配して、充分に準備をしておきま

した。

イタリーの政治家には、廣く世界の事を考へるような者がなかつた爲に、何にも用意がしてありません。

しかも、イタリーは、ドイツや、オーストリアと同盟を結んである國です。

その隣國の同盟國が戦争を始めたのですから、丁度隣から火事が始つたようなものです。

放つておく譯にはゆきませんが、戦争をしたくも準備がありません。戦争が出来ませんから中立するより他に方法はないのです。

中立したか國境で戦争があるのですから、何時、侵入されるかわかりません。

そこでムツソリニーは新聞を發行して、軍備を整へる事を主張しました。

その中に戦争は、全歐洲に擴がり、遂に世界戦争になりました。

この大戦争は世界の様子を一變させようとしてゐます。





オチンダと相首 - ニリソツム

戦争に勝つた者が、次の世界に強國となれる勢になりました。

戦はなければ、列國から蹴落されてしまふ。

イタリー人は勇敢であつた筈である。

イタリー人は世界を支配した勇猛な民族であつた。

ゲルマン民族は、ライン河を渡つて、ラテン民族の文明をふみにじつてゐるのではないか。

起て！ 全イタリー人

國家の名譽の爲に、イタリー民族の發

展てんのために

全ぜんイタリー人じんよ。

銃じゅうをとつて起たち上あれ。

と、叫さけんだのが、愛國詩人あいこくしじん、ダヌンチオと、ムツソリニーであつた。

ムツソリニーは全ぜんイタリーにむかつて叫さけんだ。

『諸君しよくん！

行動かうどうしなければならぬのだ。

動うごかなければならぬのだ。

戦たたかはなければならぬのだ。

そして、必要ひつようとあれば死しななければならぬのだ。

見みよ、中立ちゅうりつを守まもつて、かつて事件じけんの決定權けつていけんを握にぎつたものはなかつたのだ。

彼等かれらは必ず没かならずし去はなつた。

諸君！

歴史の車輪を動かすものは、血である！』

この叫びは、雷の如く、全イタリア人の愛國心に響いて行つた。

ムツソリニーは毎日、自分の新聞、イタリア國民新聞に、熱烈な戦争論を書きつけた。一方、同志を集めて愛國ファツショと名づけた。この同志達は全國に散つて、救國戦争を訴へた。

『ドイツ軍はすでにライン河を渡つた。』

歐洲の文明は再び、この北方蠻族の爲に脅かされつつある。

嗚呼！我等地中海民族よ！

光彩あり、文雅なる民族の手本たる、我等意大利人よ！

偉大なる文化と事業を産み出したイタリアの同胞よ！

最後の戦にむかつて足を投ぜよ！』

『諸君！』

やがて戦争が終つて、フランスや、ベルギー人が、我々がカイセルの野心より歐洲を救ひ出し、ドイツ、オーストリアの軍隊と、必死に戦つてゐたとき、イタリア人は何をしてゐたんだと訊ねられた時に、何と答へるつもりなのか、その時、諸君は、イタリア人たる事を恥ぢるであらう。だからその時は手遅れだ』

ムツソリニーは獅子奮迅の勢であつた。

『今日、歴史は塹壕の中でつくられてゐる。天をつく意氣は、イタリア全土を動かし始めた』

イタリアの愛國青年の血は湧きたつた。かくして、イタリアは、遂にドイツ、オーストリアに對して宣戦を布告いたしました。

イタリアはムツソリニーの熱によつて動きはじめたのです。

戦線へ！ 戦線へ！

イタリー軍は、堂々と出陣してゆきます。

## 11 陸軍々曹ベニト・ムツソリニー

ムツソリニーの意氣は遂に全イタリーを動かした。

宣戦は布告された。

彼は直ちに國民にむかつて叫んだ。

『今日、武器を執れの命令が、國民に響き渡つた。

もはや、我々舉國一致、祖國イタリーの爲に戦へばいゝのだ。

我々の胸より迸り出づる唯一の叫びはただ伊太利萬歲！ これあるのみ。

あゝ！ 母國イタリーよ。

我々は、おそれなく、くひなく、我等の生と死を、御身に捧げる』

かうして、イタリー全土に愛國の歌は響きわたり、祖國の旗は、ひらめきわたりまし

た。

我がムツソリニーも、第十一狙撃兵聯隊の豫備兵として召集令が下りました。

イタリー全土を愛國の情熱にわきたたせた熱血の志士、イタリー國民新聞社長ムツソリニーも一兵卒として戰陣に出かけました。

祖國イタリーの爲に銃をとつて進む幸福をしみくと味ひながら、戰線に出兵いたしました。

彼の最も尊敬する、ユリウス、ケーザルは百萬の將として、遠征をしたのですが、ムツソリニーは一兵卒として、しかもケーザルに劣らぬ意氣を持つて第一線に立ちました。

從軍して、間もなく、突然聯隊司令部から呼ばれました。

ムツソリニー一等兵は、背囊を背負つて、銃を肩に、司令部に行つて見ると、參謀中佐が親しそくに手をさしのべて、

『今日は命令ではない。イタリアー國民新聞社長としてのムツソリニー氏に相談するのです。』

貴下の生命を、絶えざる危険にさらしおくのは、あまりに勿體ないと思ふ。就いては後方勤務にかへつて、我が聯隊史の編纂に従事して下さらんか』

すると、ムツソリニーは、起立のまゝ、凜として答へました。

『私は戦ふ爲に來たのです。私は書かんがために來たではありません』

かうして彼は、第一線の塹壕に歸つて行きました。

戦場の様子を、ムツソリニーの塹壕日誌により、うかがつて見ませう。

『十時、榴散彈が頭上に唸つた。』

五分後、第二の榴散彈が、物凄い音をたてゝ、我等の前方三米、中隊長から一米のところ、破裂した。

私は立つてゐた。

さつと風がたつて、つづいて碎かれた石の嵐が來た。

私は塹壕を出た、誰か側で唸つてゐるけたゝましく呼ぶ聲

「擔架！ 擔架！」

兵が二人、塹壕の中で重傷を負つてゐるらしい。

大きい岩が文字通り、血潮にちぬられてゐる』

ムツソリニーは幾度か、危険なる激戦に參加して、幾度か負傷して、傷が癒ると、又

第一線に立つた、その感狀に、

「ソノ儀表タルベキ活動、ソノ果敢ナル勇氣ト沈着、如何ナル激務ニモ堪へ、大膽ニ

シテ、ソノ任務ヲ行フニ際シテハ、不快ナルヲ厭ハズ、熱心、勤勉ナリ」

かうして、一兵卒だつたムツソリニーは、次第に昇級して軍曹となりました。

ムツソリニーの部隊は、最も勇敢でした

敵前二十二米の對陣を一ヶ月もつづけました。



そして、カルソの大砲戦が行はれた時、ムツソリニー軍曹は全身に四十二ヶ所の大重傷を負つて、後方に送られました。

しかし、あくまでの勝氣なムツソリニーは、その大重傷にも、不思議に生命をとりとめるのでありました。

## 12 銃後 ゆらぐ

ムツソリニーによつて點火された全イタリアは、愛國の至情に燃え上がりました。舉國一致！生活物資は次第に不足し、パンも砂糖も、十分に得られなくなりました。だが、イタリア人はよく忍びました。

戦争は第一線に戦ふ軍隊と、銃後の國民が一つにならなければ、決して勝つものではありません。

全イタリアの指導者ムツソリニーも第一線で戦つてゐます。

だが――

ムツソリニーを第一線に送つて、戦がながびいて來た時、恐しいことには、イタリア銃後の守りが、だん／＼とゆるんできたのです。

戦争に勝つて、イタリアが、平和會議の時に、フランスやイギリスに見くびられて何等得る事がなく、戦ひ損をしたと云ふのは、銃後がゆるんでゐたからです。

古代ローマ人は、如何なる長期戦にも、如何なる苦難にも、よく忍んで、最後の勝利を占めたのですが、護國の神様、ムツソリニーが戦地に行つてしまふと、次第にイタリア人の心がゆるんでまいりました。

それは社會主義者や、共產主義者が、入りこんで、銃後を亂したのです。

私達は、これからのイタリアの話をきくと共に、十分に私達の銃後の心を緊めてからなければならぬと思ひます。

その頃、ロシヤの共產主義者は革命を起して、戦争をやめました。

ロシアの共産主義者は、その勢で、世界を赤化してしまおうと、全國に陰謀の手を伸ばしました。

イタリアにもぞく／＼赤化の手が伸びてきました。

『イタリアもロシアの云ふ通りにやれば、戦争を中止して、しかも、國民は平和になれる。』

國民はたつた一日に二時間働いただけでいくらでも贅澤が出来るぞ』  
共産主義は、イタリア人の心をだらけさせ、イタリア人から愛國の心を奪つてしまふとしきりと、活躍をはじめました。

あぶないことです。

ムツソリーニは負傷して、野戦病院に人事不省に陥つてゐます。

イタリア人は次第に、共産主義にかぶれて戦争を嫌ふようになりました。  
戦争に反対するようになりました。

銃後のゆるみは、直ちに戦線にもひびきます。銃後の人達は注意すべきです。どんなうまいことを云つて來ても、どんな誘惑がきても負けてはならないのです。心を許してはならないのです。

イタリー國民はそれを忘れました。

イタリーの銃後は亂れて來ました。

それがどんな恐ろしい結果を生んだ事でせう。武勇にきこえたイタリー軍が、ゆるんできたことは、ドイツ側にも直ちに判明いたしました。

一九一七年十月二十三日、ドイツ、オーストリア軍はイタリー軍のゐるカボレットに向つて猛烈なる總攻撃を開始いたしました。

イタリー軍は、無残にも總崩れに崩れました。

イタリー軍のゆるんでゐた結果です。

捕虜になつたものが三十萬もゐたのです。大砲が二萬五千も捕獲されてしまひまし

た。その他、ふんどられたものは數へきれない程です。

ドイツ軍はどつと北イタリーに攻め込んで來ました。

イタリーの都市と工場と農地は、悉く敵軍に蹂躪されてしまいました。

恐るべき事は、國民のゆるみです。

### 13 ムツソリニー獅子吼

名譽の戦傷をして病院に横はつてゐるムツソリニーは次第に回復して來ました。回復したムツソリニーの耳にきこえて來たことは一體何であつたでせう。

イタリー軍は勇敢である。

イタリー國民は愛國の至誠に燃えてゐる。

そう信じてゐた、ムツソリニーのところへどんな報告がもたらされたことでせう。銃後はゆるんだ。

共産主義が入りこんだ。

そして、カボレットで、イタリー軍は大敗した。



ムツソリニー - 獅子吼

ムツソリニーは憤激した。

憤激のあまり、七日七夜は一睡もしな

かつた。友達は憤死しやしないかと、心

配してモルヒネ注射をした程であつた。

重傷が何だ、祖国があぶない。寝てゐ

る譯にはゆかぬ。

病床からムツソリニーは再び、全イ

タリーに向つて獅子吼いたしました。

『舉國一致が崩れたら、幾千萬の大砲

も何になるか！

幾百萬の勇士が祖國のために尊い血を流してゐるのだ。

この犠牲を空無にしてはならない。

得手、勝手な理屈は反逆である』

『親愛なる國民諸君！

希望に燃えよ！

石炭は十分か、パンはなくなりやしないか、薪はどうか！

昨日までは、そんな小うるさい問題にかゝりあつてゐた。

今日、國民の間ふところはおうだ。

鐵は、彈藥は、銃劍は十分にあるか！

我等は、寒氣も、飢えも堪へることが出来る。そんな事は問題ではない！  
侵略は、寒氣や、飢よりも、遙かに悪い事だ！

それは恥である！

我等は勝たねばならぬ！

そして、我等はきつと勝つんだ！』

『今日は一大決心の秋である！

共産主義や、社會主義を蹴とばせ！

自由とか、わがまゝとかを、葬つてしまへ！

われ等の行く道は二つしかないのだ。

明日の勝利をうるために、一致團結するか？

或は、勝手な熱をふいて、滅亡するか！』

未だ、全快せぬ、ムツソリニーは、一大國民運動の中に飛込んだ。矢繼早に大會を開いて國民を鼓舞した。

『イタリー國民よ！

一致團結せよ！



今ぞ戦ふべき秋である。

抵抗し、攻撃し、そして捷つべき秋である！』

イタリア全土に、再び新しい元氣が湧いて來ました。

國民は再びふるひたちました。

苦しい生活の底から、ぞく／＼と獻金されて來ました。

心をこめた慰問袋が戦線に送られて、勇士の心を感激させました。

軍備も整ひました。士氣さかん。イタリア國王から、ありがたい勅語が下りました。

かくて、カボレット敗戦の日より一年目、一九一八年十月二十四日全攻撃令が、イ

タリ全軍に下りました。

打つて、一丸になつた力は強い。

あゝ！ イタリア國民の永遠に忘れ難き日は遂に來た。

ヴェトリリオ、ヴェネトの大捷！

オーストリア軍七十三軍團を全滅せしめた。



獅子吼 — ニ リ ソ ツ ム

遂にオーストリアは白旗を掲げて、降伏した。

イタリアの頭上には燦然として、勝利の榮光が輝いたのである。

強いのは團結の力である。堅忍、舉國一致の力である。持久、舉國一致の力は何物をも、成功せしむる力である。

る。  
長期抗戦下の我々が、深く心をとめなければならぬことであります。

一度は大敗したイタリアも、遂に舉國一致の力で大勝利を得たのです。  
ムッソリーニは感激に堪えずして、

『偉大なる時はつひに來た。』

この聖なるよろこびの瞬間に於いて、交々至る萬感は心臓の鼓動を止め、肺臓は咽喉まで飛上るのを覺へる。

我等の永かりし受難の日は、つひに勝利の榮冠をいただいた。悲涙につかれたる臉には喜びの涙が光る。

アルプス山よりシシリ島に至るまで、街より街に、大なる叫びを響かさん。  
イタリアー萬歲！』

## 14 イタリアの苦杯

世界大戦争は聯合國側の勝利で幕を閉じました。

頑強な敵軍に最後の一撃をあたへたのは、イタリアでした。

そして、イタリアは六十萬の尊い生命を犠牲にし、百萬の戦傷者と、二十二萬の不具者を出しました。

この尊い犠牲に對して、イタリアにいつたい何が酬ひられたのでせうか。

パリーの平和會議に於いて、イタリアは何を得たのでせう。

ドイツ植民地の大部分は、好むがまゝに、イギリス、フランスが、併合してしまつた。

イタリア人の住むフューメもイタリアのものにならなかつた。

増殖する國民のために土地を求めてゐたイタリアは、一寸の土地も與へられなかつた。

『噫！ イタリアは何のために戦つたのか、何のために、寒さをしのぎ、飢をしのいで四年も戦つたのか』

齒をくひしばつて憤りました。

一體何故イタリーはかうした憂目を見なければならなかつたのでせう。

舉國一致！ イタリーは敵軍を粉碎いたしました。この強い力がバリーの平和會議までにつづけられてゐればよかつたのです。

ところが、平和會議で、いよ／＼領地の分配をやる頃は、イタリーの國內には再びごた／＼が起り、社會主義や、共產主義が、はびこり、人民の心はぐらついてゐたのです。

そこで、イギリスや、フランスなどに、

『もう、イタリーは駄目だ、

意久地のない國になつてしまつた。

領地など、一寸もやらなくなつて、人の心がゆるんでゐるのだから、おこること  
も出来やしない。』

と、馬鹿ばかにされてしまつたのです。

領地りやうちの分配ぶんぱいも一つの戦争せんそうです。

弱よわければ、領地りやうちは一寸ちよつとだつてとれません。戦争せんそうの中うちだけ、強いつよのでは不十分ふぶんです。

戦争せんそうが終はつて、平和へいわになつた時とき、更に一層そうつよ強つよくなければなりません。

かつて、日清戦争にっしんせんそうの時とき、日本にっぽんは遼東半島れうとうはんとうを支那しなから譲りうけました。ところが戦争せんそうで日本にっぽんが弱よわつたと見るや、忽たちまち、ドイツやフランスやロシアがやつて來きて、無理矢理むりやりに、遼東半島れうとうはんとうを、とりかへして、しまつた事ことがあります。

したがつて、戦争せんそう中は勿論もちろん強つよくなければなりません、戦後せんごは更に強つよくなければなりません。

イタリーが平和會議へいわくわいぎで、ひどい目めにあつたのも、イタリー人じんの心こゝろがゆるんだからです。

戦争せんそうが終はつて、ほつ！ とした時とき、その時ときから人間にんげんの心こゝろがゆるんできます。

急にきふになまけ心こころが湧わきます。贅澤ぜいたくがしたくなります。

だが、四年ねんも戦争せんそうしてゐた後あとですから、品物しなもののが十分ぶんにありません。品物しなもののが十分ぶんでありませんから、物價ぶつがが高いたかいのです。貨銀ちんぎんは上りません。人民じんみんは不満ふまんと不平ふへいをもつようになりました。

そこへ、共產主義きやうさんしゆぎのロシアから、

『今いまだ！ 人の心ひとこころがゆるんだのにつけこんでイタリアを赤化せきくわさせよ

イタリアをかきみだせ。』

と、指令しれいが來たきのです。イタリアの共產主義者きやうさんしゆぎしやは、その手てにのつて、祖國そこくを崩壞ほうかいしてしまふと、恐ろしい國賊的活動こくがくてきくわつどうをはじめたのです。

『諸君しよくん！

諸君しよくんがロシアの云いふ通りとほになれば、地上ちじやうに天國てんこくをつくることでが出來きるのだ。

ロシアは一日二時間いちにじかんしか働はたらかなくて、しかも、幸福かうふくに暮くらしてゐるのだ。』

更に赤化の指令が來ました。

『イタリアを赤化するために、國內を亂さなくてはならぬ。

國內を亂すために、ストライキを起らせよ。』

そこで、共產主義者がイタリア人に云ひました。

『諸君！

諸君の賃銀は安すぎる。

賃銀を上げて呉れなければ、仕事を休んでストライキを起せ。』

一度ゆるんできた、イタリア人は何一つ國家のためを考へることが出来なくなつてゐました。

イタリア國中にストライキが起りました。

工場といふ工場は皆休業です。

電車も、自動車も動きません。



そして、労働者は喜んで歌をうたつてゐます。

ただでさへ、苦しい、イタリアです。かうして、各工場が仕事を休んでゐるのですから、いよいよ困つてきます。

『イタリアに内亂が起る。』

そういう風に、各國では見てゐました。

かうした時にバリーで平和會議が開かれてゐたのです。

『内亂の起つてゐるイタリアに領地をやる必要はない。』

と、云ふ譯になつたのです。

憎むべきは共産主義です。

イタリアがひどい目にあつたのは、共産主義のためです。

更に赤化の指令です。

『イタリアの軍隊をたたきこはせ！』

絶えざる砲彈の危険に身を曝し、愛する祖國のために、久しき塹壕生活に身の苦難を忍んで、武勳の數々をたて、凱旋して見ると、

『我々が、こんなに品物の不自由してゐるのは、軍隊が戦をしたからだ！』

軍人は我々の敵だ！ 憎むべき敵だ！』

共產主義者はかういつて、イタリー人民をそそのかすのです。

凱旋祝ひどころではありませんストライキをやつてゐる近所に行くと、凱旋兵は袋だたきになつてしまふ有様です。

恐るべく、憎くむべきものは、共產主義者ではありませんか、

ドイツが戦争に敗けたのも、共產主義者が國內を亂したからだと言はれてゐます。

共產主義者は、勝つた國にも、負けた國にも入りこんで、國內を亂してゆく、まるで、傳染病のように、憎くむべきものです。

今、ムツソリニーが、日本と防共協定を結んで、共產主義を世界からなくしたいと

骨折りをしてゐるのは、かつて、イタリアが共産主義のためにひどい目にあつて、よくその悪いことが判つてゐる爲です、

この時のイタリアは捨てゝおいたら、どうなるか譯りません。幾度か、國難を救つた、大ムツソリニーが、いよ／＼偉大な決心をもつて、徹底的にイタリアをたゞきなほし、イタリアを救ふために立たぬ筈がありません。ムツソリニー以外にイタリアを救ふ者はありません。

## 15 ローマ進撃

イタリアに恐ろしい嵐が吹いてゐます。

共産主義者は、イタリアを滅してしまふとしてゐます。

共産主義者は平氣で、

『我々の祖國はイタリアではなくて、ロシヤである。』



隊 ツ ヤ シ 黒 る す 撃 進 と ヘ マ ー ロ

我々われらの都みやこはローマでなくて、モスコ

ーである』

と、云いつてゐます。

共産主義きやうさんしぎの魔術まじゆつにかゝつたイタリー人じん

は、自分じぶんがイタリー人じんであるのか、ロシ

ヤ人じんであるのかわからなくなつてしまひ  
ました。

あゝ、歐洲大戦おうしやうたいせんに大勝利だいしやうりをしたイタリ

ーはまさに滅ほろびようとしてゐます。

町まちにはストライキおこが起つてゐます。

村むらには百姓しやうしやう一揆おこが起つてゐます。

役場やくばや市廳しちやうの役人やくじんの中なかにも共産主義者きやうさんしぎしや

が入りこんでゐます。

國內にはイタリアの國旗がなくなつて、いたるところに赤い旗がたちました。

「イタリア萬歲」と云つた爲に共產主義者に殺されてしまつた人もゐます。

大ムツソリニーはこの國內の様子をどんなに残念に思つたことでせうか。

『覺めよ、イタリア人！』

祖國を賣らうとする、惡人にならうとするのか。

君達は光榮ある、イタリア人であるといふことを忘れたのか』

至るところに現はれて、ムツソリニーは愛國心を呼びさました。

『同志よ來れ！』

しつかと、腕を組んで、祖國イタリアを守る勇士は來れ』

ムツソリニーは、今や叫び、教えるだけでは十分でないことを知りました。

全國にむかつて、愛國の志士を募りました。救國の勇士を求めました。

イタリア人全部が赤化してゐるのではありません。イタリア全部の人達がくさつてしまつたのではありません。

イタリア人の中にはまだ、正しい心の残つた者があります。

イタリア人の中にはまだ、愛國心が残つてゐます。

そした英雄はぞく／＼と、ムツソリニーのところに集つてきます。

全國に支部が出来ます。そのあつまりを、ファツシヨと云ひました。ファツシヨは黒いシャツを着てゐましたから、黒シャツ黨とも云ひました。

ムツソリニーの爲に生命を捧げて働いてもいいと云ふ同志ですから、頼もしいものです。

その中にだん／＼と、共產主義者は騒動を起こしました。劇場を爆破する、罪のない子供を虐殺する。

ムツソリニーはこの時遂に

『悪の武力に對しては善の武力を！』

と、全國の同志に武裝を命じました。

かくして、國民ファシスト黨は全國に三十數萬となつたのです。

これを見た、共產主義者連は慌てました。全國の共產主義者が一時に蜂起して、内亂を起こし、ファシスト黨を撃破しなければならぬと祕密指令を發して、突如總罷業を起し、暴動を開始しました。

ムツソリニーは直ちに全國の同志に向つて、動員令を下しました。

勇敢なるファシスト、黒シャツの一隊は、魔法の如く、イタリーの町々村々に一齊に現はれました。

意久地のない政府は、ただ、うろ／＼してゐるだけです。何をすることも出来ません。

ムツソリニーは政府にむかつて、

『我々は政府に四十八時間の猶豫をあたへる、その間に政府が、暴動を鎮めることが出来ないのなら、ファシストは自由なる行動をとるものである』  
四十八時間たつて、政府は何もすることが、出来なかつた。もはや捨ておくわけにはゆかぬ。ファシストは政府にかはつて、國家を顛覆せんとする、騒動を慎めなければならぬ。

『きつと征伐して見せるぞ、

いや木葉微塵にしてしまふのだ。

あの惡獸共を、一思で！』

ムツソリニーの命令が下りました。

『起て！ 起て！ ファシストよ！

起つてイタリーの國家と、市民を救へ』

ファシスト黨は活動を開始いたしました。



休んでゐた交通機關はファシスト黨員の手で動きはじめました。

全國の工場もファシスト黨の手によつて、仕事をはじめました。

役所にたつてゐた赤旗は下ろされて、イタリア國旗が翻つてゐます。

共產主義者は役所から逐ひはらはれてしまひました。

イタリア人は始めて、そこに、偉大なファシストの姿を見、愛國心に覺めました。

イタリアを救ふものはファシストであると強く感じました。

『救世主！ ムツソリニー！』

全國民は一齊に叫びました。

イタリア政府の中にも共產主義者が居りました。

ローマ市には共產主義者の本部もありました。

ファシストは、これを征伐しなければならぬ。

そして、新しい、輝やかなしいイタリアを建設しなければならぬ。

救世主ムツソリニーは、ローマ入りを斷行することになりました。

七萬の健兒を率ひて、肅々と、ムツソリニーはローマに進撃を開始いたしました。政府部内に巢喰ふ共產主義者は卑怯にも、このファシストを軍隊の力で、壊滅せしめようとなりました。

時の首相ファクタを、そゝのかして、戒嚴令を布かせようとなりました。

戒嚴令が布かれゝば、ファシスト隊と、國王陛下の軍隊と、衝突しなければならな

い。  
イタリア人同士で血を流さなければならぬ。ファシストは賊軍になつてしまふのだ。

ムツソリニーの一大危機である。

時の内閣は己に辭表を提出してありましたが、裁下が未だになかつたのである。そこでファクタ首相は、ローマ全市に戒嚴令を布いて、ファシスト隊を撃滅せんも

のをと、そのかさされるまゝに、慌てゝ宮中に参内いたしました。

『陛下、ムツソリニーが叛亂を起しました。戒嚴令を布かねばなりません。御裁下を申し上げます』

然るに意外

『朕は、戒嚴令に反對ぢや』

『しかし陛下！』

事態は急でございます。一刻も猶豫が出來ません』

英明にわたらせ給ふ國王陛下はムツソリニーの誠忠を已に感じられてゐた。

『ならぬ！』

斷乎！御許しが下されなかつた。

だが！首相は、ファシスト隊、ローマ進撃と聞くや、直ちに戒嚴令を布いてしまつたのであります。

彼は恐る／＼御前に進んで、三たび奏請いたしました。

『陛下！ ファシスト隊は、もはやローマに進撃してゐます。實は先刻、緊急の處置として、戒嚴令は、すでに發令が終つたのであります』

陛下の顔色はサツと變られました。

『何！』

戒嚴令を命令した？

何の權限をもつて、汝はその命令を發したのか？

戒嚴令を命ずるの權は、イタリー國王の大權に屬することは、知らぬ筈はあるまい。汝は國王の大權を干犯しようといふのか！』

ファクタは思はず面を伏せて、答ふる言葉がなかつた。

『それに汝はすでに、辭表を提出してゐる。すでに内閣總理大臣を辭したものは戒嚴令を奏請する權限すらないのだ！』

フアクタ首相は恐懼して闕下を去り、直ちに戒嚴令の取り消しを、各地に電報しました。

つづいて、進撃中のムツソリニーに電報をもつて、組閣の命が降下しました。

かくして、鍛冶屋の息子が、イタリー王國大宰相の印綬を帶ぶべき日が、つひに來たのだ。

いや、新イタリーの夜明けだ。

ムツソリニーは九萬の黒シャツ隊の先頭に立つて、ローマの都に入りました。

見よ！ 彼等の顔は、汗にまみれ、ほこりに染みてゐる。しかし胸の中に燃ゆるものはただ一意専心國を憶ふ、愛國の至情である。われらの力をもつて、イタリーを救はんとの決意である。

かくして、新イタリーは明けてゆく。

英雄ムツソリニーの手によつて、イタリーは甦生してゆくのであります。

## 16 新イタリアの偉力

滅亡の淵を追つてゐたイタリアは、遂に英傑ムツソリニーに依つて、救はれる事になりました。

ムツソリニーは共産主義者や、社會主義者を撃滅いたしました。だらけきつた、イタリア人の心を根本的にたゞき直しました。

イタリアは、まさに、世界のイタリアになるのだ！

イタリアは、まさに、世界の指導者になるのだ！

片田舎の鍛冶屋の息子の力をもつて、全イタリアが甦生した。

この力だ。

この力でイタリアは、世界を甦生せしむることが出来るのだ。

人口の多いのと、領地の廣いのが強いのではない。

どんなことでも、必ずやつてのけようといふ強い心が一番強いのだ。  
 イタリア人は、心から目覺めた。



空をぶつツリニ

つてしまつた。

世界は眼をみはつておどろきました。

目覺めたときから、イタリアはみる／＼強くなつていつた。

産業は發達した。

軍備はととのつた。

文化は進んだ。

ムツソリニーが政權を握つて、僅かに二年の後には、もう歐洲ではおしもおされもせぬ一大強國とな

世界大戦争の時、イタリアを馬鹿にしてゐたイギリスや、フランスは、ひそかにイタリアをおそれてきました。

その頃、世界大戦によつて惨敗したドイツにもヒットラーと云ふ英雄が現はれて、めき／＼と國力をあげて行つた。

かうなると歐洲はイギリスや、フランスだけが意張つてゐるわけにはゆきません。ドイツ、イタリアに相談なしには歐洲の事が、何にも出来ない程になつて、英佛獨伊の四ヶ國協定が出来上りました。

これよりもつと、世界がびつくりした事は、イタリアのエチオピア併合の事件です。

世界大戦争の結果、イタリアは植民地を一寸も貰へなかつた。

しかるに、イタリアは年々五十萬の人口が増加してゆく。

そのイタリア人は、イタリアの國內で出来るものだけでは、生活することが出来な





大演習に於ける部隊の中ツムのソニール首相

い。

どうしても、イタリアは植民地がなければ自滅してしまふ運命にある。

アフリカの黒人帝國エチオピアは、イタリアの三倍の領地と無限の産物があるのに對して人口は僅かに一千萬人しかない。

無限の富である。

鐵がある、石炭がある、金がある、白金がある、石油は無盡藏、栽培法を改善すれば全ヨーロッパの必要位、棉花も出る。

しかも約百年前、エチオピアは、イタリア軍をアドワで、敗走せしめた宿怨の國である。

このエチオピアは歐洲列國並にイタリアを馬鹿にしてゐる。

イタリアは、エチオピアから骨無しだといつて馬鹿にされてゐる。

どうして、エチオピア黒人帝國が、白人の侵略を逃れてゐたのかと云ふとその一つは、エチオピアがまはりに天然の要塞を持つてゐるからである。

エチオピアに入るには、灼熱の沙漠を通るか、千仞の斷崖をよぢのぼつてゆかなくてはなりません。

いま一つは、エチオピアの周圍には、フランス、イタリア、イギリスの領地がとしかこんでゐて、誰もが手を出せない様子にあつたのです。

したがつて、イタリアがエチオピアに手をつけることは、イギリス、フランスと開戦する決心がなければ出来ません。

かうした時にエチオピア兵とイタリア兵が争を起しました。

ワルワル事件と云ひます。

この時ムツソリニーの決心がつきました。

『今だ！』

ムツソリニーが決心すれば、必ずなしとげます。

忽ちに大軍がアフリカに送られました。

フランスは、その頃、ドイツが強大になつて來ましたから、イタリと争ふことが出來ません。フランスは、廣大なサハラ領域と、ソマリランドを、イタリにあたへてしきりと、イタリーの機嫌をとつてゐます。

イギリスは、しかし、これを黙つて見てゐる譯にゆきません。

イギリスは世界平和の指導者だと云つて、威張つてゐたのですから、それだけでもイタリーの戦争をやめさせなければ、列國から信用を失つてしまひます。

信用を失ふだけなら、まだ我慢も出來ませうが、もしも、エチオピアに強力な、イタリみたいなファシヨの國が出來てしまふと一大事です。

埃<sup>エ</sup>及<sup>フ</sup>があぶなくなる。アフリカ各地<sup>かくち</sup>に於<sup>お</sup>ける、イギリスの植<sup>しよく</sup>民<sup>みん</sup>地<sup>ち</sup>があぶなくなる。印度<sup>インド</sup>だつて危<sup>き</sup>險<sup>けん</sup>である。イギリスの各領<sup>かくりやうち</sup>地<sup>み</sup>が皆あぶなくなつてしまふのである。

イギリスの一大問題<sup>だいもんだい</sup>である。

イギリスは何<sup>なん</sup>と<sup>と</sup>かして、イタリー<sup>い</sup>の進<sup>しん</sup>軍<sup>ぐん</sup>を中<sup>ちゆう</sup>止<sup>し</sup>させようとして、いろ／＼の權<sup>けん</sup>利<sup>り</sup>をわけるからと云<sup>い</sup>つたのであつたが、ムツソリニーは強<sup>きやう</sup>硬<sup>かう</sup>に拒<sup>きよ</sup>絶<sup>ぜつ</sup>いたしました。

イタリーは世界<sup>せかい</sup>の強<sup>きやう</sup>國<sup>こく</sup>、イギリスと正<sup>しやう</sup>面<sup>めん</sup>衝<sup>しょう</sup>突<sup>とつ</sup>をいたしました。

世界<sup>せかい</sup>は、どうなることかと、はら／＼しました。

イギリスは早<sup>さつ</sup>速<sup>そく</sup>く、地<sup>ち</sup>中<sup>ちゆう</sup>海<sup>かい</sup>艦<sup>かん</sup>隊<sup>たい</sup>に出<sup>しゆつ</sup>動<sup>どう</sup>命<sup>めい</sup>令<sup>れい</sup>を下<sup>くだ</sup>しました。

航<sup>かう</sup>空<sup>くう</sup>母<sup>ぼ</sup>艦<sup>かん</sup>、戰<sup>せん</sup>艦<sup>かん</sup>等<sup>とう</sup>二十<sup>せき</sup>隻<sup>しつ</sup>、堂<sup>たう</sup>々<sup>く</sup>とイタリーとエチオピアの間<sup>あひだ</sup>に出<sup>しゆつ</sup>動<sup>どう</sup>いたしました。これに對<sup>たい</sup>して、イタリーは、ただちに、七十<sup>せき</sup>隻<sup>しつ</sup>の潜<sup>せん</sup>水<sup>すい</sup>艦<sup>かん</sup>を出<sup>だ</sup>しました。

エチオピアとイタリーが開<sup>かい</sup>戦<sup>せん</sup>すると見るや、イギリスは更<sup>さら</sup>に二十<sup>せき</sup>隻<sup>しつ</sup>を増<sup>ぞう</sup>艦<sup>かん</sup>いたしました。

そして、國際聯盟は、兩國に對して、戰爭停止を要求いたしました。

『今更そんなことが出来るものか』

ムツソリニーは一言の下にはねつけました。

更に國際聯盟は五十二ヶ國の名をもつて、

『イタリアは侵略國なり』

と、定め、進んで、

『イタリアに對して、經濟封鎖をす』

と、宣言しました。勿論、イギリスが中心になつて決めました。

しかし、ムツソリニーは少しもおどろきません。イギリス艦隊の上に、その世界に誇る、優秀航空隊を飛ばせて、若しも、經濟封鎖をすれば、たちどころに、地中海艦隊を撃沈せしめてしまふような氣勢を示しました。

その中に、どん／＼イタリア軍はエチオピアを攻略してゐます。

イギリスも、國際聯盟も、あまりの、イタリーの元氣一杯におそれをなして、手が出せませんでした。

世界五十二國からなる國際聯盟と、イギリス艦隊を、向ふに廻して、イタリーは、少しも恐るゝところなく遂にエチオピアを併合してしまひました。

イギリスも、國際聯盟も、それに對して經濟封鎖をするとか、制裁を加へると、大聲で叫んばかりゐて、何をするにも出來ませんでした。

堂々たる態度で、ムツソリニーは聯盟國を尻目に、エチオピアを併合してしまひました。

今や、イタリーは世界の最強國の中に數へられるようになりました。

ムツソリニーも世界のムツソリニーになりました。

イタリーは完全に救はれました。

ムツソリニーは進んで、世界中を、今よりも、もつと、正しい幸福なものにしようと

かんが考へて來ました。

それには、人類の敵である、共產主義を撲滅しなければなりません。

同じく、世界を正しく、立派なものに導くことを大使命としてゐる我が日本と、イタリーの願望とが一致しています。

イタリーは日本と共に世界を明るく、正しものにしようとして手を伸びてきました。防共協定の締結がこれです。

日伊協定は、世界のもつとも、神聖にして、強い結びつきです。この力は世界を着々と正しいものに改造してゆくのです。

支那事變もそのあらはれの一つです。

友邦イタリーは、日本の美しい、正しいこの大事業を心から、援けてゐて呉れます。私共も友邦イタリーの繁榮を祈らうではありませんか。

## 一二、歴史は教へる

私達わたしどもは、今いま、數千年すうせんねんにわたる、イタリーの歴史れきしを知る事ことが出来できました。

それは、實じつに、いろ／＼と變化へんくわに富とんだ物語ものがたりでした。

偉えらい英雄えいゆうの話はなしもたくさんありました。

たいへんに盛さかんな時代じだいのイタリーもありました。

あまり元氣げんきのない衰おとろえた時代じだいもありました。最後さいごには、イタリーを救すくふ大ムツソリ

ニーの話はなしがありました。

そうした話はなしは、本當ほんたうに、私達わたしたちの心こころをふるひたせます。

カルタゴを破やぶるローマ、

ハンニバルの猛軍もうぐんを撃滅げきめつするローマ。



五十二ヶ國の聯盟國の反對を押し切つて、エチオピアを攻略したイタリア。

私達は、かうした話から、一體何を學ぶことが出来るでせうか。

今、日本は、東洋永遠の平和確立といふ、尊い使命にむかつて、邁進してゐます。

これは、頑迷な蔣政權を打倒するといふだけでは、完成するものではありません。

この尊い使命を完成するには、丁度、ローマが、カルタゴを破つたように、擧國一

致、堅忍持久に加へて、盡忠報國と云ふことが、どんなに大切なことか、よくお判

りになつたと思ひます。

勝つたイタリアが世界大戰の結果、何等、報を得られなかつた歴史は、平和の時に

於いても、國民の心が緊張してゐることの、どんなにか大切であるかといふことを、

私達に教へてゐます。

イタリアのエチオピア攻略に際して、流石の英國ですら、手が出せなかつたといふ

ことは、私達に、國力が充實してゐるといふことが、實に偉大な力であるといふこと

を教へて呉れました。

私達は大切な使命を達成させるために、心をしめてかからなければなりません。

更に、私達は、いま、イタリアの歴史を読み終つて、一番強く感じたことは、日本の國體の尊嚴さであります。

イタリアは世界でも、すぐれた立派な國です。そのイタリアと比べてみて、更に一層尊い國體である日本です。

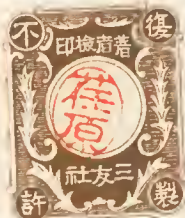
尊嚴な國體をもつ、日本には、また、他のどの國でもなし得ない、尊い使命があるといふことも、當然な事であります。

私達は、尊嚴な國體に生れた幸福に感謝すると、共に、この尊嚴な使命を達成すべき、光榮の義務あることを心から決心しなければなりません。



昭和十三年十月十五日 印刷  
昭和十三年十月二十日 發行

定價 金 壹 圓  
郵送料 金 拾 錢



語 物 - リ タ イ

付 裏

著 者 荏 原 二 郎

發 行 者 東 京 市 四 谷 區 新 宿 一 丁 目 八 十 八 番 地  
北 村 幸 雄

印 刷 者 東 京 市 四 谷 區 本 村 町 四 番 地  
鈴 木 芳 太 郎

發 行 所

東 京 市 四 谷 區 新 宿 一 の 八 八  
振 替 口 座 東 京 二 七 一 三 〇 番

合 資 會 社 三 友 社  
電 話 四 谷 (35) 二 二 一 一 番

# はにるへ與を識知の那支に童兒

沼田利三郎著

## 文庫童 支那の歴史物語

四六判美本  
定價六圓  
送料金十錢

尋常五六年の生徒が讀んでとても面白い支那歴史の物語りである。今日の小學生はあまりにも支那を知らないと言ふ事から、國雄さんと云ふ小供が御父さんからの面白い御話しを毎夜毎夜聞いたのをまとめた本である。家庭の讀みものとしても極めて適當である。課外讀本としておすすすめする。

栗原 靜一著

## 文庫童 支那の地理物語

四六判美本  
定價三圓  
送料金十錢

今度の事變でどこを占領したと云つても、その場所を知らなくては、御話をきいても面白くない。この本は先生と生徒とが、支那の各地を飛行機に乗つたり揚子江を舟で上つたり下つたりして、各地見學した物語である。小學四五年生でも樂々とよめる面白い支那の地理書として、家庭的にだれが讀んでもためになる書物である。課外讀本としておすすすめする。

渡邊 哲夫著

## 文庫童 支那童話讀本

四六判美本  
定價二圓  
送料金十錢

支那の童話を平易に書いたものである。其の内容は裸の王様・蟻の恩返し・駝・四つの願ひごと・命の木外十八種。類書少なき支那童話をして興味深き讀物

三友社發行

東京市四谷區  
新宿一ノ八

合資社

振替口座  
東京一七三〇番